

愛知学院大学考古学発掘調査報告24

岐阜県可児市

大萱窯跡群 弥七田窯跡

第1次発掘調査概要報告書

2017.3

愛知学院大学文学部歴史学科

愛知学院大学考古学発掘調査報告24

岐阜県可児市

大萱窯跡群 弥七田窯跡

第1次発掘調査概要報告書

2017.3

愛知学院大学文学部歴史学科

例　　言

- 1 本書は、岐阜県可児市久々利253-1に所在する大萱窯跡群・弥七田窯跡の第1次発掘調査概要報告書である。
- 2 発掘調査は可児市教育委員会が主体となり、愛知学院大学文学部歴史学科考古学コース教授藤澤良祐がこれに協力するという体制で実施した。弥七田窯跡の第1次調査は、3年次の「考古学専門実習B」の専攻生である上田悠太・木藤穂・小林万容・佐藤美鈴・鈴木愛実・高野夏姫・堀内有・三ツ本樹純、2年次の「考古学基礎実習B」の専攻生である井上雄介・勝野友陽・加藤竜生・田口芽依・中田智也・長繩憲治・前田真奈・松岡里奈・脇田遼の参加のもと、平成27年8月17日から8月27日にかけて実施した。
- 3 発掘調査にあたって、可児市教育委員会の長瀬治義・長江真和氏、荒川豊蔵資料館の加藤桂子氏をはじめ、丸山組・元久々利組の皆様には調査に対してご理解をいただき格別なご配慮を賜った。なお発掘調査には、本学文学研究科院生の森まさか・森村知幸を中心に、研究員の山本智子、本学歴史考古学専攻卒業生の小山美紀・岩月あすか、同4年生の石浜莉那・伊藤真央・垣見太郎・片山尚樹・加藤友也・濱崎健・半場千晴・日比野将之・森秀人・山本駿が参加を得た。
- 4 出土遺物の整理および報告書の作成は、引き続き専攻生によって4年次の「考古学専門演習B」、および3年次の「考古学基礎演習B」において、平成27年9月から平成29年1月にかけて実施した。また平成28年4月からは2年次の「考古学基礎講読B」の一環として、赤山純里・猪飼充・大森裕朗・大矢敬子・糟谷貴幸・川端ちえ美・田浦舞衣・西森睦月・安田彩音・山田紗希が参加した。
- 5 本書は専攻生が分担して執筆し、執筆者名は各文末に記した。編集は藤澤と大学院博士課程の森まさか、大学院修士課程の森村知幸・伊藤真央が行った。なお報告書作成にあたっては、可児市教育委員会の長江真和氏に多大なるご助力をいただいた。
- 6 発掘調査に係わる記録類は、愛知学院大学文学部歴史学科考古学整理室に保管している。

目 次

第1章 発掘調査に至る経緯	1
第2章 遺跡の立地と環境	2
第3章 大萱窯跡群の研究史	4
第1節 戰前の研究	4
第2節 戰後もなくの研究	5
第3節 大窯期・連房期の編年研究の始まり	6
第4節 その後の研究	7
第4章 発掘調査の経過	9
第5章 検出された遺構	12
第1節 第1次調査の調査概要	12
第2節 A区	12
第3節 B区	14
第4節 C-1区	15
第5節 C-2区	16
第6章 出土遺物の概要	18
第1節 碗類	18
第2節 中皿・向付類	20
第3節 調理鉢類	22
第4節 その他	22
第5節 窯道具類	24
第6節 滲着資料および天井支柱	28
第7章 小結	37
第1節 遺物について	37
第2節 遺構について	37
引用・参考文献	39
写真図版	
報告書抄録	
付編1 連房式登窯導入期における天目茶碗について	40
付編2 連房式登窯導入期における窯体構造について	53

挿図目次

第1図	岐阜県可児市位置図	1
第2図	旧可児市の地形	2
第3図	旧可児市の地質	3
第4図	土岐川以北の大窯・連房式登窯分布図	4
第5図	第1次調査区位置図	8
第6図	第1次調査区全体図	11
第7図	第1次調査A区遺構図	13
第8図	第1次調査B区遺構図	14
第9図	第1次調査C-1区遺構図	16
第10図	第1次調査C-2区遺構図	17
第11図	第1次調査出土遺物（1）	19
第12図	第1次調査出土遺物（2）	21
第13図	第1次調査出土遺物（3）	23
第14図	第1次調査出土遺物（4）	25
第15図	第1次調査出土遺物（5）	27
第16図	第1次調査出土遺物（6）	29
第17図	第1次調査出土遺物（7）	30
第18図	第1次調査出土遺物拓本（1）	31
第19図	第1次調査出土遺物拓本（2）	32

写真図版目次

図版1	トレンチ全景・A区関係（1）
図版2	A区関係（2）
図版3	A区関係（3）・B区関係（1）
図版4	B区関係（2）
図版5	C-1区関係
図版6	C-2区関係（1）
図版7	C-2区関係（2）・完掘後全景
図版8	第1次調査出土遺物（1）
図版9	第1次調査出土遺物（2）
図版10	第1次調査出土遺物（3）
図版11	第1次調査出土遺物（4）
図版12	第1次調査出土遺物（5）
図版13	第1次調査出土遺物（6）

表目次

第1表	第1次調査A区出土遺物台帳	33
第2表	第1次調査B区出土遺物台帳	33
第3表	第1次調査C-1区出土遺物台帳	34
第4表	第1次調査C-2区出土遺物台帳	34
第5表	第1次調査表採出土遺物台帳	34
第6表	第1次調査出土遺物計測表	35
第7表	第1次調査出土遺物個体数	38

第1章 発掘調査に至る経緯

愛知学院大学文学部では、平成14年度に歴史学科に考古学コース（先史考古学・歴史考古学）を開設し、新入生が3年次となる平成16年度には、考古学の基礎技術を習得するための必修科目として「考古学実習」を開講し、合宿形式により遺跡の発掘調査を実施することになった。そして平成18年度からはより高度な技術習得のため、従来の「考古学実習」を、2年次の「考古学基礎実習」と3年次の「考古学専門演習」に分離し、2年次から発掘調査に参加することになった。調査地の選定にあたって、本学が所在する東海地方は古代以来の窯業生産の中心地域で、数多くの窯跡が分布し古くから考古学的調査が行われていること、近年では中世窯・近世窯の生産や流通に関する調査研究が盛んであることから、歴史考古学専攻では窯業遺跡の発掘調査を実施したいと考えていた。

はじめに発掘調査に着手したのは岐阜県中津川市に所在する中津川窯で、中世中津川窯は昭和33年に発掘調査が初めて実施され研究の歴史が古いにも拘らず、生産の実態について不明な点が多いことから、中津川市教育委員会の協力のもと、考古学実習の初年度に当たる平成16年度には尻無1号窯跡の試掘調査を、平成17年度には上県2号窯跡の試掘調査を実施した。このうち上県2号窯跡は窯の遺存状況が良好であったため、平成18年度から平成24年度にかけて5基の窯の発掘調査を行い、平成25年度には実測図を作成し一応の調査が終了した。

さて平成24年度以降、歴史考古学専攻では次なる調査地の選定を進めていたが、そのような折、可児市教育委員会より、岐阜県指定史跡である大萱窯跡群（美濃窯跡群大萱支群）の国指定史跡を目指すため、指導組織として「大萱古窯跡群調査・保存・整備指導委員会」を設置し、発掘調査を実施したいので可児市に協力できないかとの打診があった。大萱窯跡群は、牛田洞・大萱窯下・弥七田の3窯跡から構成され、昭和初期には牛田洞窯跡は荒川豊蔵氏、大萱窯下窯跡は加藤唐九郎氏によって調査されており、黄瀬戸・瀬戸黒・志野・織部といいったいわゆる桃山茶陶を生産した窯跡群として著名である。しかし出土遺物については多くの著書で紹介されているにも拘わらず、正式な学術調査は実施されていないことから、遺跡や遺構の実態については不詳といわざるを得ない。また隣接する土岐市では元屋敷窯跡をはじめ多くの大窯や連房式登窯の発掘調査が行われ実態の解明が進んでいるが、可児市域では当該期の窯跡の発掘調査は皆無であり、美濃窯土岐川以北における桃山茶陶生産の地域性を考える上で極めて重要な発掘調査となることは確実であった。

そこで歴史考古学専攻としては、可児市教育委員会に協力するという体制で「考古学実習」を行うこととし、平成25・26年度には牛田洞窯跡の発掘調査を実施した（愛知学院大学2016）。そして、平成27年度には弥七田窯跡の窯体構造を明らかにするため発掘調査に着手することになった。

（藤澤良祐）

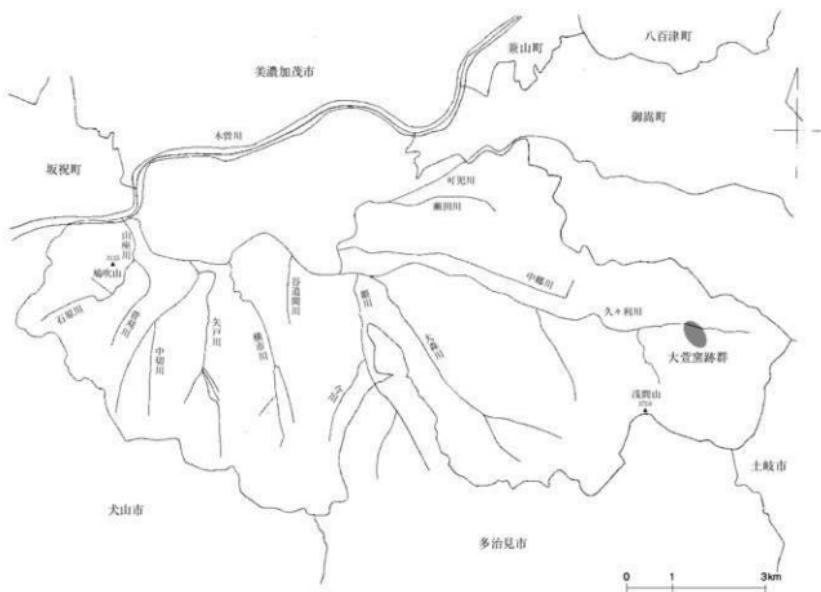


第1図 岐阜県可児市位置図

第2章 遺跡の立地と環境

岐阜県可児市は、岐阜県の中南部に位置し、中部圏の中心都市である名古屋市および岐阜県の県庁所在地である岐阜市から30km圏で、1982年に可児町が市制を施行し誕生した。2005年には可児郡兼山村を合併し現在に至る。北西部は木曽川を挟んで美濃加茂市、北東部は可児郡御嵩町、東部は土岐市、南部は多治見市、西部は愛知県犬山市と接し、面積は約84.9km²である。ただし、弥七田窯跡が所在する大萱窯跡群は旧可児市域に所在するため、ここでは旧可児市の地形と地質について概述する。

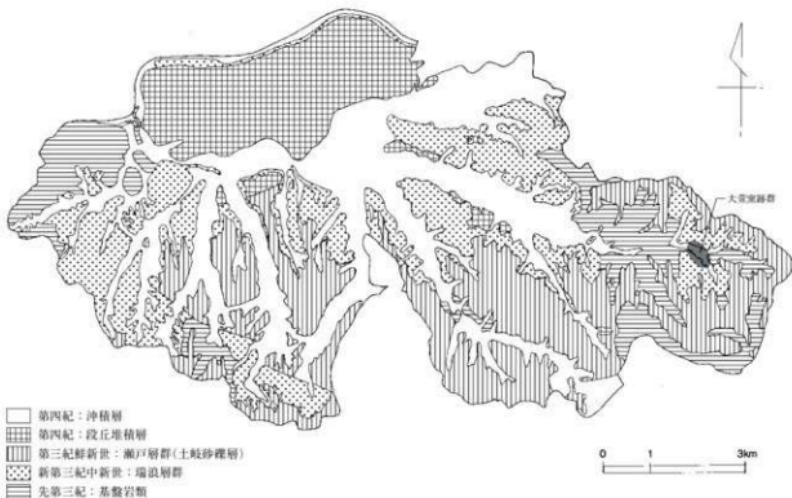
旧可児市は美濃加茂市、加茂郡坂祝町、同川辺町、同八百津町に広がる盆地状の地形の一角にある。市内では木曽川左岸や可児川、久々利川の流域沿いに平地がみられ、市の北部を除くと平地の周りを山地が取り囲んでいる。標高は一番低い地点が市北西部木曾川の市内最下流地点の44m、一番高い地点が市東部の浅間山頂372mである。北端には木曾川が流れしており、源流は長野県木祖村の鉢盛山である。また、旧可児市を東から西にほぼ横断するように可児川が流れている。源流は御嵩町の松野湖で、市の北西部で木曾川に合流している。東部から発する久々利川は、市の南から流れる大森川や姫川を集めて、市のほぼ中央部で可児川と合流している。これらの流域は、河川の堆積作用により平地となって



第2図 旧可児市の地形（可児市2007を基に作成）

いる。木曾川の両岸には河岸段丘が形成され、市内においては主に木曾川と可児川に挟まれた地域で河岸段丘独特の地形がみられる。段丘は大きく、高位段丘、中位段丘、低位段丘の三つに分けることができ、高位ほど形成時期が古くなる。また、高位段丘と中位段丘はさらに2段に、低位段丘はさらに数段に分けることができる。旧可児市の約3分の2は山地であるが、山地を形成している岩石が浸食を受けやすく、山地の標高の大部分は150mから300mである。そのため平坦でなだらかな丘陵地となっている。標高が300mを超えるのは、市東部の浅間山(372m)と西部の鳩吹山(313m)である。この地域は、チャートなどの比較的固い岩石からできている。そのため、この地域の山地は浸食を受けにくく谷が少ない(可児市2007)。

旧可児市とその付近の地質は美濃帯中世層を基盤として、新第三紀の瑞浪層群、瀬戸層群、第四紀の段丘堆積物などの堆積物が覆って分布している。瀬戸層群は約2500～1900万年前に古木曾川により形成され、下位から土岐口陶土層、土岐砂礫層に大別される(可児市2007)。多治見市、土岐市、瑞浪市、恵那市、中津川市、旧可児市に広く分布し、土岐口陶土層は多治見市、土岐市付近に最もよく発達している(斎藤基生1989)。旧可児市内には土岐砂礫層が見られ、土岐口陶土層は分布していない。大萱窯跡群は主に瑞浪層群の平牧層に分布している。(森村知幸)



第3図 旧可児市の地質(可児市2007を基に作成)

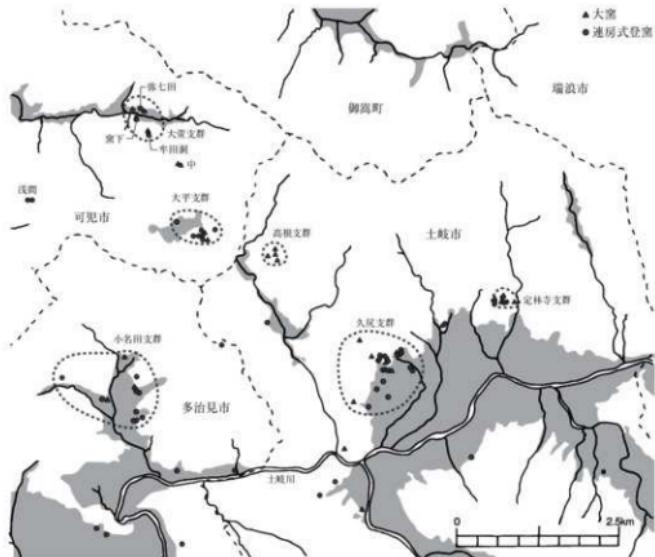
第3章 大萱窯跡群の研究史

土岐川以北の大窯・連房式登窯は大きく可児郡側と土岐郡側に分けられ、土岐郡側には久尻支群・小名田支群・高根支群・定林寺支群が存在している。可児郡側には大平支群・大萱支群が存在しており、今回調査した大萱支群における大窯は牟田洞窯・窯下窯・向林窯・若林窯・岩ヶ根窯が、連房式登窯は弥七田窯が『可児市史』で紹介されている（可児市2005）。しかし、実際に窯跡が確認されているのは牟田洞窯跡・窯下窯跡・弥七田窯跡の3基のみである。

第1節 戦前の研究

大萱窯跡群の研究は昭和5年（1930）、陶芸家で後に人間国宝となる荒川豊蔵氏が、名古屋でみた志野窓絵向付と同じ絵付けの陶片を、牟田洞窯跡で発見したことに始まる。当時、桃山茶陶は窯跡の実態が不明のまま、瀬戸で焼かれたといわれていたが、荒川氏により桃山茶陶は美濃で焼かれていたことが明らかになり、大萱窯跡群は多くの人に知られるところとなった。その後、大発掘ブームが起り、窯の調査が進んでいく契機となる。

昭和7年（1932）、陶芸家の加藤唐九郎氏は窯下窯の発掘調査を行った。そして、窯下窯で多くの黄瀬戸を焼成していたことを明らかにし、焼成年代を決める「文禄二年（1593）八月」銘の黄瀬戸皿が発見された。そして加藤氏は黄瀬戸を瓷器手・グイ呑手・アヤメ手・菊皿手の4種に分類し、その中のグイ呑手、アヤメ手を以って本格的な黄瀬戸として扱う考えを示した（加藤1933）。



第4図 土岐川以北の大窯・連房式登窯分布図（高橋他2006を一部改変）

その後、高木康一氏は加藤氏が行った分類を扱って、アヤメ手のみを黄瀬戸とし、志野とともに黄瀬戸を焼成しない窯をA類に、する窯をB類に分類した。また、志野では無地志野・線刻志野・鼠志野・赤志野・紅志野・練上手志野の6種に分類を行い、黄瀬戸とともに志野を焼いている窯をA類に、黄瀬戸がみられない窯をB類に、さらにA類・B類でみられたいわゆる桃山茶陶の志野ではないものを焼いている窯をC類に分類を行った。この志野C類は土岐川以南の恵那郡側に立地する窯であり、志野A類（黄瀬戸B類）の窯では黄瀬戸が志野より下層から出土していたことから、高木氏は志野A類・B類・C類を時期差と考えていると推測される。織部では織部黒・青織部・赤織部・白釉手織部の4種に分類して、織部全盛期で優れたものを焼いている窯をA類に、織部末期頃のものだが精巧ものを焼いていた窯をB類に、B類より下手物を焼いていた窯をC類に分類し、同様に時期差のように考えていたと思われる。瀬戸黒は分類こそ行われていないものの、技法や形態的特徴のはか織部の窯から出土する黒茶碗を織部黒・黄瀬戸・志野窯から出土する切立型の底の平らな茶碗を瀬戸黒とすると、瀬戸黒は黄瀬戸A類・B類、およびC類以外の志野の窯で焼かれていることを述べている。この中で、牟田洞窯跡・大萱窯下窯跡は黄瀬戸B類・志野A類に、弥七田窯跡は織部A類に分類されている（高木1936）。

また、加藤唐九郎氏は『美濃古窯文書』の紹介を行い（加藤1936）、その中の「大萱窯之記」によると、大萱には窯之坂窯（源十郎控窯・現在の牟田洞窯）に5基、窯下窯（四右衛門窯）には2基、岩ヶ洞窯（伝七窯）には1基、向林窯（徳右衛門窯）には2基、若林窯（志郎三郎窯）には2基、八剣招窯（忠蔵窯・現在の弥七田窯）には1基の窯があったと記している⁽²¹⁾。この『美濃古窯文書』の紹介により、文献における研究も活発に行われていくようになる。

第2節 戦後間もなくの研究

昭和28年（1953）、加藤土師萌氏は織部焼を体系的にまとめ、志野を高木氏の分類に絵志野を加えた7種に、織部を青織部・鳴海織部・赤織部・黒織部・志野織部・伊賀織部・唐津織部の7種に分類した。この中で志野の発祥を牟田洞窯に求めており、青織部系の窯は久尻・大平・大富とまとまっているのに対して、大萱に属する弥七田窯は若干距離を置いているもので、他の青織部に比べ特異性のあるものを焼いていると評している（加藤1953）。

また、一瀬武氏は大萱窯の開祖である源十郎景成の開窯時期に関して、景春系譜では景春の三男で大萱開業は天正5年（1577）となっているのに対し、大平系譜では景豈の二男で開窯は慶長6年（1601）となっており、これは景成が天正14年ごろ笠原町へも行っていることなどから年代が混同視されているのではとの指摘を行った（一瀬1966）。さらに大萱支群について、「中窯は志野・黄瀬戸を焼き、牟田洞は最も古い窯で黄瀬戸、天目・志野・織部を焼いている。窯下の黄瀬戸は大平・浅間よりも新しいがその製品は技術的にすぐれているようである。弥七田は織部、黒織部を焼き、」と相対的な操業順序を述べている。

昭和40年（1965）には荒川豊藏氏が志野を体系的にまとめ、古文書等から志野の起源と名称を考察している。また、荒川氏は大萱にみられる牟田洞窯・窯下窯・中窯・弥七田窯について、「大萱窯之記」にある「窯之段窯」源十郎控窯が牟田洞窯、「若林窯」「向林窯」がおそらく中窯であるとしている。志野の分類に関しては無地志野・絵志野・鼠志野・赤志野・紅志野・練り込み志野の6種に分類が行われている（荒川1965）。一方、奥磯氏は荒川氏の考えとは異なり、若林窯・向林窯を中窯とは別のものと考えている（奥磯1971・1976）。

また加納陽治氏は、高木氏が弥七田窯跡の資料採集を行った際に窯体について述べた感想ノートを紹介しており、それによると「大萱弥七田窯跡中、その東側にある窯は斜床連房式登り窯であり、幅五尺、奥行四尺、狹間は四角の柱をもって形成せられて居ること。および、発掘の結果によれば窯床は上下二重になって居る点よりして古き窯床の上に新しい窯床を設けてあること。窯の側壁は古き窯と全く同一の窯を築きたるもの如きこと。窯の後部の窯天井の残れるものより考うるに、この窯の天井の高さは精々三尺までにして、到底人が自由に立って出入し得る如き程のものには非ること。また窯の出入口は左側方にありしものなること。窯の両側の斜面に数箇の段らしものあるは、久尻元屋敷、清安寺西、御深井窯跡等においても散見する所なれども弥七田古窯跡の左方出入口の所に同様に段あるを見れば、これは明かに窯詰、差木の便に設けられた段なること。今日の登窯におけるが如くなるべし」と記されている（加納1973）。この文章の、「東側にある窯」というのは1基の窯が東にある窯ということなのか、東面に2基並んで窯があったということなのか、また「窯床は上下二重になって居る」というのが1基の窯の床面に2面構築されていたのか、別の窯の床面を指すのかといった解釈が可能であり、詳細は不明のままである。

第3節 大窯期・連房期の編年研究の始まり

昭和48年（1973）、植崎彰一氏を中心に美濃古窯研究会が結成され、昭和51年に『美濃の古陶』が刊行された。これは昭和44～46年（1969～1971）にかけて中央自動車道建設に伴い行われた発掘調査によって、考古学的研究が進み、古代から近世に至る美濃窯業史の流れと問題点を段階ごとにまとめたものであった。この中で植崎氏は美濃窯における大窯期の編年を行っており、大窯期は窯の様相からⅠ期からⅤ期に細分され、Ⅰ期に小名田窯下1号窯、Ⅱ期に藤四郎窯・妙土窯、Ⅲ期に尼ヶ根窯1号窯・定林寺東洞1号窯、Ⅳ期に山之神窯・浅間窯、Ⅴ期に牟田洞窯・大富西窯を標識窯として設定した。そして、Ⅰ期が16世紀の初頭に、Ⅲ期が天文年間に、Ⅳ期が天正以前、Ⅴ期が天正年間に展開したと推測し、各期におよそ20年の幅を与えている。またⅢ期に瀬戸黒が、Ⅳ期に灰志野・黄瀬戸が、Ⅴ期に志野が出現するとしている（植崎1976）。

さらに、今井静夫氏は美濃大窯の分布と立地についてまとめており、窯体規模・品種・製造技術から主に志野製品の主体として大きく3期に分けている。大窯で試作期の志野製品が登場する以前の窯として、笠原町妙土・陶ヶ丘窯、土岐市妻木町グミノ木・窯下1号・窯下2号窯、土岐津町藤四郎窯、泉町丸石東・深沢・赤サバ・東洞1号窯、駄知町坊洞・有古窯、多治見市小名田町小名田窯下1号・白山・尼ヶ根1号窯、瑞浪市陶町田尻下窯が挙げられている。次段階には志野試作期の窯として、尼ヶ根2号・大平山之神・中の1窯・定林寺西洞1号・隠居表・隠居西・元屋敷付近の1窯・妻木窯下3号・牟田洞の1窯が挙げられ、地域によって若干隔りがみられると指摘している。志野最盛期の大窯が集中し桃山茶陶を代表する窯場としては、大萱・大平・久尻・陶地城が挙げられており、特に秀品の志野を焼いている窯場は大萱で、大平・久尻が次に次ぐものであり、このことは大窯から連房式登窯へと繋がる深い関係があると推測している（今井1976）。

なお、奥磯栄龍氏は大萱窯跡群の年代観について、牟田洞窯跡は志野全盛期の窯であり焼成年代最下限を文禄2年頃に、窯下窯は黄瀬戸・志野を焼成した窯で操業年代は1585～1600年頃に、弥七田窯は絵志野や織部、美濃青磁（御深井）などの代表的なものを焼成しており操業年代は1610～1630年頃の窯と推測している。向林窯は明治初期に破壊され消滅してしまったが、田畠一面から出土した陶片から

1585～1600年頃までと推定され、絵志野では牟田洞窯・窯下窯にはないものがあり、久尻元屋敷窯とやや時期が重なる。若林窯は窯下窯と向林窯出土の遺物に類似し、年代は同じころのものと示している（奥磯1976）。

その後昭和58年（1983）に五島美術館においてシンポジウム「江戸のやきもの」が行われ、橋崎彰一氏は近世美濃窯を1期からV期の5つに区分を行って発表し、この編年観によって近世美濃編年の基礎が構築され始めていく（橋崎1983）。

第4節 その後の研究

井上喜久男氏は『美濃の古陶』の大窯V期区分の基準資料を紹介し、牟田洞窯跡や窯下窯跡が最終の大窯V期にあたる見解を示している（井上1988）。

さらに斎藤基生氏は、荒川豈蔵氏の収集品で牟田洞窯跡出土と断定できるものだけを扱い、遺物の報告を行っており、焼成器種や特徴、窯体から従来いわれている16世紀後半の、井上氏と同じく大窯V期に該当するものであると述べている（斎藤1989）。

平成2年（1990）、橋崎彰一氏は大窯後期を含め近世美濃窯の編年を6段階15窯式に編年し、第1段階（美濃大窯Ⅲ～V期）を尼ヶ根窯式・浅間窯式・牟田洞窯式の3時期に、第2段階（連房Ⅰ）を元屋敷窯式・窯ヶ根窯式の2時期に、第3段階（連房Ⅱ）を清安寺窯式・田ノ尻窯式の2時期に、第4段階（連房Ⅲ）を乙坂東窯式・可児郷窯式・下原窯式・上手向日向窯式の4時期に、第5段階（連房Ⅳ）を平野東窯式・水神Ⅰ窯式・水神Ⅱ窯式の3時期に、第6段階（連房Ⅴ）を白粉窯式に細分を行った。そして、第1段階を16世紀後葉から17世紀初頭に、第2段階を17世紀前半に、第3段階を17世紀中葉に、第4段階を17世紀後葉から18世紀中葉に、第5段階を18世紀後葉から19世紀前半に、第6段階を19世紀中葉から後半に比定した。

さらに、田口昭二氏は橋崎氏の編年観を踏襲しながらも、一部に遺物の型式を捉えて、近世美濃V期編年の連房Ⅲ期を3時期に、連房Ⅳ期を2時期に、連房V期を明治初期まで含めて2時期に細分し、V期9小期に編年を行った。そして、弥七田窯跡を連房Ⅰ期の後半に位置付けている（田口1993）。

さらに『可児市史』では、各窯の出土遺物について述べられ、大窯では藤澤良祐氏の瀬戸美濃大窯編年を（藤澤2002）、連房式登窯では田口氏の編年を使用し、これらの編年から大萱窯下窯は大窯第4段階～連房Ⅰ期前半、牟田洞窯は大窯第4段階、弥七田窯は連房Ⅰ期後半～Ⅱ期前半に比定している。また、若林窯・向林窯は中窯と別ものとされており、現在ではこの考えが主流であるが、若林窯・向林窯に関しては窯体が滅失しているため、不明のままである（可児市2005）。

美濃における大窯期後半から連房式登窯導入期の窯場について、土岐郡側の久尻地区では発掘調査や研究が盛んに行われてきた。しかし、可児郡側では窯の調査が行われておらず、様相があまりわかつっていない。今後の発掘調査を通して、可児郡側における窯の実態を探ることが、美濃における近世窯業の研究に必要となってきている。

（森まさか）

第5図 第1次調査区位置図



第4章 発掘調査の経過（発掘調査日誌）

8月17日(月) 雨のち曇り

午前9時に大学に集合し、発掘道具を積み込んでから現地に向けて出発した。現地に到着後、弥七田窯跡の試掘範囲を確定するため、周辺の草刈り、窯道具等の遺物採集を行った。一応の清掃作業が終了したため、全景写真を撮ったのち調査区城丘陵斜面山側の杭A、丘陵斜面の谷側に杭Bを打ち、さらに杭Aから東に2.0mの地点に杭Cを打った。東西0.5m、南北13.424m試掘坑（トレーニチ）を設定し、その後、A・B・Cの3班に分け作業を開始した。

8月18日(火) 晴れ

A班の調査区をA区、B班の調査区をB区、C班の調査区をC区とし、各班とも設定した調査区の写真撮影を行ったのち発掘作業を開始し、まず表土と腐植土の除去を行った。各調査区ともに表土後に写真撮影を行ったのち、掘り下げを開始した。C区では調査区の上方から床面らしきものが検出されたため、これを床面として引き続き掘り下げ作業を進めた。

8月19日(水) 晴れ

A区では窯壁と床面が検出されたため、窯体構造を確認する目的として杭Aから南に1.4m地点より東に20mになるように拡張を行った。B区では床面が検出されたため、杭Aから5.4m地点より東に1.5m、南に1.5m拡張し、調査区を設定した。C区では床面を確認したため、杭Bから東に0.75m拡張し、腐植土の除去と引き続き掘り下げを行った。

8月20日(木) 雨のち曇り

午前中は降雨のため可見市郷土資料館と元屋敷窯を見学、午後から作業を行った。A区では上方にて黄褐色土を検出し、清掃を行ったのち写真撮影を行った。同時に、拡張した範囲を引き続き掘り下げ作業を行った。下方ではA区とB区間の床面を検出するため、杭Aから東に1.0m、南に1.2mとなるよう拡張した。B区では引き続き拡張部の床面を検出を目指し掘り下げを進めた。さらにB区とC区間の掘り下げを開始し、杭Aから7.6m地点より東に1.0m、南に2.0mの拡張を行った。B C区間の調査区をC-1区と改め、以後C区をC-2区として調査を進めることになった。C-2区では引き続き拡張部にて床面の検出のため掘り下げを進めた。床面は南へと続いていると思われ、さらに杭Bから東に1.25m、南に0.5m拡張し掘り下げ作業を行った。

8月21日(金) 曇り

A区では引き続き拡張部の掘り下げを進めつつ、西側の窯壁（左側壁）の検出に伴い杭Aから19m地点より東に3.0m、南に0.5m拡張を行い、東側の窯壁（右側壁）の検出を目指した。B区では引き続き拡張部の床面を検出するため掘り下げを進めた。また、調査区の上方にて、匣鉢に粘土を詰めたものが重なって検出されたので、周りの清掃を行ったのち杭Aから4.2m地点より東に1.0m、南へ1.2mになるよう調査区を設定し、掘り下げ作業を行った。その後、床面の清掃を行い、写真撮影を行った。C-1区では引き続き拡張部の床面を検出するため掘り下げと清掃を行った。C-2区は引き続き拡張部の掘り下げを進め、そして南に床面が続いていると思われたため、杭Bから0.5m地点より東へ1.25m、南へ1.0m拡張を行った。

8月22日(土) 曇りのち晴れ

A区では床面と左側壁を検出したのち、清掃を行った。B区では、拡張部の南側を掘り下げ、全体的

に清掃を行った。C-1区は床面を検出されたのち、清掃作業を行った。C-2区では、拡張していない部分は清掃作業を行い、杭Bから北へ125m地点に設定してあった釘を北へ0.5m移動させ、その地点より東へ1.3m拡張を行った。

8月23日(日) 晴れ

A区では右側壁と床面を検出するため引き続き掘り下げ作業を進めた。B区では拡張部をさらに掘り下げ、床面から匣鉢に粘土を詰め重ねた痕跡を3本検出した。C-1区は床面検出に伴いB区と同様の痕跡を上方と下方の2カ所確認した。C-2区では拡張部を引き続き掘り下げ作業を進めた。各調査区ともに掘り下げ作業を終了したのち、清掃作業と写真撮影を行った。

8月24日(月) 晴れ

各調査区とともに西壁土層断面図の作成を開始した。C-2区では西壁土層断面図を完成させ、割付を開始し、平面図の作成を行った。

8月25日(火) 雨

A区・B区では引き続き西壁土層断面図の作成を行った。A区・B区・C-1区は割付を開始し、平面図の作成を行った。C-2区では引き続き平面図の作成を行った。同時進行で出土遺物の洗浄作業を開始した。

8月26日(水) 雨

A区では西壁土層断面図を完成させ、引き続き平面図の作成を行った。B区・C-1区では西壁土層断面図・平面図を完成させた。C-2区では平面図を完成させ、見通し図の作成を開始した。引き続き出土遺物の洗浄作業を行った。

8月27日(木) 晴れ

A区では平面図と見通し図を完成させた。B区・C-1区では、平面図を完成させ、見通し図の作成を行った。見通し図作成に伴い、匣鉢に粘土を詰め重ねたものは狹間であると考えていたが、隔壁を有していないことから、天井支柱であると判断した。C-2区では引き続き見通し図の作成を行った。引き続き出土遺物の洗浄作業を行った。

8月28日(金) 曇りのち雨

各調査区とともに見通し図、縦断面図の作成が完了し、現場保護のため各調査区にブルーシートを掛け、遺物や測量において最低限使用するもの以外の機材を大学の方へ持ち帰り、発掘現場から撤収した。

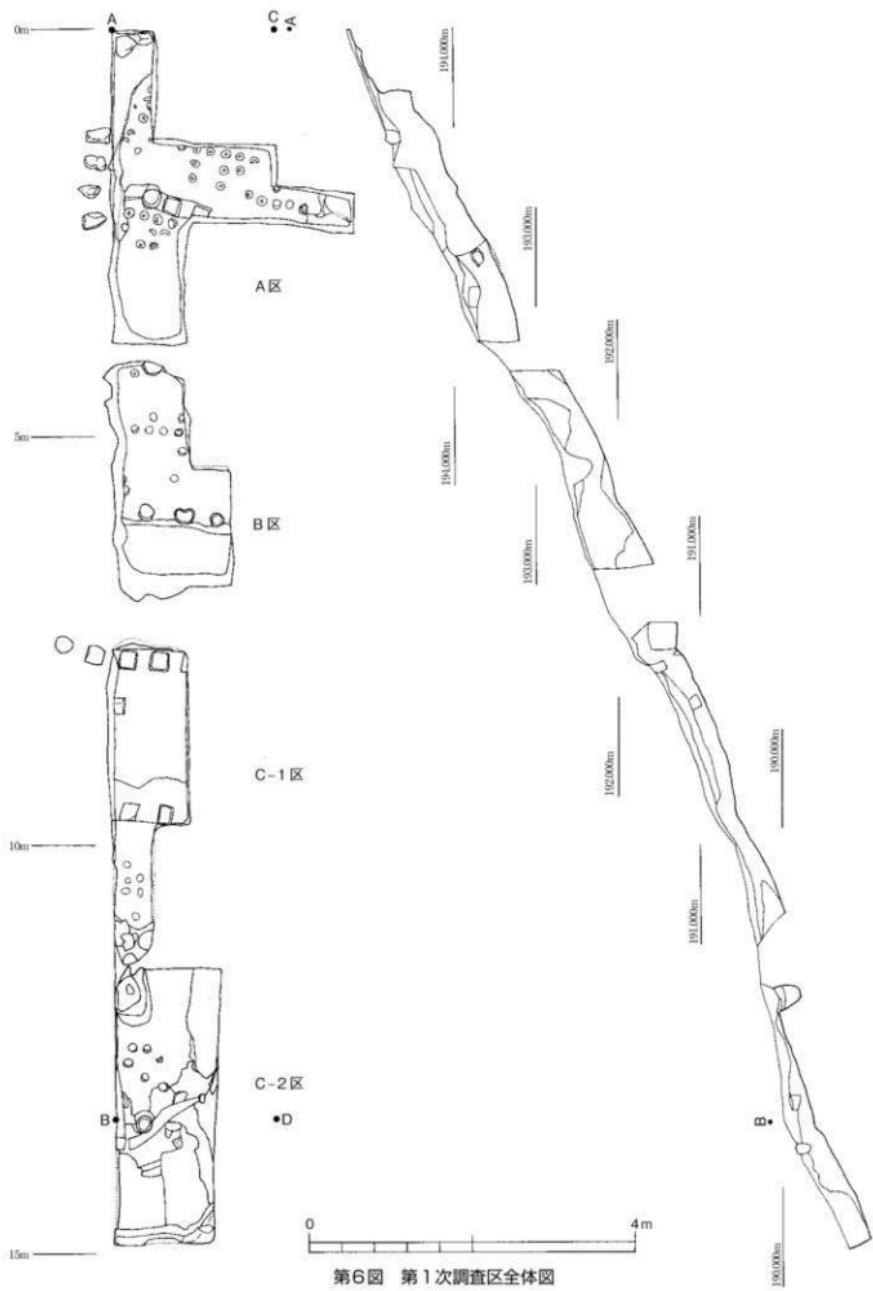
8月29日(土) 曇り時々晴れ

残りの機材等を運び大学に帰還し、第1次調査を終了した。

9月20日(日) 晴れ

可児市教育委員会と合同で現地説明会を開催した。

(伊藤真央・田口芽衣・松岡里奈)



第6図 第1次調査区全体図

第5章 検出された遺構

第1節 第1次調査の調査概要

弥七田窯跡の第1次調査（平成27年度）は、窯体の範囲と構造を確認するため、匣鉢やヨリ輪が多く散布している斜面に、杭Aを基点とし東西0.5m、南北13.424mの試掘坑（トレンチ）を設定し、調査を行った。調査の結果、窯体の側壁、柱や床面が検出されたため、トレンチをA区・B区・C-1区・C-2区に分割してさらに調査を進めた。A区・B区・C-1区は1号窯に伴う遺構、C-2区は2号窯に伴う遺構である。

A区は杭Aから東に0.5m、南に3.8mの調査区を設定した。調査の結果、窯体の側壁、床面、天井支柱が確認されたため、窯体の範囲確認を目的として調査区の東側に拡張を行った。拡張部は杭Aから1.4m地点より東に1.5m、南に1.0mを新たに設定し、調査を行ったところ床面と焼台を検出した。また、天井支柱の床面を確認するために東に0.5m、南に1.4mの拡張を行った。さらに、1号窯焼成室の最大幅を確認するため、拡張部からさらに東に1m、南に0.5m拡張を行った。

B区は杭Aから南に4.2m地点より東に0.5m、南に2.42mの調査区を設定した。床面が確認されたため、杭Aから5.4m地点より東に1.5m、南に1.3mを設定し、調査を行ったところ東側に天井支柱の基底部と床面が確認された。下方では匣鉢が多く確認されたため、東に1.5m、南に0.2mを設定した。調査区の上方では天井支柱の一部が確認されたため、調査区の東に0.5m、南に1.4mを新たに設定し、調査を行った。

C-1区は杭Aから南に7.6m地点より東に0.5m、南に3.4mの調査区を設定した。上方で天井支柱と思われるものが検出され、さらに中央部では床面が検出されたため、トレンチの東側に拡張を行った。拡張部は東に0.5m、南2.0mの調査区を設定した。

C-2区は杭Aから南に11.5m地点より東に0.5m、南に3.4mの調査区を設定した。C-1区で検出された床面とは異なる床面が検出されたため、トレンチの東側に拡張を行った。杭Bから東に1.25m、北に1.25mとなるように調査区を設定した。調査を行ったところ、床面は南に続いており、焼台と思われるものも検出されたため、さらに杭Bから南へ0.5m拡張したところ床面が確認された。引き続き床面検出のため、杭Bから南へ1.5m拡張を行った。また、床面と窯壁の検出のために杭Bから北へ1.25m地点にある釘をさらに北へ0.5m移動させ、そこから東に1.3m拡張を行った。 (伊藤真央)

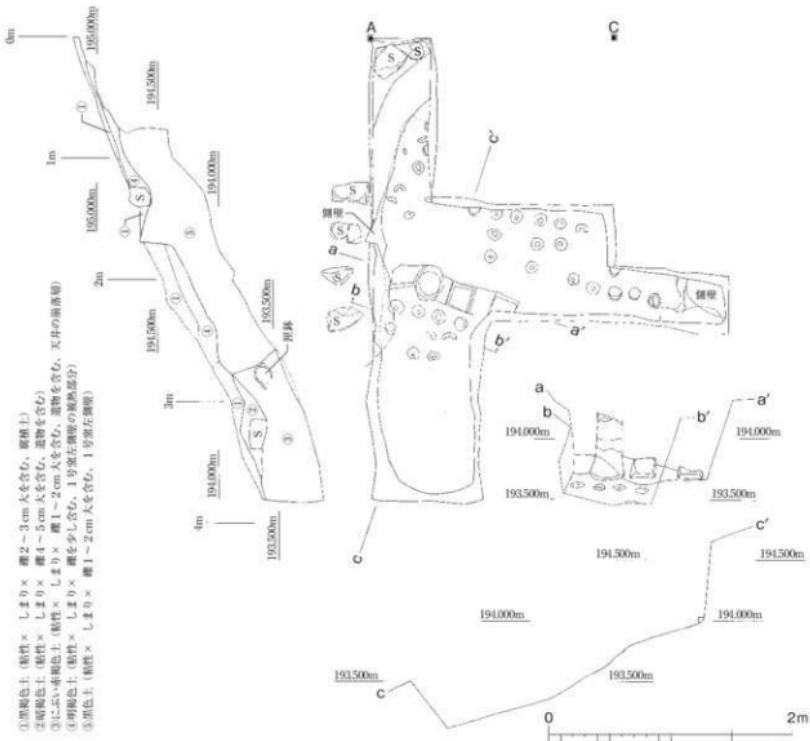
第2節 A区（第7図）

1. 調査区の設定

杭Aから南に3.8mまでをA区として設定した。杭Aから東に0.5m、南に1.4m、杭Aから南に1.4m地点より東に2.0m、南に0.5m、杭Aから南に1.9m地点より東に3.0m、南に0.5m、杭Aから南に2.4m地点より東に1.0m、南に1.4mの調査区である。 (佐藤美鈴)

2. 西壁土層断面図

A区の土層断面図は1面提示した。杭A地点の標高は195.190m、杭Aから南に3.8m地点の標高は193.630mである。土層は①～⑤層が確認された。全ての土層において最上層は①黒褐色土が堆積している。北側では④明褐色土が⑤1号窯左側壁を覆うように堆積している。⑤層は長さ1.8m、最も深いところで55cmみられ、中央では僅かに⑥層が露出した状態で検出されている。南側では①②層の順に堆積をみせ、その下層には天井の崩落層である③にぶい赤褐色土が約45cm前後堆積し、匣鉢や窯道具の堆積がみられる。 (勝野友陽)



第7図 第1次調査A区遺構図

3. 検出された遺構

A区では、1号窯床面と両側壁、天井支柱が検出された。1号窯に伴う床面の状況は、粘土を塗った貼床で被熱により硬化し、よく焼けているため黒褐色を呈している。さらに、多数の焼台や焼台痕が溶着した状態で検出された。A区の床面傾斜は天井支柱より上方で約30°前後傾斜し、下方では約20～25°傾斜しているのが確認された。

調査区の左側と右側にそれぞれ1号窯に伴う両側壁が検出された。1号窯左側壁は残存長1.8m、高さは約55cmで、形状はやや内傾しながら立ち上がる。左側壁は灰黒色を呈しており、よく焼き締まっている。右側壁は僅かに検出されたのみであるが、茶褐色を呈し、よく焼き締まっている。残存長は約30cmである。左側壁と右側壁との幅は約2.5m前後である。なお、左側壁の地表面には約25～30cm大の石が四つ並んで検出された。

床面中央部からは円形と方形の天井支柱の痕跡が10cm前後の間隔で3本検出された。天井支柱は匣鉢に粘土を詰めてから積み重ねられ、周りに粘土を貼っていた。円形の天井支柱は少なくとも匣鉢が3個重なって検出され、高さ55cm、径は約30cmである。また、天井支柱が各焼成室の境となっていたと思われ、A区内では焼成室が少なくとも2室あったものと考えられる。
(佐藤美鈴)

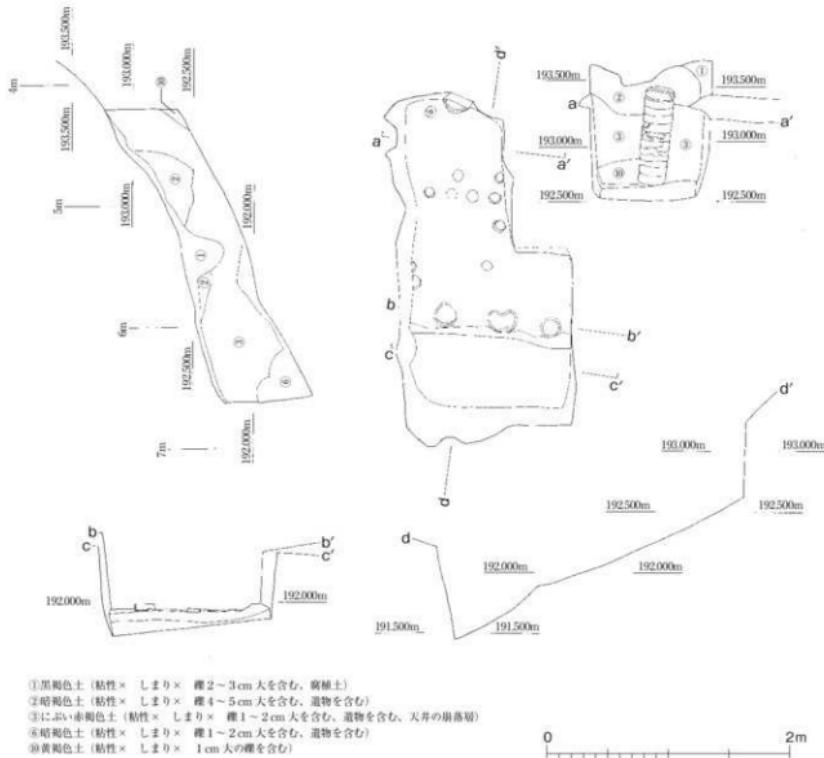
第3節 B区（第8図）

1. 調査区の設定

杭Aより南に4.2mの地点から6.62mまでをB区として設定した。杭Aから南に4.2m地点より東に1.0m、南に1.4m、杭Aから南に5.4m地点より東に1.5m、南に1.65mの調査区である。（高野夏姫）

2. 西壁土層断面図

B区の土層断面図は1面提示した。杭Aから南に4.2m地点の標高は193.230m、杭Aから南に6.2m地点の標高は192.240mである。土層は①～⑩層の5層を確認した。全ての土層において最上層は①黒褐色土が堆積している。北側では②暗褐色土の下層に③にぶい赤褐色土がみられ、さらにその下層には⑩黄褐色土が僅かに堆積している。また、南側では②層が僅かに③層を覆うように堆積し、下層には⑥暗褐色土が堆積し、鉢や窯道具等がみられる。（中田智也）



第8図 第1次調査B区遺構図

3. 検出された遺構

B区では1号窯床面と天井支柱が2列確認された。1号窯に伴う床面の状況は粘土を塗った貼床で被熱し、焼台と焼台痕が溶着した状態で検出された。貼床面は非常に脆弱なもので、茶褐色を呈している。B区の床面傾斜は上方で約20~25°傾斜しているが、下方では天井支柱の痕跡を境に床面がやや傾斜し、床面傾斜は約25~27°となっている。

床面上方で円形の天井支柱が1本、中央から下方に円形と三日月形の天井支柱の痕跡が約20cm前後の間隔で並んで検出された。上方の天井支柱との間隔は水平距離で約1.6mである。なお、上方の天井支柱からA区で検出された天井支柱の間隔は水平距離で約1.7mである。窓内からは三日月形の天井支柱が折れた状態で出土した。上方で検出された円形の天井支柱は高さ約80cm、径は約25cmで、匣鉢に粘土を詰めたものが10個重ねられ、周りに粘土を貼っている。円形の天井支柱の左側は、上から②暗褐色土、天井の崩落層である③にぶい赤褐色土@黄褐色土の順に堆積している。なお、B区内では少なくとも焼成室が2室あるものと思われる。

(高野夏姫)

第4節 C-1区（第9図）

1. 調査区の設定

杭Aより南に7.4mの地点から11.0mまでをC-1区として設定した。杭Aから南に7.4m地点より東に1.0m、南に2.15m、杭Aから南に9.75m地点より東に0.5m、南に1.45mの調査区である。（堀内有）

2. 西壁土層断面図

C-1区の土層は1面提示した。杭Aから南に7.4m地点の標高は191.850m、杭Aから南に11.25m地点の標高は190.320mである。土層は①～③⑥⑦層が確認された。全ての土層において最上層は①黒褐色土が堆積している。北側では②暗褐色土の堆積がみられ、その下層には③にぶい赤褐色土が堆積し、その下層には約30cm四方の⑥匣鉢や窯道具を含む暗褐色土の堆積層がみられる。また、南側では③層の堆積がみられ、その下層には⑦褐色土が堆積している。

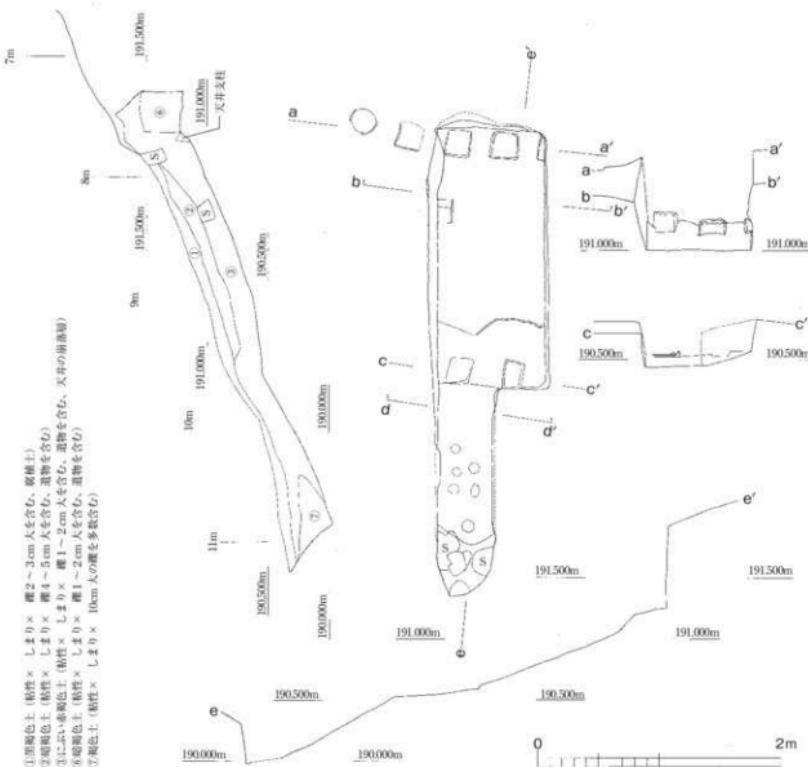
(脇田達)

3. 検出された遺構

C-1区は1号窯床面と天井支柱が3列検出された。1号窯に伴う床面の状況は粘土を塗った貼床で被熱により硬化しているが、貼床面は非常に脆弱で茶褐色を呈している。床面には焼台が溶着した状態で検出されている。C-1区の床面傾斜は、2列目の天井支柱を挟んで上方では約25°あり、下方では床面中央で天井支柱の痕跡がみられ、それを境に約30°前後あると思われる。

天井支柱は上方で方形のものが3本検出され、約17cm前後の間隔で並んでいる。また、調査区の左側で地表面に円形と方形の匣鉢に粘土を詰めたもの検出され、調査区の天井支柱と同じ間隔で並んでいることから、天井支柱であるという可能性がある。次に、床面中央では方形の天井支柱の痕跡が約15cm間隔で並んで2本確認された。上方の天井支柱との間隔は水平距離で約1.6mである。なお、上方の天井支柱からB区の天井支柱との間隔は約1.6mである。さらに、下方で天井支柱が1本確認され、1本しか検出されなかったため左右の間隔はわからないが、中央の天井支柱との間隔は約1.6mである。いずれも天井支柱は匣鉢に粘土を詰めたものである。C-1区では少なくとも焼成室が2室あるものと思われる。

(堀内有)



第9図 第1次調査C-1区遺構図

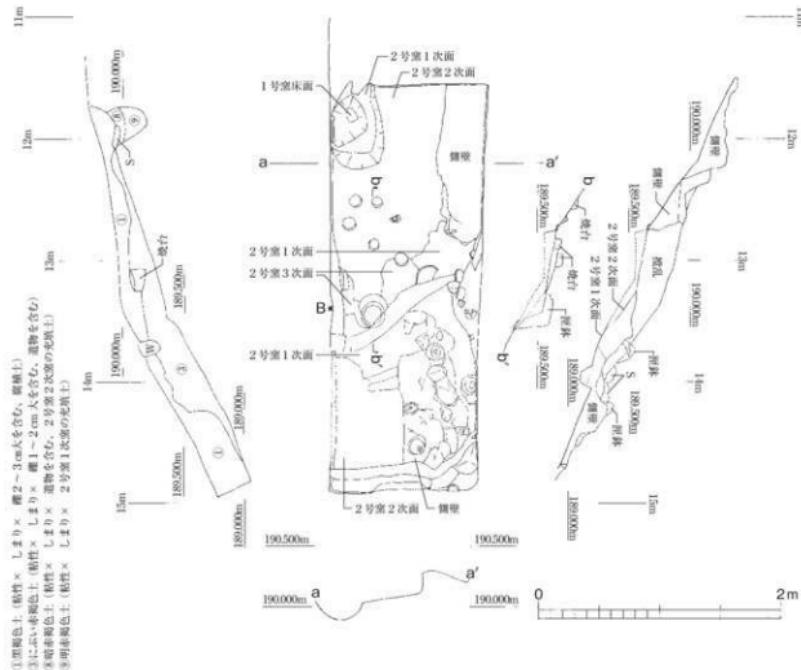
第5節 C-2区（第10図）

1. 調査区の設定

杭Aより南に11.5m地点から14.9mまでをC-2区として設定した。杭Aから南に11.5m地点より東に1.25m、南に3.4mの調査区である。
(三ツ本樹純)

2. 西壁土層断面図

C-2区の土層断面図は1面提示した。杭Aから南に11.5m地点の標高は190.300m、杭Aから南に14.9m地点の標高は189.200mである。土層は①③⑧⑨層が確認された。全ての土層において最上層は①暗褐色土が堆積している。その下層には天井の崩落層である③にぶい赤褐色土の堆積がみられる。また、北側では①層の下層に⑧2号窓1次床面と⑨明赤褐色土が堆積している。なお、⑧層は固く焼きしまっており、輪ドチが混じる層であることが確認され、その下層である⑨層は1号窓の崩落層で2号窓の盛上であると考えられる。
(長繩憲治)



第10図 第1次調査C-2区遺構図

3. 検出された遺構

C-2区は2号窯に伴う床面と右側壁が検出された。2号窯の床面は粘土を塗った貼床で、被熱により硬化し貼床面は一部自然釉降灰によりガラス化し灰緑色を呈している。床面は3面確認されており、少なくとも2回補修されたのではないかと想定できる。C-2区の床面傾斜は匣鉢に粘土を詰めたものを境に上方では約15°、下方では約22°傾斜していることが確認された。北西隅では2号窯床面下層から別の窯の床面が検出された。この床面は2号窯に伴う床面と傾斜が異なり、1号窯の床面に連続することから1号窯の床面であると判断した。

2号窯右側壁は全体的に赤褐色を呈し、よく焼けている面は灰黒色を呈している。さらに、匣鉢や重ね焼きされた製品を窯壁の構築材として使用されている。2号窯右側壁の長さは上方で約1.2m、途中で攪乱を受けているが、下方で約15m残存している。高さは全体的に約20cm前後で、残存幅は上方で約40cm、下方で約60cmである。また、床面中央で円形の匣鉢に粘土を詰めたものが確認されているが、木の根があるため天井支柱であるかどうか判断することが出来なかった。

第6章 出土遺物の概要

第1節 碗類（第11・12図）

碗類には天目茶碗・丸碗・端反碗・小杯がある。

1. 天目茶碗（1～4・24～31）

天目茶碗は全て削り出し輪高台である。灰釉の流し掛けがみられないA類と、体部内外面に灰釉が流逝し掛けられたB類に分類した。A類（1・24・25）は器高7.5cm、口径12.4cm、高台径4.5cm前後である。高台内が浅く削り込まれ、断面形は外側が僅かに外傾、内側は低く僅かに外傾する。体部は僅かに丸みを持って立ち上がり上方はほぼ直立し、口縁端部が薄く尖るように仕上げられるもの（1・25）と、口縁部が僅かに外反しS字状になるもの（24）がある。体部上方から底部にかけて回転ヘラ削り調整される。高台周辺を除き鉄釉が施され濃い飴色から黒褐色の発色である。緻密な胎土が使用され、破断面は灰白色を呈する。

B類（2～4・26～31）は器高7.5cm、口径12.4cm、高台径4.5cm前後である。A類と比べると器壁が全体に薄く、体部は僅かに丸みを持って立ち上がり上方は一旦直立するが上方は僅かに外反する。高台の断面形は外側がほぼ直立し、内側が深く削り込まれ外傾するもの（2・4・26～31）と、高台内の削り込みが浅く、外側が直立し、内側が外傾するもの（3）がある。いずれも体部上方から底部にかけて回転ヘラ削り調整される。高台周辺を除き鉄釉が施され茶色から黒色、体部内外面には筆による灰釉の流し掛けが認められ飴色から漆黒色の発色である。緻密な胎土が使用され、破断面は薄茶色・灰白色・黄褐色を呈する。
(伊藤真央・小林万容)

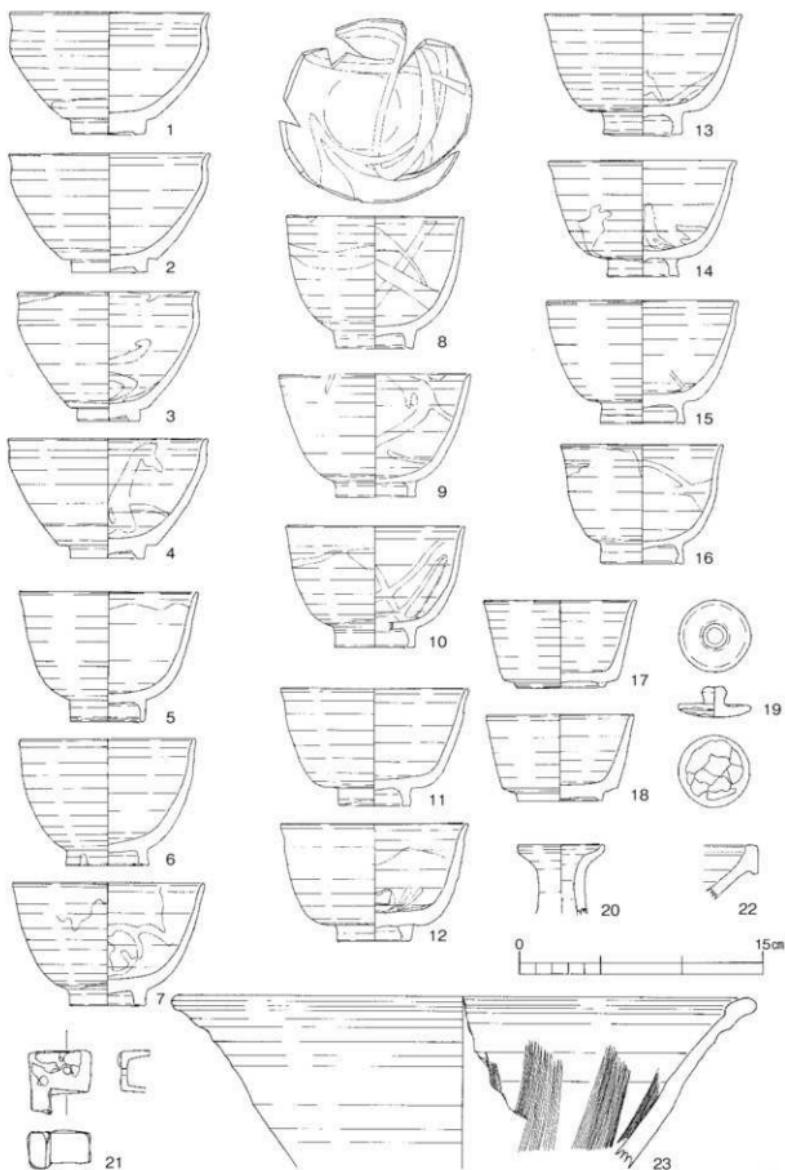
2. 丸碗（5～10・32）

丸碗は全て付高台である。長石釉が施されたA類と、鉄釉に灰釉が流逝し掛けられたB類に分類した。A類（5・6・32）は器高8.0cm、口径11.4cm、高台径4.8cm前後である。高台の形状はバラエティーに富み、高台の断面形が幅狭く細長い長方形で、高台高が高く端部が丸く収まるもの（32）、高台の断面形は類似するが内側が緩やかに窪むもの（5）、高台の断面形が幅広く角張った方形のもの（6）がある。いずれも体部下方は丸みを帯び上方は直線的に立ち上がり、口縁部は外反しない。器壁は5・32が全体に薄く、6は全体に厚い。体部下方から底部外面にかけて回転ヘラ削り調整、高台周辺には回転ナデ調整される。5・32は全面に長石釉が施されるが高台端部の釉葉は拭い取られ、6は高台端部から高台内が露胎となっている。長石釉は黄白色の発色である。なお32には筆による鉄絵（波状文）が描かれる。緻密な胎土が使用され、破断面は灰白色・黄白色を呈する。

B類（7～10）は器高7.6cm、口径11.3cm、高台径4.9cm前後である。高台の幅が広く断面形が方形に近い1類（7・8）と、高台内側中央が指ナデにより窪み撥形を呈する2類（9・10）とに細分できる。いずれもA類と同様、体部下方は丸みを帯び上方はほぼ直線的に立ち上がり、口縁部は外反しない。体部上方から底部にかけて回転ヘラ削り調整、高台周辺は回転ナデ調整される。高台周辺を除き鉄釉が施され茶色から焦げ茶色、体部内外面には筆による灰釉の流し掛けが認められ飴色から黄土色の発色である。緻密な胎土が使用され、破断面は白色・灰白色・黄白色・茶色を呈する。
(鈴木愛実)

3. 端反碗（11～16・33～37）

端反碗は、削り出し輪高台のA類と付高台のB類に大別できる。A類（33）は器高7.2cm、口径11.4cm、高台径5.1cmである。高台の断面形は外側が高く直立し、内側は低く外傾する。体部下方の丸



第11図 第1次調査出土遺物（1）

みは強く、上方はほぼ直線的に立ち上がり、口縁部は僅かに外反する。体部上方から底部にかけて回転ヘラ削り調整されている。高台周辺を除き鉄釉が施され黒褐色、体部外面には筆による灰釉の流し掛けが認められ黒色の発色である。緻密な胎土が使用され、破断面は黄褐色を呈する。

B類(11~16・34~37)は、器高8.4cm、口径11.8cm、高台径5.0cm前後のやや大型の34、器高7.3cm、口径9.8cm、高台径5.0cm前後のやや小型の16を除くと、器高7.4cm、口径11.7cm、高台径4.8cm前後のものが一般的である。丸碗B類と同様、高台の断面形が方形に近い1類(11・14・34・35)と、高台内側中央が指ナデにより窪み摺形を呈する2類(12・13・15・16・36・37)とに細分できる。いずれもA類と同様、体部下方の丸みは強く上方はほぼ直線的に立ち上がり、口縁部は僅かに外反する。体部上方から底部にかけて回転ヘラ削り調整され、高台周辺には回転ナデ調整が施される。高台周辺を除き鉄釉が施されるものが一般的であるが、11・15・36には高台の外側まで鉄釉が掛かる。いずれも茶色から黒褐色の発色で、体部外面には筆による灰釉の流し掛けが認められ鉛色から黒色を呈する。緻密な胎土が使用され、破断面は白色・灰白色・黄白色・黄褐色を呈する。 (藤澤良祐)

4. 小杯(17・18・38・39)

器高5.0~6.2cm、口径7.1~9.2cm、高台径4.0~5.2cmである。高台は外側が内傾、内側が外傾した断面形が逆台形を呈する付高台である。体部下端に稜があり上方は直線的に立ち上がり、口縁部はほとんど外反しない。体部中央から底部外面にかけて回転ヘラ削り調整され、高台周辺には回転ナデ調整が施される。全面に長石釉系の釉薬が施されやや光沢のある黄白色を呈するが、高台端部の釉薬は拭い取られている。胎土は緻密で、破断面は灰白色から黄白色を呈する。なお、小杯には体部外面下端にトチノの痕跡が残ることから、入子状にして直接重ね焼きされたものと思われる。 (加藤竜生)

第2節 中皿・向付類(第12図)

中皿・向付類には、中皿・向付・盤などがある。

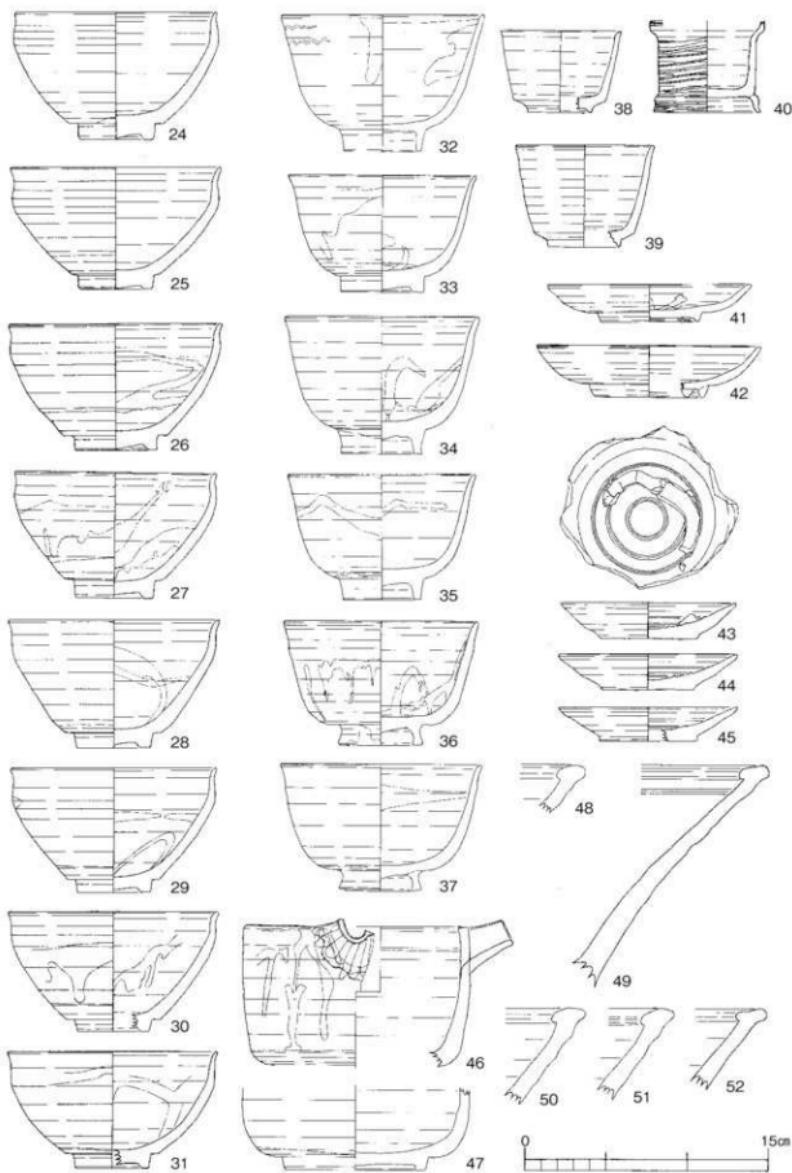
1. 中皿(41・42)

41は器高2.3cm、口径12.4cm、高台径は6.0cmである。断面形が逆三角形の付高台で、高台端部は尖っている。体部は全体にやや丸みを持って開く。体部上方から底部外面にかけて回転ヘラ削り調整され、高台周辺は回転ナデ仕上げされる。全面に鉄釉が施され、光沢のある不透明な茶褐色の発色であるが、高台端部の釉薬は拭い取られている。内外面に灰釉が流し掛けられ、光沢があり透明な鉛色の発色である。緻密な胎土が使用されており、破断面は灰白色を呈する。

42は器高3.2cm、口径13.6cm、高台径6.6cmである。断面形が逆三角形の付高台で、体部は全体に丸みをもって開く。体部中央から底部外面にかけて回転ヘラ削り調整され、高台周辺は回転ナデ仕上げされる。全面に長石釉系の釉薬が施されているが、高台端部の釉薬は拭い取られている。光沢があり半透明で黄白色の発色である。なお底部外面にはトチノの痕跡が残る。緻密な胎土が使用されるが、0.1~0.2mm大の鉄分の噴き出しがみられる。破断面は灰白色から黄白色を呈する。 (田口芽衣)

2. 向付(40)

向付は筒向付で残存高5.6cm、高台径6.5cmである。高台の断面形が逆S字状の付高台を有する。体部下方は直立し、上方は外反し再び直立すると思われる。高台周辺は回転ナデ調整され、内面はロクロ目がみられる。外面に鉄絵による螺旋状の線が施され茶色、全面に長石釉が施され灰白色の発色である。緻密な胎土が使用され、破断面は灰白色を呈する。 (鈴木愛実)



第12図 第1次調査出土遺物（2）

3. 盤類（写真A・B）

A・Bは細片のため図化できなかった。Aは大皿の陶片であると考えられる。体部内面には段が形成されている。内外面には鉄軸と長石軸を掛け分け、さらに、全面に長石軸が施されている。光沢があり半透明で灰色と白色の発色である。緻密な胎土が使用され、灰白色を呈する。

Bは「平向付」の体部片であると考えられる。削り込み高台で高台端部は尖り、体部下方は直線的に開くと思われ、体部内面には段が形成されている。内面には鉄軸と長石軸を掛け分け、外面には鉄絵が描かれ黒色に発色し、さらに全面には長石軸が施されている。光沢があり半透明で黒色と灰白色の発色である。胎土は緻密で茶褐色を呈する。
(伊藤真央)

第3節 調理鉢類（第11・12図）

1. 捣鉢（22・23・48～52）

搾鉢は、口縁部の外側に縁帯が形成されるI類と、口縁部が内側に折り返されるII類とに大別される。搾鉢I類（22）は口縁部のみの破片である。口縁端部が角張り、縁帯は垂直方向に垂れ下がる。残部全面に鉄軸が施されており、光沢のない茶色の発色である。

搾鉢II類（23・48～52）は、口縁部が内側に折り返され、上面が浅く窪むA類（49・52）と、上面がやや膨らむB類（23・48・50・51）がある。いずれも体部は直線的に開き、体部外面上方にはロクロ目が残るが、体部中央以下には回転ヘラ削り調整されている。23には12本一組、49・52には13本一組の摺目が施され、さらに49には体部内面上方に2条の沈線が巡る。残部全面にA類では鉄軸が、B類では鉄軸が施されており、後者はやや光沢のある黒褐色の発色である。搾鉢はいずれも碟を含む胎土で、黄白色から白色を呈するのがほとんどである。
(前田真奈)

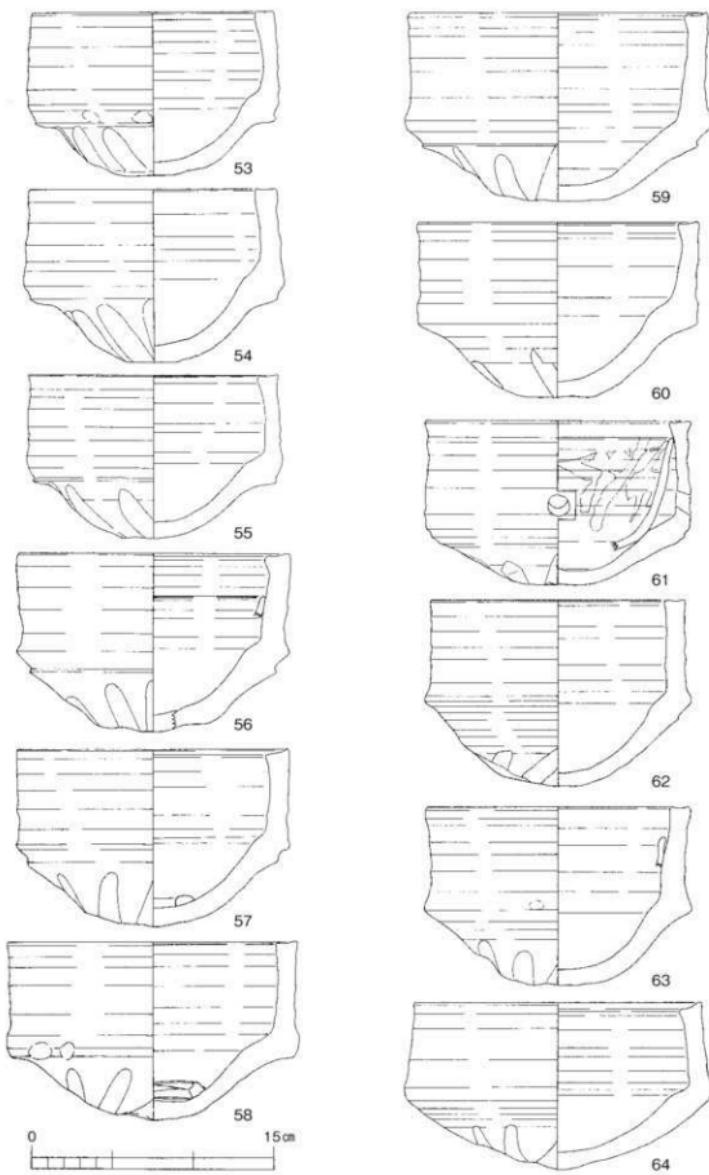
2. 片口（46・47）

46は体部がほぼ直立し口縁端部は角張る。体部中央から下方にかけて回転ヘラ削り調整が行われ、体部内面はロクロ目が残り、口縁部周辺には回転ナデ調整が施される。体部上方の1カ所を「U」字状にカットし、桶状の注口を貼り付けた後に外面をヘラによって調整している。体部外下面から口縁部周辺の内面にかけて、光沢と透明性のある鉄軸が施され、灰釉による流し掛けが認められる。なお口縁端部の釉薬は拭われており、同形の片口を重ね焼いたものと思われる。鉄軸は黒褐色、灰流しは胎色を呈する。体部内面は光沢や透明性のない薄い鉄軸が施される。胎土は密で、器表面・破断面ともに灰白色を呈する。

47は高台周辺の破片である。高台は断面形が方形の低い削り出し高台で、体部下方の丸みは強く上方はほぼ直立する。体部外下面から底部外まで回転ヘラ削り調整され、その後、高台端部周辺には回転ナデ調整されている。体部内面はロクロ目が残り、底部内面はコテによる調整が行われている。外面には高台周辺を除き鉄軸が施され、光沢があるが不透明な茶色の発色である。体部内面から底部内面には薄く鉄軸が施される。なお体部下端には重ね焼き痕が一周し、底部内面には輪ドチが付着することから、片口の内部で碗類の焼成が行われたものと思われる。胎土は密で、器表面・破断面ともに白色を呈する。
(森まどか)

第4節 その他（第11・12図）

その他、徳利・耳付水注・水滴・蓋などが出土している。



第13図 第1次調査出土遺物（3）

1. 徳利 (20)

残存高4.5cm、口径5.2cmである。細く長い頸部の上方は大きく外反し、口縁端部が短く立ち上がり受口状になる。頸部内外面にはロクロ目が残る。残部全面に鉄釉が施され光沢のある黒色の発色で、2~3mm大の茶色の結晶が全面に認められる。緻密な胎土が使用され、破断面は黄白色を呈する。

(伊藤真央)

2. 耳付水注（写真A）

耳付水注は窓内から数個体出土しているが、歪みが大きく正確に全形を知ることができない。平底で底部外面には糸切り痕が残る。胴部外面下方から上方にかけては回転ナデ調整が施され、底部内面から体部内面にはロクロ目が残る。口縁部は外側に折り返され玉縁状に成形されており、注口部は胴部上方に粘土塊を貼り付けた後、外面から棒状の工具によって孔が開けられている。耳部は紐状で、両端を指で押さえ胴部に貼り付けている。匣鉢詰めされず匣鉢蓋の上で焼成されており、81には匣鉢蓋が2枚重なっている。底部外面周辺を除き鉄釉が施され、光沢はあるが、透明性のない茶色や透明性のある黒褐色のものがみられる。胎土は密で、器表面・破断面ともに灰白色や白色を呈する。

(森まどか)

3. 水滴 (21)

平底で、器高2.2cmである。上面には径4.0mmの空気孔、1.5~2.5mmの注口がある。粘土板を組み合わせたタタラ作りである。焼成状態は良好で、全面に灰釉が施されており、緑色の発色でいわゆる御深井製品である。底部外面の釉薬は拭い取られており黄白色を呈する。緻密な胎土が使用され灰白色を呈するが、1~2mm大の鉄分の噴き出しあり。

(三ツ本樹純)

4. 蓋 (19)

器高1.8cm、口径4.4cm、水注（汁次）の蓋であろう。手捏ねによる成形と思われ、底部にはフリー ハンドのヘラ削り調整がみられる。底部周辺を除き灰釉系の釉薬が施され淡緑色の発色である。緻密な胎土が使用され、灰白色を呈する。

(伊藤真央)

5. 灯明皿 (43~45)

器高2.2cm、口径10.8cm、底径5.8cm前後、糸切り痕未調整の平底で、体部は直線的に開き、口縁端部は薄く仕上げられる。内面にはコテの押圧による3~4条の凸線が同心円状に巡る。体部外面にはロクロ目が認められる。なお43には内面に輪下チが付着する。いずれも無釉でやや粗めの胎土が使用され、破断面は灰白色を呈する。

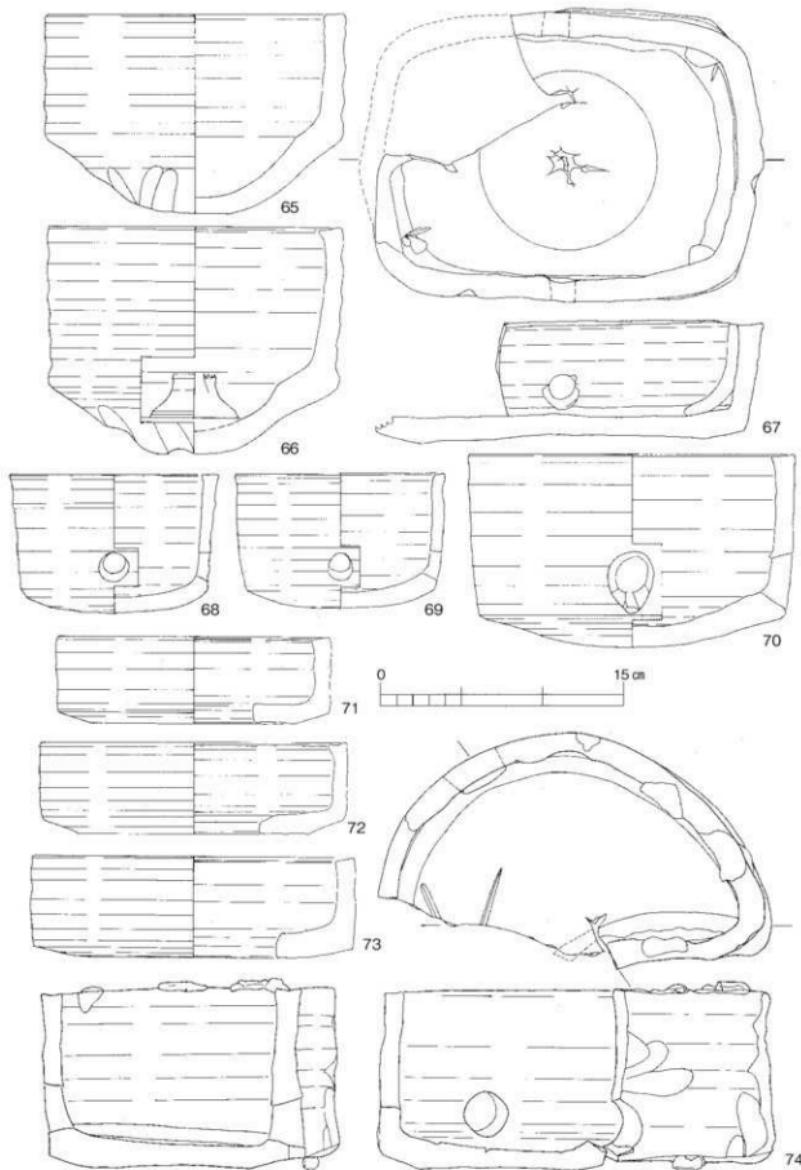
(長繩憲治)

第5節 窯道具類（第13~16・18図）

窯道具類には匣鉢・匣鉢蓋・トチン・ハリ・焼台などがある。

1. 匣鉢 (53~75・K)

匣鉢は形状からA~E類の5類に分類した。A類（53~66・K）は、コテの押圧で底部が押し出された丸底で器高10.0~13.9cm、口径14.9~18.2cm、底径14.4~18.5cm、内径は幅12.6~16.0cm、深さ8.9~12.5cmである。底部外面には糸切り痕が残り、底を押し出すために裏返し、コテに押さえつけた際に付いたと思われる左掌の痕跡が残る。体部内外面とともにロクロ目が強く、口縁部は回転ナデ調整が施される。なお底部外面の外縁に60には回転ナデ調整が、61~66には回転ヘラ削り調整が施される。61には体部中央に1.4cm程度の穿孔が2カ所認められる。また61~63には鉄釉の碗類が、66には灰釉製品（花瓶か）が付着している。



第14図 第1次調査出土遺物（4）

B類（67・74・L）は、平底で糸切り後に形を変形させたもので、67は長方形で器高6.7cm、口径17.5×25cm、底径12×17cm、内径は幅15×22cm、深さ5.5cm、74は三日月形で器高10.8cm、口径16.0cm、底径10.0cm、内径は幅13.2cm、深さ9.5cmである。底部外面には糸切り痕が残り、底部内面には外縁に指ナデ痕が残る。体部下方の2カ所に15~25cmほどの穿孔が認められる。体部外面上方から体部内面下方にかけてロクロ目が強く、口縁部は回転ナデ調整が施される。74の底部内面にはヘラ状工具による「千」の窯印が認められ、底部外面の外縁から体部外面上方にかけてフリーハンドのヘラ削り調整が施される。いずれも双向付を焼成する際に使用されていたと思われる。

C類（68~70）は、丸底で体部下方2カ所に15~27cmほどの穿孔が認められる。底部はA類のように押し出されていない。68・69は器高8.2~8.5cm、口径12.8cm、底径11.6cm、内径は幅11.0cm~11.6cm、深さ7.2~7.5cmである。70は大型で器高11.9cm、口径19.8cm、底径18.7cm、内径は幅17.0cm、深さ10.5cmである。68・69は底部外面に回転ヘラ切り痕が残り、底部外縁に回転ヘラ削り調整が施される。70は底部外面に糸切り痕が残り、底部外縁に回転ヘラ削り調整が施される。体部内外面ともにロクロ目が強く、口縁部は回転ナデ調整が施される。68・69は小杯を焼成する際に使用されていたと思われる。

D類（71~73）は、器高が低く平底で底部に3.5~5.1cmほどの穿孔が認められる。器高5.3~6.2cm、口径16.8~19.6cm、高台径12.8~14.2cm、内径は幅14.4~17.6cm、深さ4.1~4.6cmである。穿孔部には回転ナデ調整が施され、底部外面には糸切り痕が残り、底部外縁に回転ヘラ削り調整が施される。体部内外面ともにロクロ目が強く、口縁部は回転ナデ調整が施される。

E類（75）は、平底で平面形が正方形に近く、底部に8.0cmほど、体部下方2カ所に4.0cmほどの穿孔が認められる。器高11.8cm、口径17.8cm、底径11.7cm、内径は幅15.6cm、深さ9.8cmである。底部外面には糸切り痕が残り、底部外縁には回転ヘラ削り調整が施される。体部内外面ともにロクロ目が強く、口縁部は回転ナデ調整が施される。内面には平面形が四角い長石釉系の製品が付着している。

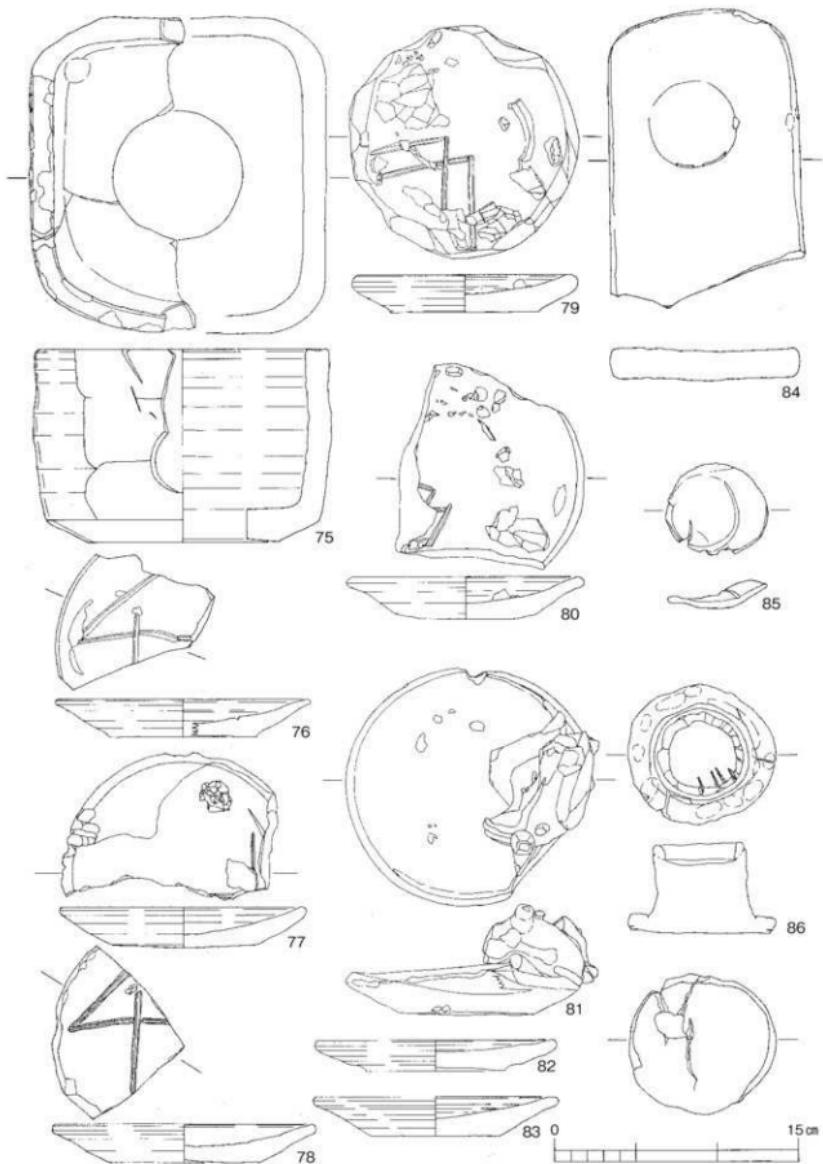
その他に、図版12-Cは全体の形状は判らないが、口縁部の1カ所あるいは数カ所を内面から指で押し出している。体部内外面は薄茶色に発色しており、錫釉が施された可能性がある。これは、碗・皿類以外の特殊品を焼成した匣鉢であると考えられる。

匣鉢は、鉄分の噴き出しと思われる黒斑や礫が含まれるやや粗めの胎土が使用される。（森村知幸）

2. 匣鉢蓋（76~84）

匣鉢蓋はロクロ成形のI類と手捏ね成形のII類に大別できる。I類（76~81）は器高2.3cm、口径12.8cm、底径9.2cmのやや小形の79を除くと、器高1.9~2.6cm、口径14.0~16.0cm、底径7.8~9.4cmで、前者は匣鉢C類、後者は小形の匣鉢A類の蓋と思われる。いずれも糸切り痕未調整の平底で、体部外面にはロクロ目が残り、口縁部内外面は回転ナデ調整される。底部内面から体部内面にはコテで押圧されるもの（76・77・80・83）とロクロ目が残るもの（78・79・82）がある。体部内面にヘラで76~78には「千」、79・80には「M」の窯印がヘラ状工具により施されている。79・80には輪ドチが付着し自然釉がかかっており、特に79は欠損部に釉がかかっていることから何回も使用されたようである。81は匣鉢蓋が2枚重ねられその上に耳付水注が置かれている。無釉で鉄分の噴き出しと思われる黒斑や、礫が含まれる胎土が使用されている。

II類（82）は小判形の匣鉢蓋で、残存長径18cm、短径12cm程度の楕円形で厚さは2cm程度である。上面には径5.5cm程の高台端部が付着し、円状に灰釉系か長石釉系の釉が付着しており、小杯をおいて焼成したものと思われる。両面には自然釉が付着している。無釉で鉄分の吹き出しと思われる黒斑や、



第15図 第1次調査出土遺物（5）

礫が含まれるやや粗めの胎土が使用されている。

(高野夏姫)

3. 板ドチ (85)

板ドチは製品を重ね焼きする際に熔着を防止するために使用されたものである。上下面に掌紋がみられることから、手捏ねによる成形と思われ、上面には径4.0cmほどの高台の痕跡が残っている。無軸で、礫が含まれる粗めの胎土が使用される。

(伊藤真央)

4. 焼台 (87~93)

焼台とは焼成室床面に水平面を作るために置かれる粘土塊である。上面の径が10.4cmと大形で、床面の傾斜画が16°と緩やかな90を除くと、上面の径は7.2cm~9.0cm、床面傾斜角は22~31°である。87~89には上面に「M」、92・93には上下面に「M」、91には上下面に「千」の窯印がヘラ状工具によつて施されている。なお、90には上面に輪ドチの痕跡が残る。

(木藤 積)

5. ハリ (94~99)

ハリとは積み重ねて窯詰めされた匣鉢を、焼成時に倒れないようにするための粘土塊である。両側面を除く全体に指痕・指紋・掌紋がみられる。94・95は両側面にロクロ目が残っており、匣鉢と匣鉢の間に挟んで使用したものである。96~99は片側にロクロ目がみられるが、反対側にはみられず、匣鉢と側壁の間に挟んで使用されたものと思われる。火表と上面には自然釉が付着している。胎土は粗く、0.1~1.0cm 大の礫を含む。器表・破断面は赤褐色を呈する。

(森まだか)

6. その他 (86)

器高5.5cm、口径5.0cm、底径8.5cm 前後である。径6.0cmほどの手捏ねの粘土円柱に、円盤状の底部とヨリ輪状の粘土紐を接合している。底部外縁の糸切り痕は未調整で、ヨリ輪の上面には長石釉が付着している。無軸で胎土は粗いため、トチンの一種と思われる。

(堀内 有)

第6節 溶着資料および天井支柱 (第17図)

1. 溶着資料 (写真D~J)

溶着資料は天目茶碗や丸碗、端反碗などの碗類に窯道具が溶着しているものと、丸皿や折縁皿などの小皿類に窯道具が溶着しているものとに大別できる。原則的に前者は丸底匣鉢 (匣鉢A類) が使用されており、後者には平底の匣鉢が使用されていた。前者は概ね製品と匣鉢が交互に重なるように溶着しており、1点につき一つから三つの製品で構成されている。また製品の形が崩れていて器種を判別できないものも確認された。

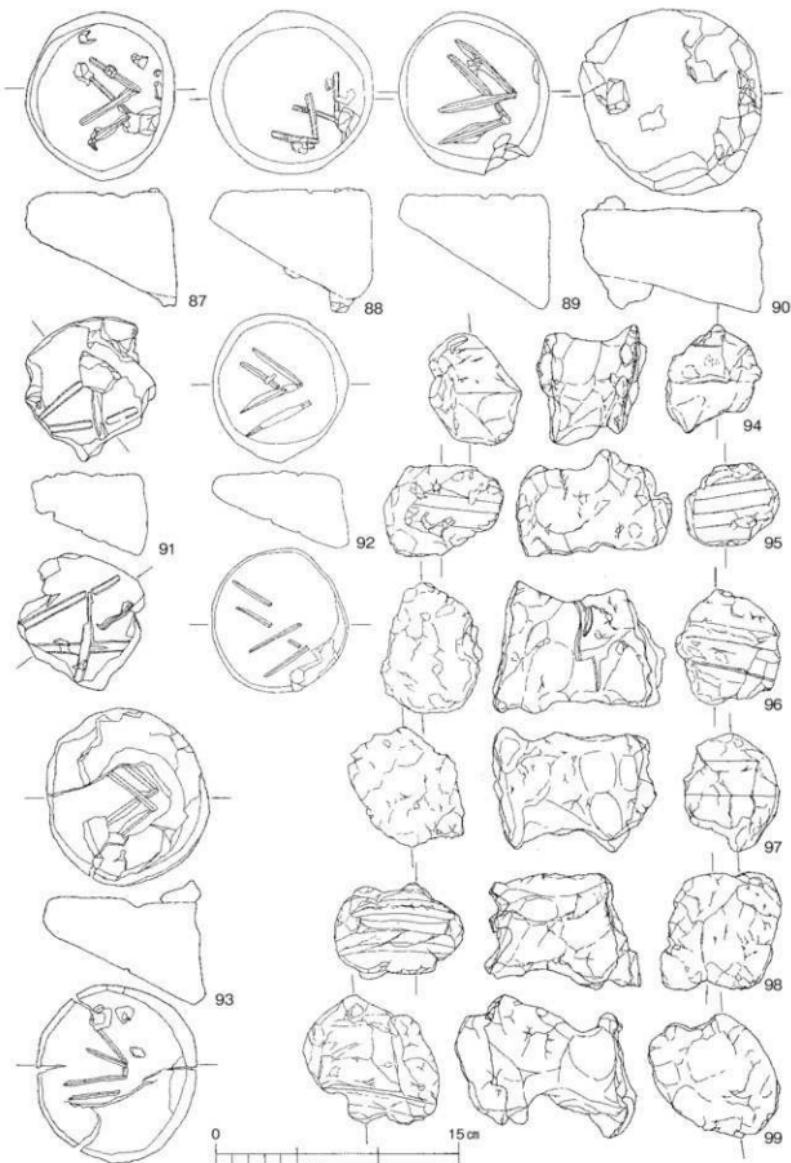
後者は基本的に1点につき0ないし1個の匣鉢が溶着している。匣鉢が二つ溶着しているものは2点のみ確認された。後者は製品を連続で重ねているものが多く、最多で折縁皿を5枚重ね、匣鉢を1枚挟み、さらに折縁皿を四枚重ねたものが確認されている。特徴的な品として後者の中で1点だけ天目茶碗が溶着しているものがあった。また大窯で焼かれたものも2点見つかっている。

(脇田 遼)

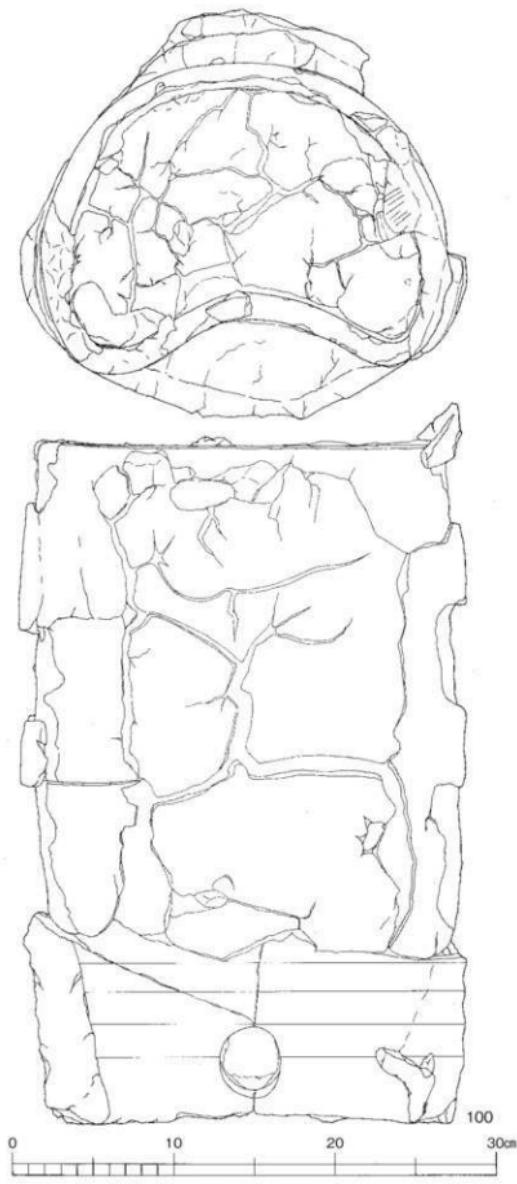
2. 天井支柱 (100)

天井支柱は平面形が梢円形を呈する。三日月形の匣鉢を四つ重ねて作られており、匣鉢と匣鉢の間はより土によって接着されている。中には粘土が詰められ、窯道具や製品の破片が僅かに混じる。三日月形の凹みの部分には土を詰め、上から粘土を貼って固めており、自然釉が付着している。このことから、凹み部分側が火表と考えられる。匣鉢全体には同じく粘土が貼られており、裏面では2層の粘土が確認される。B区の窯内から出土している。

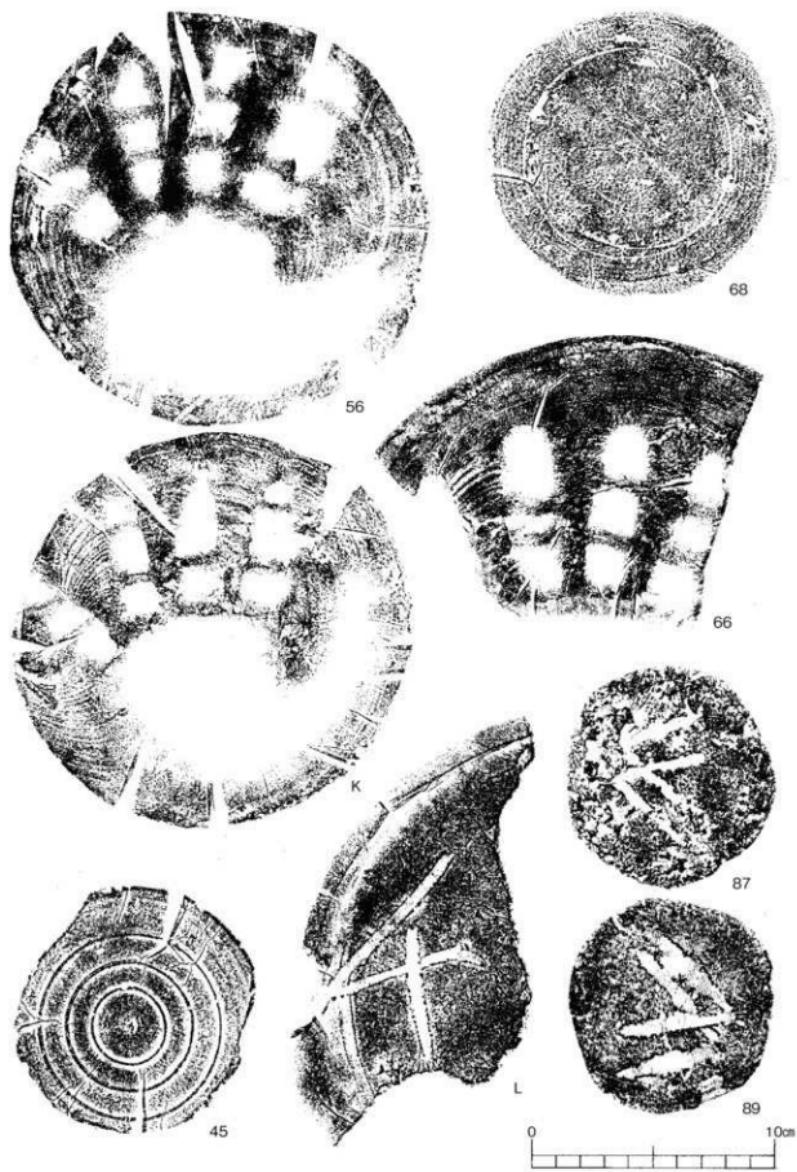
(森まだか)



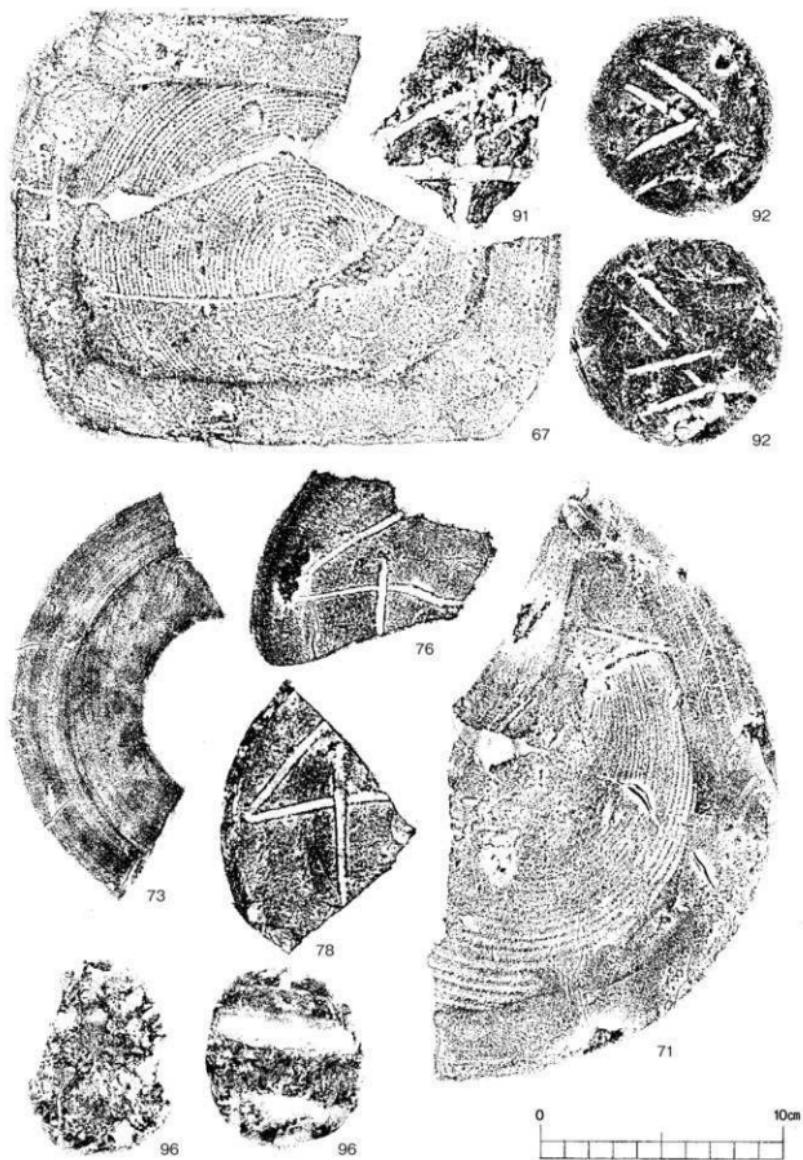
第16図 第1次調査出土遺物（6）



第17図 第1次調査出土遺物（7）



第18図 第1次調査出土遺物拓本（1）



第19図 第1次調査出土遺物拓本（2）

第1表 第1次調査A区出土遺物台帳

No.	日付	トレーナー	出土層位	基本土層	注記番号
1	20150818	A区	表探	表探	YHLA.Ne1
2	20150818	A区	表探	表探	YHLA.Ne2
3	20150818	A区	表探	表探	YHLA.Ne3
4	20150818	A区	表探	表探	YHLA.Ne4
5	20150818	A区	表探	表探	YHLA.Ne5
6	20150818	A区	表探	表探	YHLA.Ne6
7	20150818	A区	表探	表探	YHLA.Ne7
8	20150818	A区	表探	表探	YHLA.Ne8
9	20150818	A区	表探	表探	YHLA.Ne9
10	20150818	A区	廻植土	①黒褐色土(廻植土)	YHLA.Ne10
11	20150818	A区	廻植土	②黒褐色土(廻植土)	YHLA.Ne11
12	20150819	A区	廻植土	①黒褐色土(廻植土)	YHLA.Ne12
13	20150819	A区	廻植土	①黒褐色土(廻植土)	YHLA.Ne13
14	20150819	A区	廻植土	①黒褐色土(廻植土)	YHLA.Ne14
15	20150819	A区鉢張部	表探	表探	YHLA.Ne15
16	20150819	A区鉢張部	表探	表探	YHLA.Ne16
17	20150819	A区鉢張部	廻植土	①黒褐色土(廻植土)	YHLA.Ne17
18	20150819	A区鉢張部	廻植土	②黒褐色土(廻植土)	YHLA.Ne18
19	20150819	A区鉢張部	廻植土	③黒褐色土(廻植土)	YHLA.Ne19
20	20150819	A区鉢張部	廻植土	④黒褐色土(廻植土)	YHLA.Ne20
21	20150819	A区鉢張部	廻植土	⑤黒褐色土(廻植土)	YHLA.Ne21
22	20150819	A区鉢張部	廻植土	⑥黒褐色土(廻植土)	YHLA.Ne22
23	20150819	A区鉢張部	黃褐色土	④明褐色土	YHLA.Ne23
24	20150820	A区鉢張部	茶褐色土	⑤黒褐色土	YHLA.Ne24
25	20150820	A区鉢張部	茶褐色土	⑥黒褐色土	YHLA.Ne25
26	20150820	A区鉢張部	茶褐色土	⑦黒褐色土	YHLA.Ne26
27	20150820	A区鉢張部	茶褐色土	⑧黒褐色土	YHLA.Ne27
28	20150820	A区鉢張部	茶褐色土	⑨黒褐色土	YHLA.Ne28
29	20150820	A区鉢張部	茶褐色土	⑩黒褐色土	YHLA.Ne29
30	20150820	A区鉢張部	茶褐色土	⑪黒褐色土	YHLA.Ne30
31	20150820	A区鉢張部	茶褐色土	⑫黒褐色土	YHLA.Ne31
32	20150821	A区鉢張部	茶褐色土	⑬黒褐色土	YHLA.Ne32
33	20150821	A区鉢張部	茶褐色土	⑭黒褐色土	YHLA.Ne33
34	20150821	A区鉢張部	茶褐色土	⑮黒褐色土	YHLA.Ne34
35	20150821	A区鉢張部	茶褐色土	⑯黒褐色土	YHLA.Ne35
36	20150821	A区鉢張部2	表探	表探	YHLA.Ne36
37	20150821	A区鉢張部2	表探	表探	YHLA.Ne37
38	20150821	A区鉢張部2	表探	表探	YHLA.Ne38
39	20150821	A区鉢張部2	廻植土	①黒褐色土(廻植土)	YHLA.Ne39
40	20150821	A区鉢張部2	廻植土	②黒褐色土(廻植土)	YHLA.Ne40
41	20150822	A区鉢張部2	茶褐色土	③黒褐色土	YHLA.Ne41
42	20150822	A区鉢張部2	茶褐色土	④黒褐色土	YHLA.Ne42
43	20150822	A区鉢張部2	茶褐色土	⑤黒褐色土	YHLA.Ne43
44	20150822	A区	茶褐色土	⑥黒褐色土	YHLA.Ne44
45	20150822	A区鉢張部	茶褐色土	⑦黒褐色土	YHLA.Ne45
46	20150822	A区	茶褐色土	⑧黒褐色土	YHLA.Ne46
47	20150822	A区鉢張部	茶褐色土	⑨黒褐色土	YHLA.Ne47
48	20150822	A区	茶褐色土	⑩黒褐色土	YHLA.Ne48
49	20150822	A区	茶褐色土	⑪黒褐色土	YHLA.Ne49
50	20150822	A区	茶褐色土	⑫黒褐色土	YHLA.Ne50
51	20150823	A区	赤褐色土	⑬にぶい赤褐色土	YHLA.Ne51
52	20150823	A区	赤褐色土	⑭にぶい赤褐色土	YHLA.Ne52
53	20150823	A区鉢張部	赤褐色土	⑮にぶい赤褐色土	YHLA.Ne53
54	20150823	A区鉢張部	赤褐色土	⑯にぶい赤褐色土	YHLA.Ne54
55	20150823	A区鉢張部	赤褐色土	⑰にぶい赤褐色土	YHLA.Ne55
56	20150823	A区	表探	表探	YHLA.Ne56
57	20150820	A区鉢張部	茶褐色土	⑲にぶい赤褐色土	YHLAB.Ne1
58	20150820	A区鉢張部	茶褐色土	⑳にぶい赤褐色土	YHLAB.Ne2
59	20150820	A区鉢張部	茶褐色土	㉑にぶい赤褐色土	YHLAB.Ne3
60	20150820	A区鉢張部	茶褐色土	㉒にぶい赤褐色土	YHLAB.Ne4
61	20150820	A区鉢張部	茶褐色土	㉓にぶい赤褐色土	YHLAB.Ne5
62	20150820	A区鉢張部	茶褐色土	㉔にぶい赤褐色土	YHLAB.Ne6
63	20150820	A区鉢張部	茶褐色土	㉕にぶい赤褐色土	YHLAB.Ne7
64	20150820	A区鉢張部	茶褐色土	㉖にぶい赤褐色土	YHLAB.Ne8
65	20150820	A区鉢張部	茶褐色土	㉗にぶい赤褐色土	YHLAB.Ne9
66	20150820	A区鉢張部	茶褐色土	㉘にぶい赤褐色土	YHLAB.Ne10
67	20150820	A区鉢張部	茶褐色土	㉙にぶい赤褐色土	YHLAB.Ne11
68	20150820	A区鉢張部	茶褐色土	㉚にぶい赤褐色土	YHLAB.Ne12
69	20150820	A区鉢張部	茶褐色土	㉛にぶい赤褐色土	YHLAB.Ne13
70	20150820	A区鉢張部	茶褐色土	㉜にぶい赤褐色土	YHLAB.Ne14
71	20150820	A区鉢張部	茶褐色土	㉝にぶい赤褐色土	YHLAB.Ne15
72	20150822	A区鉢張部	茶褐色土	㉞にぶい赤褐色土	YHLAB.Ne16
73	20150822	A区鉢張部	茶褐色土	㉟にぶい赤褐色土	YHLAB.Ne17

第2表 第1次調査B区出土遺物台帳

No.	日付	トレーナー	出土層位	基本土層	注記番号
1	20150818	B区	表探	表探	YHLB.Ne1
2	20150818	B区	表探	表探	YHLB.Ne2
3	20150818	B区	表探	表探	YHLB.Ne3
4	20150818	B区	表探	表探	YHLB.Ne4
5	20150818	B区	表探	表探	YHLB.Ne5
6	20150818	B区	表探	表探	YHLB.Ne6
7	20150818	B区	表探	表探	YHLB.Ne7
8	20150818	B区	表探	表探	YHLB.Ne8
9	20150818	B区	表探	表探	YHLB.Ne9
10	20150818	B区	表探	表探	YHLB.Ne10
11	20150818	B区	表探	表探	YHLB.Ne11
12	20150818	B区	廻植土	①黒褐色土(廻植土)	YHLB.Ne12
13	20150818	B区	廻植土	②黒褐色土(廻植土)	YHLB.Ne13
14	20150818	B区	廻植土	③黒褐色土(廻植土)	YHLB.Ne14
15	20150818	B区	廻植土	④黒褐色土(廻植土)	YHLB.Ne15
16	20150818	B区	廻植土	⑤黒褐色土(廻植土)	YHLB.Ne16
17	20150818	B区	廻植土	⑥黒褐色土(廻植土)	YHLB.Ne17
18	20150818	B区	廻植土	⑦黒褐色土(廻植土)	YHLB.Ne18
19	20150818	B区	廻植土	⑧黒褐色土(廻植土)	YHLB.Ne19
20	20150818	B区	廻植土	⑨黒褐色土(廻植土)	YHLB.Ne20
21	20150818	B区	廻植土	⑩黒褐色土(廻植土)	YHLB.Ne21
22	20150818	B区	廻植土	⑪黒褐色土(廻植土)	YHLB.Ne22
23	20150818	B区	廻植土	⑫黒褐色土(廻植土)	YHLB.Ne23
24	20150818	B区	廻植土	⑬黒褐色土(廻植土)	YHLB.Ne24
25	20150818	B区	廻植土	⑭黒褐色土(廻植土)	YHLB.Ne25
26	20150818	B区	廻植土	⑮黒褐色土(廻植土)	YHLB.Ne26
27	20150818	B区	廻植土	⑯黒褐色土(廻植土)	YHLB.Ne27
28	20150818	B区	廻植土	⑰黒褐色土(廻植土)	YHLB.Ne28
29	20150818	B区	廻植土	⑱黒褐色土(廻植土)	YHLB.Ne29
30	20150818	B区	廻植土	⑲黒褐色土(廻植土)	YHLB.Ne30
31	20150818	B区	茶褐色土	⑳にぶい赤褐色土	YHLB.Ne31
32	20150818	B区	茶褐色土	㉑にぶい赤褐色土	YHLB.Ne32
33	20150818	B区	茶褐色土	㉒にぶい赤褐色土	YHLB.Ne33
34	20150818	B区	茶褐色土	㉓にぶい赤褐色土	YHLB.Ne34
35	20150818	B区	茶褐色土	㉔にぶい赤褐色土	YHLB.Ne35
36	20150819	B区鉢張部	表探	表探	YHLB.Ne36
37	20150819	B区鉢張部	表探	表探	YHLB.Ne37
38	20150819	B区鉢張部	表探	表探	YHLB.Ne38

39	20150819	B区拡張部	腐植土	①黒褐色土(腐植土)	YH1.B.N6.39
40	20150819	B区拡張部	腐植土	②黒褐色土(腐植土)	YH1.B.N6.40
41	20150819	B区拡張部	茶褐色土	③にふい赤褐色土	YH1.B.N6.41
42	20150819	B区拡張部	茶褐色土	④にふい赤褐色土	YH1.B.N6.42
43	20150820	B区拡張部	茶褐色土	⑤にふい赤褐色土	YH1.B.N6.43
44	20150820	B区拡張部	茶褐色土	⑥にふい赤褐色土	YH1.B.N6.44
45	20150820	B区拡張部	茶褐色土	⑦にふい赤褐色土	YH1.B.N6.45
46	20150821	B区拡張部	茶褐色土	⑧にふい赤褐色土	YH1.B.N6.46
47	20150821	B区拡張部	茶褐色土	⑨にふい赤褐色土	YH1.B.N6.47
48	20150822	B区拡張部	茶褐色土	⑩にふい赤褐色土	YH1.B.N6.48
49	20150822	B区拡張部	茶褐色土	⑪にふい赤褐色土	YH1.B.N6.49
50	20150822	B区拡張部	茶褐色土	⑫にふい赤褐色土	YH1.B.N6.50
51	20150823	B区拡張部	茶褐色土	⑬にふい赤褐色土	YH1.B.N6.51
52	20150823	B区拡張部	茶褐色土	⑭にふい赤褐色土	YH1.B.N6.52
53	20150823	B区拡張部	茶褐色土	⑮にふい赤褐色土	YH1.B.N6.53
54	20150828	B区	茶褐色土	⑯にふい赤褐色土	YH1.C.N6.54
55	20150828	B区拡張部	茶褐色土	⑰にふい赤褐色土	YH1.C.N6.55

第3表 第1次調査 C-1区出土遺物台帳

No	日付	トレンチ	出土層位	基本土層	注記番号
1	20150820	C-1区	茶褐色土	③にふい赤褐色土	YH1.BC.N6.1
2	20150820	C-1区	茶褐色土	④にふい赤褐色土	YH1.BC.N6.2
3	20150820	C-1区	茶褐色土	⑤にふい赤褐色土	YH1.BC.N6.3
4	20150820	C-1区	茶褐色土	⑥にふい赤褐色土	YH1.BC.N6.4
5	20150821	C-1区	茶褐色土	⑦にふい赤褐色土	YH1.BC.N6.5
6	20150821	C-1区	茶褐色土	⑧にふい赤褐色土	YH1.BC.N6.6

第4表 第1次調査 C-2区出土遺物台帳

No	日付	トレンチ	出土層位	基本土層	注記番号
1	20150818	C-2区	表探	表探	YH1.C.N6.1
2	20150818	C-2区	表探	表探	YH1.C.N6.2
3	20150818	C-2区	表探	表探	YH1.C.N6.3
4	20150818	C-2区	表探	表探	YH1.C.N6.4
5	20150818	C-2区	表探	表探	YH1.C.N6.5
6	20150818	C-2区	表探	表探	YH1.C.N6.6
7	20150818	C-2区	表探	表探	YH1.C.N6.7
8	20150818	C-2区	表探	表探	YH1.C.N6.8
9	20150818	C-2区	表探	表探	YH1.C.N6.9
10	20150818	C-2区	表探	表探	YH1.C.N6.10
11	20150818	C-2区	表探	表探	YH1.C.N6.11
12	20150818	C-2区	表探	表探	YH1.C.N6.12
13	20150818	C-2区	表探	表探	YH1.C.N6.13
14	20150818	C-2区	表探	表探	YH1.C.N6.14
15	20150818	C-2区	表探	表探	YH1.C.N6.15
16	20150818	C-2区	表探	表探	YH1.C.N6.16
17	20150818	C-2区	表探	表探	YH1.C.N6.17
18	20150818	C-2区	表探	表探	YH1.C.N6.18
19	20150818	C-2区	表探	表探	YH1.C.N6.19
20	20150818	C-2区	表探	表探	YH1.C.N6.20
21	20150818	C-2区	表探	表探	YH1.C.N6.21
22	20150818	C-2区	表探	表探	YH1.C.N6.22
23	20150818	C-2区	表探	表探	YH1.C.N6.23
24	20150818	C-2区	表探	表探	YH1.C.N6.24
25	20150818	C-2区	腐植土	①黒褐色土(腐植土)	YH1.C.N6.25
26	20150818	C-2区	腐植土	②黒褐色土(腐植土)	YH1.C.N6.26

27	20150819	C-2区	茶褐色土	③にふい赤褐色土	YH1.C.N6.27
28	20150819	C-2区	茶褐色土	④にふい赤褐色土	YH1.C.N6.28
29	20150819	C-2区	茶褐色土	⑤にふい赤褐色土	YH1.C.N6.29
30	20150819	C-2区	茶褐色土	⑥にふい赤褐色土	YH1.C.N6.30
31	20150819	C-2区	茶褐色土	⑦にふい赤褐色土	YH1.C.N6.31
32	20150819	C-2区	茶褐色土	⑧にふい赤褐色土	YH1.C.N6.32
33	20150820	C-2区	茶褐色土	⑨にふい赤褐色土	YH1.C.N6.33
34	20150820	C-2区	茶褐色土	⑩にふい赤褐色土	YH1.C.N6.34
35	20150820	C-2区	茶褐色土	⑪にふい赤褐色土	YH1.C.N6.35
36	20150820	C-2区	茶褐色土	⑫にふい赤褐色土	YH1.C.N6.36
37	20150821	C-2区	茶褐色土	⑬にふい赤褐色土	YH1.C.N6.37
38	20150821	C-2区	茶褐色土	⑭にふい赤褐色土	YH1.C.N6.38
39	20150821	C-2区	茶褐色土	⑮にふい赤褐色土	YH1.C.N6.39
40	20150821	C-2区	茶褐色土	⑯にふい赤褐色土	YH1.C.N6.40
41	20150822	C-2区	茶褐色土	⑰にふい赤褐色土	YH1.C.N6.41
42	20150822	C-2区	茶褐色土	⑱にふい赤褐色土	YH1.C.N6.42
43	20150822	C-2区	茶褐色土	⑲にふい赤褐色土	YH1.C.N6.43
44	20150822	1号窓-2号窓 床面間	茶褐色土	⑳にふい赤褐色土	YH1.C.N6.44
45	20150822	C-2区	茶褐色土	㉑にふい赤褐色土	YH1.C.N6.45
46	20150822	C-2区	茶褐色土	㉒にふい赤褐色土	YH1.C.N6.46
47	20150823	C-2区	茶褐色土	㉓にふい赤褐色土	YH1.C.N6.47

第5表 第1次調査表探出土遺物台帳

No	日付	トレンチ	出土層位	基本土層	注記番号
1	20150817	西側全体	表探	表探	YH1.N6.1
2	20150817	東側全体	表探	表探	YH1.N6.2
3	20150817	東側全体	表探	表探	YH1.N6.3
4	20150817	東側全体	表探	表探	YH1.N6.4
5	20150817	東側全体	表探	表探	YH1.N6.5
6	20150817	東側全体	表探	表探	YH1.N6.6
7	20150818	西側全体	表探	表探	YH1.N6.7
8	20150818	西側全体	表探	表探	YH1.N6.8
9	20150818	西側全体	表探	表探	YH1.N6.9
10	20150818	西側全体	表探	表探	YH1.N6.10
11	20150818	西側全体	表探	表探	YH1.N6.11
12	20150818	西側全体	表探	表探	YH1.N6.12
13	20150818	西側全体	表探	表探	YH1.N6.13
14	20150818	西側全体	表探	表探	YH1.N6.14
15	20150818	西側全体	表探	表探	YH1.N6.15
16	20150818	西側全体	表探	表探	YH1.N6.16
17	20150818	西側全体	表探	表探	YH1.N6.17
18	20150818	西側全体	表探	表探	YH1.N6.18
19	20150818	西側全体	表探	表探	YH1.N6.19
20	20150818	西側全体	表探	表探	YH1.N6.20
21	20150818	西側全体	表探	表探	YH1.N6.21
22	20150818	西側全体	表探	表探	YH1.N6.22
23	20150818	西側全体	表探	表探	YH1.N6.23
24	20150819	西側全体	表探	表探	YH1.N6.24
25	20150823	西側全体	表探	表探	YH1.N6.25
26	20150827	西側全体	表探	表探	YH1.N6.26
27	20150828	全体	表探	表探	YH1.N6.27
28	20150828	全体	表探	表探	YH1.N6.28
29	20150828	全体	表探	表探	YH1.N6.29
30	20150828	全体	表探	表探	YH1.N6.30
31	20150828	全体	表探	表探	YH1.N6.31

第6表 第1次調査出土遺物計測表

図	器種	高台 率	法量 (cm)			注記番号	口縁残 存率%	高台残 存率%	釉薬	備考
			器高	口径	底径					
11-1	天目茶碗A	B	7.4	12.2	4.6	AB №11	50	100	鉄	
2	天目茶碗B か	B	7.3	12.2	4.6	C №25	5	65	鉄	灰流しか、燒成過多
3	天目茶碗B	B	7.9	11.0	3.8	BC №5	25	50	鉄	灰流し、燒成不足
4	天目茶碗B	B	7.3	12.2	4.6	AB №1	40	100	鉄	灰流し、燒成過多、歪み大
5	丸碗A	A	8.0	10.9	4.6	C №39	15	100	長石	
6	丸碗A	A	7.7	10.8	5.0	C №28	20	55	長石	燒成過多
7	丸碗B	A	7.5	11.7	4.7	A №17・18	5	100	鉄	灰流し
8	丸碗B	A	8.1	10.8	4.8	BC №3・C №28	50	100	鉄	灰流し、燒成不足、歪みあり
9	丸碗B	A	7.5	11.8	5.0	C №28	10	50	鉄	灰流し、燒成不足
10	丸碗B	A	7.4	10.8	5.0	C №25・28	15	35	鉄	灰流し
11	端反碗B	A	7.2	11.4	4.4	AB №1	5	100	鉄	灰流し、燒成過多、歪み大
12	端反碗B	A	7.2	11.4	4.4	C №39	10	40	鉄	灰流し、歪み大
13	端反碗B	A	7.4	12.0	4.9	C №42・44・45	10	100	鉄	灰流し
14	端反碗B	A	7.1	11.4	4.4	A №29	5	70	鉄	灰流し、歪み大
15	端反碗B	A	7.5	11.7	5.2	B №54	10	100	鉄	灰流し
16	端反碗B	A	7.3	9.8	5.0	C №36	10	50	鉄	灰流し
17	小杯	A	5.5	9.2	5.2	A №32・36	25	15	長石	
18	小杯	A	5.3	9.0	5.2	A №42	25	70	長石	
19	蓋	C	1.9	4.5		C №36	100	100	灰	
20	便利	—		5.2		C №38	100	—	鉄	
21	水滴	C か	2.2			A №32	100	—	灰	
22	擂鉢I	—				C №1	5	—	銅	
23	擂鉢II B	—		35.0		A №32	15	—	鉄	摺目12本一組
12-24	天目茶碗A	B	7.8	12.3	4.4	N №24	5	100	鉄	
25	天目茶碗A	B	7.4	12.8	4.4	N №2・4	5	100	鉄	
26	天目茶碗B	B	7.7	13.0	5.0	N №2	25	100	鉄	灰流し
27	天目茶碗B	B	7.7	12.2	4.7	N №2・22	25	100	鉄	灰流し
28	天目茶碗B	B	7.8	12.8	4.5	N №7・30	5	100	鉄	灰流し、燒成不足
29	天目茶碗B	B	7.6	12.6	4.5	N №6	5	100	鉄	灰流し、燒成過多
30	天目茶碗B	B	7.3	12.8	4.4	N №29	5	20	鉄	灰流し
31	天目茶碗B	B	7.1	12.8	4.4	N №6	5	40	鉄	灰流し
32	丸碗A	A	8.3	12.4	4.7	N №7	10	100	長石	鉄松
33	端反碗A	B	7.2	11.4	5.0	N №6	5	100	鉄	灰流し、歪みあり
34	端反碗B	A	8.4	11.8	5.0	N №30	10	100	鉄	灰流し、燒成不足
35	端反碗B	A	7.7	11.4	4.7	N №2	25	100	鉄	灰流し、歪みあり
36	端反碗B	A	7.6	11.8	5.0	N №6	40	100	鉄	灰流し、歪みあり
37	端反碗B	A	7.7	12.2	5.0	N №10	5	70	鉄	灰流し、燒成不足
38	小杯	A	5.0	7.1	4.0	N №2	10	10	不明	燒成不足
39	小杯	A	6.2	8.3	4.4	N №6	10	5	長石	
40	鶴向付	A			6.5	N №10	—	50	長石	鉄松
41	中皿	A か	2.3	12.4	6.0	N №2	5	25	鉄	灰流し
42	中皿	A	3.2	13.6	6.6	N №32	10	30	長石	
43	灯明皿	C	2.2	10.6	6.0	N №6	10	100	無	
44	灯明皿	C	2.2	10.8	5.6	N №6	20	100	無	内面に輪ド子付着
45	灯明皿	C	2.1	10.9	5.8	N №28	20	20	無	
46	片口	—		13.6	N №2	10	—	鉄	灰流し	
47	片口	B			8.4	N №6	—	55	鉄	
48	擂鉢II B	—				N №29	5	—	鉄	
49	擂鉢II A	—				N №10・26	5	—	銅	摺目13本一組
50	擂鉢II B	—				N №2	5	—	鉄	
51	擂鉢II B	—				N №16	5	—	鉄	
52	擂鉢II A	—				N №29	5	—	銅	摺目13本一組
13-53	涙鉢A	D	10.0	14.9	14.9	B №48	100	100	無	鉄軸高台痕
54	涙鉢A	D	10.6	15.2	15.3	B №49?	100	100	無	
55	涙鉢A	D	10.0	15.3	15.0	B №48	100	100	無	輪ド子痕

56	匣鉢A	D	109	16.6	15.2	AB №4	100	100	無	焼成後底部穿孔か
57	匣鉢A	D	108	16.7	15.4	A №48	100	100	無	輪ドチ・鉄軸付着
58	匣鉢A	D	109	17.8	17.5	A №48	100	100	無	輪ドチ・鉄軸付着
59	匣鉢A	D	115	18.2	16.9	A №?	100	100	無	鉄軸付着
60	匣鉢A	D	107	17.2	17.2	AB №4	90	100	無	
61	匣鉢A	D	100	16.0	15.4	AB №11	100	100	無	
62	匣鉢A	D	114	15.5	14.4	A №50	100	100	無	鉄軸端付着
63	匣鉢A	D	109	16.1	16.4	AB №9	100	100	無	鉄軸端反曲付着
64	匣鉢A	D	102	17.6	18.5	A №48	100	100	無	
14-65	匣鉢A	D	122	18.2	18.0	A №48	100	100	無	
66	匣鉢A	D	139	18.0	17.0	AB №11	15	25	無	灰釉製品付着
67	匣鉢B	C	67	175×25	12×17	A №50・52	70	80	無	長方形、体部穿孔2方
68	匣鉢C	D	85	12.8	11.6	B №44	75	100	無	体部穿孔2方
69	匣鉢C	D	82	12.8	11.6	A №43	25	55	無	体部穿孔2方か、輪ドチ・長石釉付着
70	匣鉢C	D	119	19.8	18.7	BC №1	100	100	無	体部穿孔2方
71	匣鉢D	C	53	16.8	12.8	A №7	20	30	無	底部穿孔
72	匣鉢D	C	56	18.8	14.2	A №6	35	35	無	底部穿孔
73	匣鉢D	C	62	19.6	14.0	B №30	30	30	無	底部穿孔
74	匣鉢B	C	108	16.0	10.0	A №45	65	70	無	三日月形、「千」の窓印
15-75	匣鉢E	C	11.8	17.8	11.7	A №7	40	50	無	底部穿孔、正方形か、長石釉付着
76	匣鉢蓋I	C	23	15.4	9.0	№29	30	30	無	「千」の窓印
77	匣鉢蓋I	C	25	15.0	9.0	C №38	35	50	無	「千」の窓印
78	匣鉢蓋I	C	24	16.0	9.4	AB №1	25	25	無	「千」の窓印
79	匣鉢蓋I	C	23	12.8	9.2	C №38	60	100	無	「M」の窓印
80	匣鉢蓋I	C	26	14.0	8.7	A №52	20	80	無	「M」の窓印
81	匣鉢蓋I	C	24	14.0	8.4	C №2	70	100	無	耳付水注付着
82	匣鉢蓋I	C	19	14.6	8.6	A №25	90	100	無	
83	匣鉢蓋I	C	24	14.8	7.8	A №25	70	100	無	
84	匣鉢蓋II					BC №1			無	小判形
85	板ドチ					C №36			無	
86	トチンか	A	55	5.0	8.5	C №28			無	
16-87	焼台	—				№26			無	上面に「M」の窓印
88	焼台	—				C №28			無	上面に「M」の窓印
89	焼台	—				A №43			無	上面に「M」の窓印
90	焼台	—				C №4			無	
91	焼台	—				C №4			無	上下面に「千」の窓印
92	焼台	—				C №28			無	上下面に「M」の窓印
93	焼台	—				A №45			無	上下面に「M」の窓印
94	ハリ	—				C №4			無	
95	ハリ	—				C №11			無	
96	ハリ	—				BC №4			無	
97	ハリ	—				BC №4			無	
98	ハリ	—				C №4			無	
99	ハリ	—				C №4			無	
17-100	天井支柱	C				B			無	

※ A：付高台、B：割り出し高台、C：平底、D：丸底

第7章 小結

第1節 遺物について

弥七田窯跡の第1次調査では、丸碗・天目茶碗・端反碗・小杯・筒向付・中皿・灯明皿・片口・蓋・徳利・水滴・擂鉢・耳付水注などの製品と窯道具類が出土している(第7表)。窯内出土の製品の比率は、天目茶碗が17%、丸碗が31%、端反碗が39%、小杯が4%と碗類だけで全体の91%に及ぶものであった。この傾向は表採資料にも表れており、いわゆる弥七田織部は極僅かに確認されたのみである。豊蔵資料館や多治見工業高校等所蔵の資料(亀谷2013)には織部製品が多く見られることから、今回の調査結果からみられる割合は必ずしも正確な生産の様相を示しているとはいえないが、弥七田窯では主体的に碗類を焼成していた可能性が高い。

1号窯では弥七田織部の盤類が、2号窯の最終床面直上からは御深井製品の水注の蓋が出土しており、土岐郡側と同様に織部製品から御深井製品への流れが確認される。なお、大窯製品が出土しているが、焼成過多による溶着資料が多いため、窯体の構築材として持ち込まれた可能性が高い。

弥七田窯は近世美濃窯編年(田口1993)によると、織部や御深井製品が出土していることから連房I期後半から連房II期前半に比定される。しかしながら、近世美濃窯編年は橋崎彰一氏によって窯式編年で構築され、現在の編年観の根幹を成しているものの、時期区分が特殊品から成されており、一方で瀬戸窯では型式編年が組まれていることから、窯式編年の美濃窯との時期的な対応関係を確定することが難くなっている。そこで、本報告書の付編1では登窯導入期に両窯業地でみられる天目茶碗を扱って編年を試みた。弥七田窯出土の天目茶碗はA類とB類に分類され、A類は灰釉の流し掛けがみられないもので、赤津B窯のa類に相当する。B類は灰釉の流し掛けが認められるもので、B類の中には、高台の断面形が外側がほぼ直立し、内側が深く削り込まれ外傾するものと、高台内の削り込みが浅く、外側が直立し内側が外傾するものの2種類みられる。前者は体部の立ちが高く径高指数が72、後者は体部がやや開き径高指数が55~63で、付篇1で提示された赤津B窯のb類とc類に相当する。よって、天目茶碗編年から弥七田窯跡は登窯第1小期に比定される。操業年代は慶長期後半から寛永期前半に位置付けられ、弥七田窯は元屋敷窯の創業までは遡らないものの、窯ヶ根4号窯・清安寺窯・赤津B窯などとほぼ同時期に操業がされていたものと思われる。

また、久尻地区では登窯第1小期にはすでに天目茶碗の高台端部のナデ仕上げが行われているが、弥七田窯では全く確認されない。さらに、久尻地区・定林寺地区といった土岐郡側では灰釉の流し掛けが行われている天目茶碗は確認されておらず、瀬戸窯で天目茶碗に流し掛けがみられるのは登窯第2小期に入ってからである。弥七田窯でみられる天目茶碗B類は、灰釉の流し掛けを特徴とし、また丸碗B類や端反碗などの鉄釉の碗類も同様のことが認められる。第1小期における天目茶碗の灰流し技法は近隣の窯ではどこにもみられず、弥七田窯の特徴といえるだろう。

第2節 遺構について

弥七田窯跡では2基の連房式登窯が重なって確認され、下層の窯を1号窯、上層の窯を2号窯とした。1号窯は確認された長さが12.7mで、煙道部は未検出であるが焼成室を6室分確認した。部屋の幅は2.5m、奥行きは天井支柱の上端から下端まで約1.6~1.7mで、床面傾斜は約20~30°である。部屋と部屋の境には天井支柱が数本建ち、丸形や四角形、三日月形の匣鉢に粘土を充填したものを積み上げてそ

の周りを粘土で塗り固めて構築している。また、今回設定したトレンチは窯の軸から離れており、やや東側に軸がふれると考えられる。A区では両側壁が確認され左側壁は高さ約55cmまで、B区では天井支柱が高さ80cmまで残存しており、少なくとも天井はそれ以上の高さをもっていたことは明らかである。焚口・燃焼室は2号窯が重なっているため、確認できなかった。

2号窯は1号窯の上に重なるように造られており、上部は既に削平され消滅していた。部屋の床面傾斜は約15~22°である。C-2区の中央で柱が確認されたが、1号窯と同様に天井支柱であるか、若しくは狭間柱であるかは定かではない。また、今回の調査で隔壁は検出されていない。床面は少なくとも2回貼り直され、3面確認される。2号窯に伴う右側壁が検出され、窯道具や不良の製品を構築材として使用している。トレンチに窯の中軸がほぼ沿うものと考えられる。

本報告書の付編2では、連房式登窯導入期における窯体構造の変遷について考察した。連房式登窯の範疇に含まれるものは、定林寺西洞窟のように上部まで隔壁がみられないものもあるが、いずれも狭間構造をもっており、全て狭間柱と狭間柱が連結し隔壁をもって狭間孔を構築している。この狭間構造には有段横狭間・無段斜狭間・有段斜狭間・有段縦狭間があり、狭間上部の隔壁によって部屋と部屋が区切られているものの、弥七田1号窯でみられる柱は隣接する柱とつながることなく独立して築かれており、隔壁をもっていない。そのため、狭間構造をもたない窯体構造であることが確認される。

弥七田窯の構築順序に関しては1号窯の上層に2号窯が構築されていることから、1号窯が古く2号窯が新しいことが明白である。1号窯の床面は、支柱の基底部分のみを水平にし焼成室はほぼ同じ角度で直線的に構築されており、2号窯では支柱は焼成室の後方に構築され、支柱後方に段差が造られている。狭間構造をもたない弥七田1号窯であるが、この構造から1号窯は付編2の窯体構造B類に、2号窯は同じくC類と似た床面構造をもつ。B類は定林寺地区でのみみられ、C類はB類から変遷することが明らかであるが、弥七田窯も同様に変遷するといえるであろう。またB類・C類とも登窯第1小期の範疇に含まれており、天目茶碗の年代観とも矛盾しない。

連房式登窯導入期には様々な形状の窯体構造がみられるが、共通して狭間柱の上部に隔壁をもつため、隔壁のみられない弥七田1号窯は狭間構造をもつとはいはず、他の窯と比べ特異な窯といえよう。しかし、燃焼室や煙道部は検出されておらず、窯体の平面形や部屋の全容は確認されていないため、不明な点が多く残っている。今後の調査に期待したい。

(藤澤良祐・森まどか)

第7表 第1次調査出土遺物個体数

大分類	中分類	小分類	A区			B区			C区			小計	表種	合計	
			A類	B類	C類	A類	B類	C類	A類	B類	C類				
碗類	天目茶碗	A類	1	1	0	2							7	9	
	B類	6	3	7	16				18	43	59	77			
	不明	0	0	0	0							9	9		
	丸碗	A類	0	1	6	7			26	33	40				
	B類	6	2	11	19				53	53	72	112			
	不明串	3	1	4	8				8	34	42	42			
鉄輪端反碗	A類	5	2	2	9				42	12	21	110			
	B類	13	8	12	33				56	89					
	長石輪小杯	4	0	1	5				5	15	20	20			
	小計	38	18	43	99				262	361					
	鉄輪中皿	0	0	0	0				1	1	1	8			
中皿・向付類	長石輪中皿	1	0	0	1				6	7					
	鉄筋盤類	0	0	1	1				1	0	1	1			
	鉄筋筒向付	0	0	0	0				0	1	1	1			
	小計	1	0	1	2				8	10					
調理鉢	鉄輪笠鉢	0	1	0	1				1	0	1	1			
	鉄輪片口	0	0	0	0				0	3	3	3			
	小計	0	1	0	1				1	3	4	4			
その他の	鉄輪便利	0	0	0	0				0	1	1	1			
	鉄輪耳付水注	2	1	1	4				4	5	9	9			
	灰釉水注蓋	0	0	1	1				1	0	1	1			
	灰釉水滴	1	0	0	1				1	0	1	1			
	無釉灯明皿	0	0	0	0				0	3	3	3			
	小計	3	1	2	6				9	15					
	合計	42	20	46	108				282	390					

*丸碗B類か端反碗B類が不明。

引用・参考文献

- 加藤唐九郎1933『黄瀬戸』寶雲舎
- 加藤唐九郎1936「美濃古窯文書」『陶磁』第8卷第2号 東洋陶磁研究会
- 高木康一1936「美濃に於ける黄瀬戸、志野、織部」『陶磁』第8卷第2号 東洋陶磁研究会
- 加藤土師萌1953「織部」「陶説」日本陶磁協会
- 荒川豊蔵1959「志野」陶磁全集第4巻 平凡社
- 一瀬武1966「美濃焼の歴史」郷土文化研究会
- 奥穀栄範1971「美濃焼」光琳社
- 加藤陽治1973「美濃の陶片」徳間書店
- 橋崎彰一・井上喜久男1976「美濃古窯跡群」財観光資源保護財団
- 橋崎彰一1976「美濃の古陶のながれ」「美濃の古陶」光琳社
- 今井静雄1976「中世の施釉陶器」「美濃の古陶」光琳社
- 奥穀栄範1976「可児地区」「美濃の古陶」光琳社
- 橋崎彰一1983「瀬戸・美濃近世編年表（連房式登窯期）」「江戸のシンポジウム」五島美術館
- 藤澤良祐1986「瀬戸大窯発掘調査報告」「研究紀要V」瀬戸市歴史民俗資料館
- 井上喜久男1988「美濃窯の研究（一）—十五～十六世紀の陶器生産—」『東洋陶磁』第15・16号 東洋陶磁研究会
- 斎藤基生1989「研究紀要1　牟田洞窯」『荒川豊蔵資料館』
- 橋崎彰一1990「第6章 総括」「尾呂」瀬戸市教育委員会
- 田口昭二1993「第9章 江戸時代・明治時代前半代の美濃窯編年と製造品種」「美濃窯の焼物」
- 藤澤良祐2002「瀬戸美濃大窯編年の再検討」「研究紀要 第10輯」動瀬戸市埋蔵文化財センター
- 可児市2005「可児市史 第一巻 通史編 考古・文化財」
- 高橋健太郎他2006「窯ヶ根窯跡発掘調査報告書」岐阜県土岐市教育委員会
- 可児市2007「可児市史 第四巻 自然編・民俗編」
- 亀谷泰隆2013「弥七田織部・弥七田窯概説」「弥七田織部展図録」可児郷土歴史館
- 春日美海2015「昭和前半期の元屋敷窯発掘史—高木康一と小川栄一、文化財保護の視点から—」「元屋敷窯発掘史—美濃桃山陶の再発見と古窯跡発掘ブームの中で—」土岐市美濃陶磁歴史館
- 愛知学院大学文学部歴史学科2016「大萱窯跡群牟田洞窯跡第1・2次発掘調査概要報告書」

付編 1 連房式登窯導入期における天目茶碗について

藤澤良祐

はじめに

現在の愛知県瀬戸市を中心とする近世瀬戸窯と、岐阜県土岐市・多治見市・瑞浪市・可児市に展開する近世美濃窯は、いずれも瀬戸美濃大窯の生産技術を基に成立した窯業地で、近世瀬戸・美濃窯では、大窯による生産段階とは異なり特徴的な製品が生産されており、さらに両窯業地では、各村落（地区）においても生産器種の構成が異なることが明らかにされている。

近世瀬戸・美濃窯の編年は、近世瀬戸窯では3段階11小期、近世美濃窯では5期12窯式という異なる編年観が用いられており、瀬戸窯の第1段階は美濃窯の連房Ⅰ期・Ⅱ期に、瀬戸窯第2段階は美濃窯連房Ⅲ期に、第3段階は連房Ⅳ期・Ⅴ期にそれぞれ対応すると考えられている（樋崎1990）。しかし瀬戸窯では主要器種の型式を設定した上で、型式組列の組合せにより地区ごとに併行関係を求めた「型式編年」であるのに対して、美濃窯では例えば織部製品や御深井製品といった一部の地区にみられる特殊品を中心に、窯の出土遺物の一括性を重視した「窯式編年」であるため、当該期の瀬戸窯をはじめ美濃窯の他地区の特殊品を生産していない窯について位置付けすることはできない。両窯業地にみられる共通する器種を探り上げ型式を設定し比較する必要がある。

本稿では、近世瀬戸・美濃窯の成立期（以下、連房式登窯導入期という）である瀬戸窯第1小期および美濃窯Ⅰ・Ⅱ期において、両窯業地を通じて唯一比較可能な器種である天目茶碗の型式組列を明らかにし、それらの併行関係を求めるとともに、連房式登窯導入期における天目茶碗の暦年代を明らかにしたい。

1. 近世瀬戸窯の天目茶碗（図1・表3）

近世瀬戸窯の編年は、主要器種の型式組列を基に、地区ごとに3段階11小期に細分されている。近世瀬戸窯では天目茶碗は主要器種の一つであり、第1小期から第8小期にかけて赤津地区・瀬戸地区を中心に生産されている（藤澤1986～1989・1998）。ここでは第1段階（第1～4小期）の天目茶碗について検討を加えたい。なお、瀬戸窯では第3段階後半から第4段階後半の大窯生産は確認されていない（藤澤2002）。

（1）第1小期の天目茶碗（図1の1～10）

連房式登窯導入期にあたる第1小期の天目茶碗は、赤津地区的赤津B窯、下品野地区的窯町C窯、山口地区的薬師山窯・欠下窯で出土している。大窯第3段階後半以降の天目茶碗が小形化・扁平化するのに対して、第1小期には大形の天目茶碗が出現する。高台は削り出し輪高台のものに、口縁端部が玉縁状のものから薄く仕上げられたものに、高台周辺に鋸歯の化粧掛けは無く露胎のものに統一される。なお、これまで第1小期の天目茶碗は同一型式として扱ってきたが、美濃窯との併行関係を明らかにするため本稿では細分化する方向で検討を加える。

第1小期で唯一発掘調査されている赤津B窯（藤澤1986・1988）では、天目茶碗は大窯構造を有する同窯の焼成床面下の充填土を中心に数多く出土しており、a～cの3類に細分される。a類（1）は、高台の形状は外側が直立、内側が大きく外傾し、高台の幅は広く断面形は逆台形状を呈する。体部はやや丸みを持って立ち上がり上方はほぼ直立し、口縁部は僅かに外反する。1個体のみであるが器高

7.0cm、口径11.1cm、高台径4.7cm、径高指数は63である。b類（2・3）は、高台の形状は外側がほぼ直立、内側が外傾し、高台の幅は狭く断面形は方形に近い。体部はほぼ直線的に立ち上がり上方は直立し、口縁端部は丸く仕上げられる。a類と比べると器壁が薄いものがある。データを採った5個体の平均値は器高7.3cm、口径10.8cm、高台径4.5cm、径高指数は68である。c類（4・5）は、高台の形状は外側がほぼ直立、内側がやや外傾し、高台の幅は狭く断面形は方形に近い。体部はほぼ直線的に開き上方はほぼ直立し、器壁は全体に薄い。データを採った7個体の平均値は器高6.8cm、口径11.4cm、高台径4.6cm、径高指数は60である。なお、赤津B窯出土の天目茶碗には灰釉の流し掛けはなく、また段付き天目は出土していない。

窯町C窯（藤澤1989）の天目茶碗（6）は、高台は外側が僅かに内傾、内側が外傾し、高台内の削り込みはやや深く、断面形は逆台形状である。体部はほぼ直線的に開き上方はほぼ直立し、器壁は全体に薄く、赤津B窯のc類に類似する。器高6.9cm、口径11.4cm、高台径4.2cm、径高指数は61である。

薬師山窯（藤澤1986）の天目茶碗（7・8）は、高台の外側が僅かに内傾、内側が外傾し逆台形状を呈するが、高台内の削り込みは浅い。体部はやや丸みを持って立ち上がり上方はほぼ直立し、口縁端部は丸く仕上げられる。器壁は全体にやや厚く、赤津B窯のb類に類似する。データを採った3個体の平均値は器高7.8cm、口径11.7cm、高台径4.7cm前後。径高指数は67である。

欠下窯（藤澤1986）の天目茶碗（9～11）のうち、9は、高台は外側が内傾、内側が外傾し高台内の削り込みが浅い。体部は僅かに丸みを持って開き上方がほぼ直立し、口縁端部は薄く仕上げられる。赤津B窯のa類に類似し、器高6.7cm、口径11.6cm、高台径4.2cm、径高指数は58である。10は、高台は内外側ともほぼ直立し、断面形は方形に近く高台内の削り込みが浅い。体部はやや丸みを持って立ち上がり、口縁部は僅かに外反する。器高8.2cm、口径11.9cm、高台径4.2cm、径高指数は69である。なお11は、高台は外側が直立、内側が外傾し、高台高が高く高台内の削り込みが深い。体部はやや丸みを持って立ち上がり、口縁部は緩やかに外反する。後述する第2小期の天目茶碗に類似し、器高8.0cm、口径11.8cm、高台径4.6cm、径高指数は68である。

以上、瀬戸窯第1小期の天目茶碗は、赤津B窯でみたようにa～cの3種類に細分できそうである。ただし、赤津B窯ではすべての種類が焼成室の充填土から出土しており、時間的な差はあまりないようと思われる。

（2）第2小期以降の天目茶碗（図1の11～24）

瀬戸窯第1小期と美濃窯連房Ⅰ・Ⅱ期との比較のため、瀬戸窯第2小期以降の天目茶碗の展開について概要を述べる。第2小期以降の天目茶碗は、高台端部にナデ調整され口縁部が外反するようになる。灰釉の流し掛けや長石釉の段付き天目の出現も第2小期の特徴である。当該期の窯跡で、発掘調査されたのは上水野地区の穴田窯跡と赤津地区的窯元A窯跡である。

このうち穴田窯（山川・米山1981、藤澤1988・1998、金子2014）は、操業期間が確定できるため、美濃窯連房Ⅱ期の曆年代決定の基準資料となっているが、天目茶碗の生産量は赤津地区や瀬戸地区と比べると少ない。昭和52年から55年にかけて発掘調査された穴田1・2号窯の天目茶碗（12～17）は、やはり削り出し輪高台であるが高台内外面に回転ナデ仕上げが行われるのが特徴で、a～cの3種類に細分される。a類（12・13）は、高台は外側が直立、内側が内傾する。体部はほぼ直線的に立ち上がり上方は直立し、口縁部は緩やかに外反する。2個体の平均値は器高7.3cm、口径10.7cm、高台径4.0cm、径高指数は68である。b類（14・15）は、高台は外側が直立、内側が外傾し、体部はやや丸みを持つ

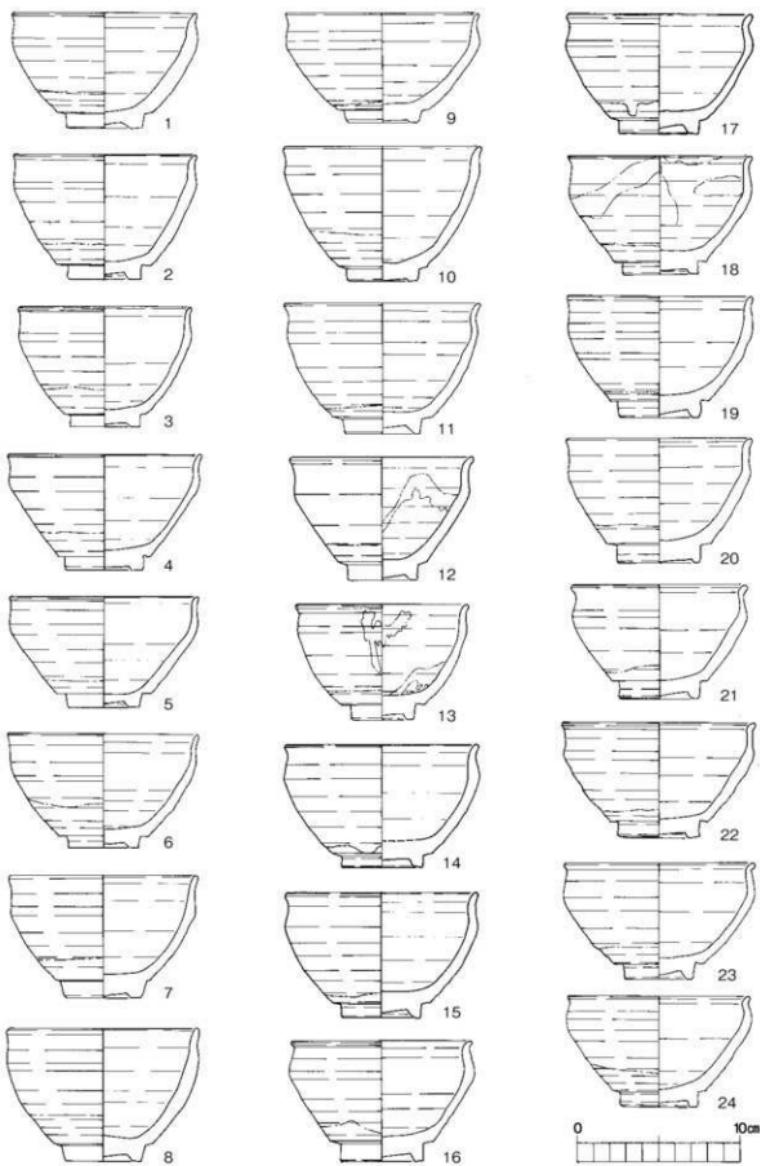


図1 近世瀬戸窯の天目茶碗

て立ち上がり上方は僅かに内傾し、口縁部は緩やかに外反する。2個体の平均値は器高7.7cm、口径11.6cm、高台径4.8cm、径高指数は66である。c類（16・17）は、高台外側が直立、内側が外傾する。体部はほぼ直線的に開き上方が一旦内傾し、口縁部は短く折り返される。2個体の平均値は器高7.4cm、口径10.9cm、高台径4.9cm、径高指数68である。なお、穴田窯ではa類にのみ灰釉の流し掛けが認められ、a・b類は第2小期、c類は第3小期に位置付けられる^(註1)。

窯元A窯（山下1993）では大窯のA1号窯、連房式登窯のA2号窯で天目茶碗が少量出土している。いずれも高台端部に回転ナデ調整が行われており、穴田窯の天目茶碗との対比から第2・3小期に位置付けられる（藤澤1998）。その他に赤津地区では、第3小期になると瓶子窯（藤澤1988、青木2000）などで生産が行われ、第4小期には体部上方が丸味を帯びるとともに内傾し、口縁部が玉縁状になるものも登場する（表1参照）。

瀬戸地区では発掘調査例はないが、第2小期以降の天目茶碗は経塚山窯・元十窯・日面窯など多くの窯で採集されている（藤澤1987・1998）。上水野地区や赤津地区的もの同様な変遷を辿るようで、18～20は第2小期に、21・22は第3小期に、23・24は第4小期に位置付けられる。

以上、瀬戸窯における第2小期から第4小期の天目茶碗は、生産地区が広域に亘り生産量も異なるにも拘らず、ほぼ同様な変遷を辿るとみてよい。なお、瀬戸地区・赤津地区ではその後も天目茶碗の生産は継続し、第8小期までその存在が確認されている。

2. 近世美濃窯の天目茶碗（図2・表3）

近世美濃窯の編年は、植崎彰一氏による5段階12窯式の区分を嘴矢とする（植崎1990）。その後、田口昭二氏によって引き継がれ5期区分が定着している（田口1993）。連房式登窯の導入期にあたる連房Ⅰ期・Ⅱ期は久尻地区を中心に設定されたもので、連房Ⅰ期前半の元屋敷窯式には織部製品が主体で、連房Ⅰ期後半の窯ヶ根窯式には御深井製品の生産が始まり、連房Ⅱ期前半の清安寺窯式には御深井製品が主体となるとされる。

（1）久尻地区的天目茶碗（図2の25～40）

美濃窯久尻地区では瀬戸・美濃窯を通じて最古の連房式登窯とされる元屋敷窯をはじめ、窯ヶ根4号窯・隠居表2号窯・清安寺窯・八幡窯など連房Ⅰ期からⅡ期にかけて操業した窯の発掘調査が行われている。また久尻地区では、瀬戸窯や美濃窯の他地区とは異なり織部製品や御深井製品などの特殊品が集中して生産され、美濃窯編年の標式窯になっている窯跡も多い。しかし、天目茶碗の生産量は少なく、清安寺窯・隠居表2号窯では僅かに出土しているにすぎない^(註2)。

連房Ⅰ期前半の標式窯である元屋敷窯は、平成5年から10年にかけて3次に亘る発掘調査が実施され、平成14年に最終的な発掘調査報告書が刊行されている（加藤2002）。連房式登窯である元屋敷窯と、大窯である元屋敷東1～3号窯から構成される元屋敷窯跡出土の天目茶碗は、I類からⅦ類に分類され、このうちI類からⅣ類は大窯製品で、連房式登窯の天目茶碗はI区Ⅶ・Ⅷ層およびI区搅乱層（II～IV層）から出土したⅦ類である（加藤2002）。削り出し輪高台で、高台端部にナデ調整は行われていない。高台の外側はほぼ直立、内側はやや外傾し、高台内は浅く削り込まれ、高台高は低いが高台の幅は広い。体部はやや丸みを持って開き上方はほぼ直立、口縁部は僅かに外反し端部は薄く仕上げられる（29～32）。データを採った7個体の平均値は器高6.9cm、口径12.3cm、高台径4.4cm、径高指数56である。

連房Ⅰ期後半の標式窯である窯ヶ根窯は、昭和45年の中央自動車道（以下、中央道）建設に伴い発

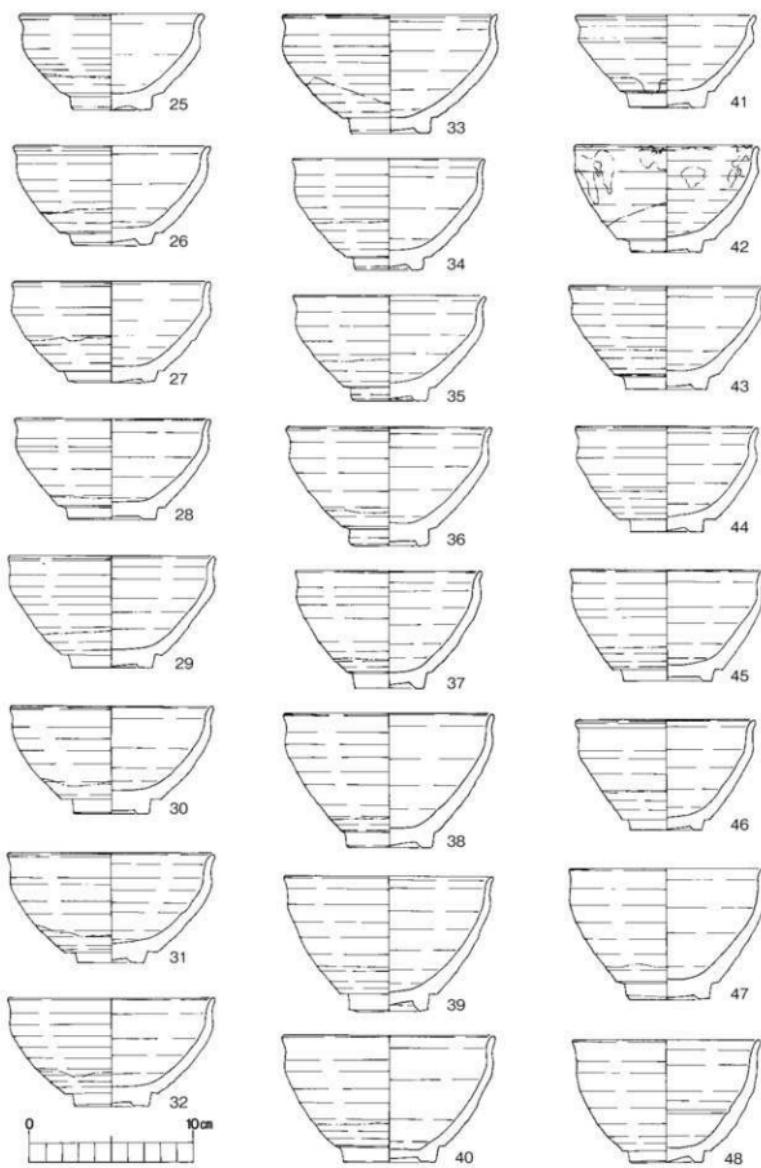


図2 近世美濃窯の天目茶碗

掘調査されたが（大江ほか1970）、平成13・14年に実施された再調査によって、窯体（狭間）構造が全く異なる2基の連房式登窯が上下に重なっていることが確認され、上層の窯は窯ヶ根1号窯（昭和45年に調査された窯ヶ根窯）、新たに発見された下層の窯は窯ヶ根4号窯と命名された。窯ヶ根1・4号窯の出土遺物は様相1から様相5に分類され、天目茶碗は4号窯の操業期間にあたる様相1～3にかけて生産され、1号窯の操業期間にあたる様相4・5には生産されていない（高橋2006）。天目茶碗の出土量は極めて少ないため、中央道建設に伴う発掘調査によって出土したものを加えて図化した（33～36）。34～36は、高台は外側がほぼ直立、内側が外傾し、高台高は低いが高台の幅は広い。体部はほぼ直線的に開き上方はほぼ直立し、口縁部は僅かに外反し端部は薄く仕上げられる。元屋敷窯Ⅶ類と比べると高台内の削り込みがやや深く、高台外面に回転ナデ仕上げが施される。データを採った5個体の平均値は器高6.9cm、口径11.9cm、高台径4.4cm、径高指数58と、元屋敷窯Ⅷ類に近似した数値を示す。なお、窯ヶ根窯では高台端部の回転ナデ仕上げが顕著に認められない33も存在し、元屋敷窯からの連続性が窺われる。器高7.1cm、口径12.9cm、高台径4.7cm、径高指数55である。

連房II期前半の標式窯である清安寺窯（大江ほか1971、中薗2005）の天目茶碗は、昭和45年の中央道建設に伴う発掘調査によって出土したものであるが、全形の判るものは僅か3個体にすぎない（38～40）。いずれも高台の外側は僅かに内傾、内側は外傾し、高台内の削り込みは深い。体部の立ち上がりは強く上方はほぼ直立し、口縁部は僅かに外反し端部は薄く仕上げられる。高台端部のナデ仕上げが明瞭な38・39と不明瞭な40が存在する。前者は器高8.2cm、口径12.6cm、高台径4.9cm、径高指数65、後者は器高7.7cm、口径12.7cm、高台径5.5cm、径高指数61で、元屋敷窯Ⅷ類や窯ヶ根4号窯と比べると器高が高くなっている。

その他に久尻地区では、大窯である隠居表1号窯の上層に構築された隠居表2号窯で天目茶碗が出土している（加藤・林1992）。37は、高台の外側がやや内傾、内側が外傾する。体部は僅かに丸みを持って立ち上がり上方はほぼ直立し、口縁部は僅かに外反し端部は薄く仕上げられる。高台端部の回転ナデ仕上げは認められない。器高7.2cm、口径11.2cm、高台径4.2cm、径高指数64で、やや小形ではあるが清安寺窯の天目茶碗に類似する。なお、久尻地区では灰釉の流し掛けや段付き天目は出土していない。

ところで、ここで問題となるのは大窯最末期（大窯第4段階末）に位置付けられる高根窯沢窯（植崎・伊藤1984、藤澤2002）の天目茶碗（25～28）と、最古の連房式登窯とされる元屋敷窯のⅦ類との関係である。高根窯沢窯では大窯第4段階後半に位置付けられる口縁部のくびれの強い25・26の他に、元屋敷窯Ⅶ類に類似した天目茶碗が出土している。27・28は、高台の外側は僅かに内傾、内側が外傾し、高台高は低いが高台の幅は広く、高台内は浅く削り込まれている。体部は僅かに丸みを持って開き上方はほぼ直立し、口縁部は僅かに外反し端部は薄く仕上げられる。データを採った3個体の平均値は器高6.2cm、口径11.7cm、高台径5.2cm、径高指数53と全体的に小形ではあるが、型式的な特徴は元屋敷窯Ⅶ類と区別できることから、これまで指摘されているように高根窯沢窯と元屋敷窯の操業期間は一部併行した可能性が高い（張替2009）。

（2）定林寺地区の天目茶碗（図2の41～48）

美濃窯定林寺地区では、昭和45年の中央道建設に伴い西洞2号窯・西洞3号窯・東洞2号窯・東洞3号窯の4基の初期連房式登窯が発掘調査されている（大江ほか1971）。織部製品や御深井製品がほとんど出土していないため、現在の美濃窯編年では操業時期を位置付けることを困難にしている。

西洞2・3号窯では、昭和45年に窯体周辺から2個体の天目茶碗が出土している（45・46）。西洞2

号窯の右側壁を壊して3号窯が構築されていることから両窯の新旧関係は明らかであるが、いずれの窯に帰属するかは不明である。45は、高台は外側が内傾、内側が外傾した断面逆台形で、高台高は低く高台の幅は狭い。体部は僅かに丸みを持って開き上方は直立し、口縁端部は薄く仕上げられる。器高6.7cm、口径11.6cm、高台径5.4cm、径高指数は58である。46は、高台の形状は45と同様であるが、体部はほぼ直線的に立ち上がり上方は直立し、口縁部は僅かに外反する。器厚6.7cm、口径10.7cm、高台径4.4cm、径高指数は63と、45と比べると径高指数は大きい。

また西洞2・3号窯から続く物原と作業場が平成9年に発掘調査された（林・長瀬1998）。出土遺物には第4段階後半の大窯である西洞1号窯（大江ほか1971）の製品を含んでおり、天目茶碗はI類からIV類に分類されI・II類は大窯製品、III・IV類は連房式登窯の製品とされている^(註3)。しかし、II類とされた42～44は、高台は外側が僅かに内傾、内側が外傾し、高台内の削り込みは浅く、高台高は低いが高台の幅は広い。体部は僅かに丸みを持って開き上方はほぼ直立し、口縁部は僅かに外反し端部は薄く仕上げられる。高台内外面のナデ調整は行われていない。型的には久尻地区の高根窯沢窯の27・28や元屋敷窯Ⅴ類と同一で、データを探った4個体の平均値は器高6.4cm、口径11.3cm、高台径4.5cm、径高指数57で、やや器高が低いが西洞2・3号窯の45と大差はない。またこのタイプ（型式）のものは、昭和45年に調査された西洞1号窯の出土遺物（41）には確認できないことから（藤澤2002）、西洞2・3号窯でも層位的に古い2号窯の製品である可能性が高い。

東洞2号窯の天目茶碗（47・48）は僅か2個体であるが、平均値は器高7.7cm、口径11.4cm、高台径4.7cm、径高指数68前後と器高のみがかなり高くなっている。高台は外側が僅かに内傾、内側が外傾し、高台内の削り込みは浅い。体部の立ち上がりは強く上方はほぼ直立し、口縁端部は薄く仕上げられる。高台内外面に回転ナデ仕上げは行われていない。形状は久尻地区の清安寺窯や隠居表2号窯のものに類似する。なお、東洞3号窯（中島2005）では全形が判る天目茶碗は出土しておらず^(註4)、定林寺地区では久尻地区と同様、明確な灰釉の流し掛けや段付き天目は確認されていない。

3. 天目茶碗の型式組列と併行関係

ここでは連房式登窯導入期における天目茶碗の型式組列を明らかにすることにより、両窯業地および各地区の併行関係を想定したい。まず当該期の発掘調査が最も進んでいる美濃窯久尻地区の天目茶碗は、元屋敷窯Ⅴ類、窯ヶ根4号窯、清安寺・隠居表2号窯という3種類が存在する。連房Ⅰ期前半の元屋敷窯Ⅴ類を最古のものとすると、高台端部に回転ナデ調整された窯ヶ根4号窯のものが型式学的に連続することは明らかである。窯ヶ根窯では天目茶碗は様相1から3にかけて生産されたと考えられているが（高橋2006）、型式差がほとんど無いため比較的古い様相のもので、様相3までは降らない可能性が高い。連房Ⅱ期前半の清安寺窯や隠居表2号窯では体部の立ち上がりが強く径高指数が大きいもののが存在し、このタイプのものは久尻地区では極めて少なく、元屋敷窯や窯ヶ根4号窯には存在せず、反対に元屋敷窯や窯ヶ根窯の天目茶碗は清安寺窯ではみることができないところから、その後に出現した可能性が高い。したがって、久尻地区における連房式登窯導入期の天目茶碗は、元屋敷窯Ⅴ類⇒窯ヶ根4号窯⇒清安寺・隠居表2号窯へと変遷したと仮定できる。すなわち、元屋敷窯段階に削り出し輪高台で高台周辺が露胎のものに統一され、窯ヶ根4号窯段階に高台端部に回転ナデ調整のものが出現し、大形化するのは清安寺段階ということになる。

次に定林寺地区の天目茶碗には、西洞窯物原Ⅱ類、西洞2・3号窯、東洞2号窯という3種類が存在

表1 連房式登窯導入期における天目茶碗編年表

	美濃窯（久尻地区）		美濃窯（定林寺地区）		
1600	大 窯 4 後半			高根窯沢	西洞1
	瀬戸窯（赤津地区）		瀬戸窯（山口・下品野地区）		
	大 窯 4 末 ・ 登 窯 1 小 期 前 半			高根窯沢	西洞物原
	元星敷		瀬戸窯（赤津地区）		
	窯 ケ 根 4			西洞2・(3)	
	瀬 戸 窯 1 小 期 後 半			清安寺	東洞2
	瀬戸窯（瀬戸地区）		瀬戸窯（上水野地区）		
	瀬 戸 窯 2 小 期			赤津Bb	篠山
	経塚山		穴田a		
	窯 ケ 根 2			窯元A	窓下
	経塚山		穴田b		
	窯 ケ 根 3			窯元A	
	経塚山		穴田c		
	窯 ケ 根 4			窓下	
1650					
1675					
					瓶子
					

する。いずれも高台端部に回転ナデ調整されるものではなく、全てが瀬戸窯第1小期の範疇に含められるることは明らかである。また西洞窯物原II類は高根窯沢・元屋敷窯Ⅲ類に、大形化する東洞2号窯のものは清安寺・隠居表2号窯、特に隠居表窯に酷似することから、両者はそれぞれ併行する可能性が高い。さらに西洞2・3号窯の45は、窯ヶ根4号窯のものと形状は異なるが未だ大形化していない点を重視すれば両者は併行する可能性がある^(註5)。久尻地区における変遷が正しいとすれば、定林寺地区における連房式登窯導入期の天目茶碗は、西洞窯物原II類→西洞2・3号窯→東洞2号窯の順に変遷したものと考えられる。なお、このことは床面が無段の西洞2号窯が古く、有段化する西洞3号窯・東洞2号窯が新しいという、層位学に基づいた窯体構造の変遷とも矛盾するものではない。

美濃窯久尻地区・定林寺地区の窯業生産は、織部製品・御深井製品の有無に代表されるように生産器種構成や、窯体構造は大きく異なるものの^(註6)、美濃窯でも土岐川以北という地域、距離的にも2kmしか離れていないことから、天目茶碗に関しては概ね類似した変遷が想定できた。

さて、瀬戸窯における型式組列と併行関係については、前述のように第1小期の天目茶碗は回転ヘラ削り後調整されないが、第2小期以降高台端部の回転ナデ調整が普遍化するという観点から分類したものである。この点は久尻地区における天目茶碗の変遷と相容れないものとなったが、第1小期について赤津B窯の出土遺物から3種類に細分できる可能性を指摘した。a類は体部がやや丸みを持ち器壁が厚く、b類は体部がほぼ直線的に立ち上がり器高が高く、c類は体部が直線的に開き器壁は薄い。b類・c類は高台や口縁部の形状では区別し難く、3種類とも焼成室の充填土からの出土で層位的には区別できない。形態的特徴から、a類は窯ヶ根4号窯の、b類は清安寺窯・東洞2号窯の天目茶碗に併行するとして間違いないであろう。問題は久尻・定林寺地区では確認されていないc類で、瀬戸窯第1小期においてa類からb類への変遷は想定できるが、c類についてはa類よりは後出である可能性が高いものの、b類より後出とするか併行とするかは現状では判断できない。

また瀬戸窯第2小期以降の天目茶碗は、美濃窯の久尻・定林寺地区では確認されていないため、両地区で紹介した天目茶碗は全て第1小期に併行することは明らかで、第1小期の天目茶碗は少なくとも前半と後半の2型式に細分できる可能性が高い。すなわち、第1小期前半の天目茶碗は久尻地区では元屋敷窯Ⅲ類・窯ヶ根4号窯、定林寺地区の西洞2号窯、瀬戸窯では赤津B窯のa類・欠下窯の9が、第1小期後半の天目茶碗は久尻地区的清安寺窯・隠居表2号窯、定林寺地区的東洞2号窯、瀬戸窯の赤津B窯のb類・薬師山窯のものが該当すると考えられ、さらに赤津B窯のc類および窯町C窯の天目茶碗も第1小期後半に位置付けられよう（表1）。

4. 天目茶碗の曆年代

最後に、連房式登窯導入期における天目茶碗の曆年代を確定しておきたい。近世瀬戸窯の第1小期は、赤津地区および下品野地区には尾張徳川家による召還令が遺ることから、慶長15年（1610）以前には廻りえないと考えている。また第2・3小期に位置付けられる穴田窯の操業期間は、上限は「寛永拾弐年（1635）」銘の長石釉鉄絵鉢の存在から、下限は寛文7年（1667）に御林方奉行所の役人衆の屋敷が造成されたため退去させられたという古記録が遺すことから、寛永期後半から寛文期前半すなわち17世紀中葉に位置付けられる（藤澤1998）。

一方、近世美濃窯の編年では、連房Ⅰ期の上限は「慶長拾年（1605）」銘の長石釉鉄絵扇面形平向付や、織部製品にみられる紀年銘資料の存在から1605～30年頃に、連房Ⅱ期は穴田窯の操業年代から1630～

70年頃に位置付けられている（橋崎1990、田口1993）。すなわち、曆年代からは連房Ⅰ期前半・後半が概ね瀬戸窯第1小期に、連房Ⅱ期前半・後半が第2・3小期に併行するとされてきた。しかし、前述のように美濃窯久尻地区・定林寺地区の天目茶碗は、すべて瀬戸窯第1小期の範疇に含まれることから、連房Ⅱ期前半の清安寺窯の天目茶碗は、瀬戸窯第2小期の上水野地区穴田窯が操業を開始する寛永期後半より前、すなわち寛永期前半までに位置付ける必要がある。

近年久尻地区では元屋敷窯跡の発掘調査によって、慶長10年銘の扇面形平向付は大窯である元屋敷東1号窯の最終窯であるC窯に類例が存在することから、連房Ⅰ期前半の元屋敷窯の創業年代は「慶長十二歳（1607）」銘の匣鉢以降であろうこと。また元屋敷窯の廃絶年代は、元屋敷窯からの連續性が指摘される窯ヶ根窯の創業が、「慶長拾九年（1614）」銘の匣鉢の存在から慶長末年まで遡る可能性が高いことから、元屋敷窯の操業期間は慶長期後半の短い期間であったことなどが指摘されている（加藤2002）^(註7)。

さらに窯ヶ根1・4号窯跡の発掘調査によって出土遺物は様相1から様相5に分類され、様相1・2は連房Ⅰ期後半^(註8)、様相3は連房Ⅱ期前半、様相4は連房Ⅱ期後半にはば対応するという（表2参照）。そして、織部製品が主体の様相1は慶長19年頃には成立し、御深井製品が出現する様相2を元和年間（1615～23）に、御深井製品が主体となる様相3を17世紀第2四半期に位置付けている（高橋2006）。したがって、近年の久尻地区的調査によれば、従来の連房Ⅱ期前半の曆年代が、第1小期まで遡る可能性が指摘されるようになっている。

そこで表1の天目茶碗編年表では、大窯第4段階後半は文禄3年（1598）以降の成立（藤澤2002）で慶长期前半に、大窯第4段階末と元屋敷窯Ⅷ類を慶长期後半に、窯ヶ根4号窯の天目茶碗を元和期に、清安寺・隠居表を寛永期前半に位置付けた。これは近年の久尻地区的曆年代観に大きく矛盾するもので

表2 近世久尻地区的窯業活動（高橋2006より転載）

	様相1	様相2	様相3	様相4	様相5	様相6
元屋敷窯	-----					
窯ヶ根4号窯	-----	-----	-----			
隠居表2号窯	-----	-----	-----	-----		
青安寺窯（南窯）		-----	-----			
清安寺窯（東南窯）		-----	-----			
青安寺窯（東窯）		-----	-----			
八幡窯			-----	-----		
窯ヶ根1号窯			-----	-----		
窯ヶ根2号窯			-----			
乙塚東窯				-----	-----	
段尻巻窯					-----	
窯ヶ根3号窯					-----	
下原窯					-----	

はない。なお、これを瀬戸窯編年と対応させると、第1小期前半は慶長期後半から元和期、第1小期後半は寛永期前半、第2小期は寛永期後半以降ということになろう。

以上のように、第1小期（17世紀初頭を除く前葉）には、美濃窯久尻・定林寺地区では天目茶碗の生産は停止し、定林寺地区では窯業生産自体も衰退したようである。瀬戸窯では第2小期（17世紀中葉）以降も生産が継続するのに対して、美濃窯における天目茶碗の生産拠点は、土岐川以南東部地域の大川地区の大川東窯（田口ほか1979）や水上地区的田ノ尻窯（橋崎ほか1981）に移ったものと考えられる。両窯では灰釉の流し掛けや段付き天目の生産が行われており、瀬戸窯の天目茶碗との比較も可能であろう。第2小期以降の瀬戸窯と美濃窯土岐川以南東部との天目茶碗の併行関係については今後の検討課題としたい。

本稿を草するにあたり、土岐市教育委員会の林順一氏、財團法人土岐市埋蔵文化財センターの中島茂氏には遺物実見に際して、また愛知学院大学大学院博士後期課程の森まさか氏には実測および図版作成にあたってご尽力をいただいた。記して感謝を申し上げる。

（註1）穴田窯の出土遺物は、穴田2号窯の中段床面下の遺物を中心に穴田Ⅰ期、穴田1号窯周辺の穴田Ⅱ期、穴田窯全体で最も新しい様相を示す遺物を穴田Ⅲ期の3期に細分され、穴田Ⅰ期は第2小期に、穴田Ⅱ・Ⅲ期は第3小期に位置付けられる（藤澤1998）。

（註2）八幡窯では天目茶碗が1個体圓化されているが、内反高台を有する全く異なるスタイル（形式）のものであるため、今回は除外した（長瀬・加藤2000）。

（註3）西洞2号窯の天目茶碗IV類は、西洞2・3号窯の45に酷似しているが、46に類似したものは西洞窑物原からは出土していない（林・長瀬1998）。

（註4）定林寺東洞2号窯では天目茶碗が2個体出土しているが、いずれも高台周辺が欠損した小片で資料的に安定性を欠くことから、今回は採り上げなかった（中島2005）。

（註5）西洞2・3号窯の46は径高指數が大きいことから、層位的に新しい3号窯のものかもしれない。

（註6）有段横狭間構造の元屋敷窯と、無段斜狭間構造（潮竹式）の西洞2号窯との新旧関係や、窯体構造の導入経緯については議論の分かれどころであるが、天目茶碗の型式からみると両窯は同時期と言わざるを得ない。

（註7）その他に元屋敷窯周辺から出土した御深井製品を、元屋敷窯発掘後の一廻ヶ根窯や清安寺窯の遺物として位置付けるなど重要な指摘がなされている。

（註8）廻ヶ根窯の様相1は連房I期後半に比定されているが、御深井製品を含まないので、連房I期前半の範疇に含めるべきであろう。

《引用・参考文献》

- 大江幸はか1970『窯ヶ根古窯址』土岐市教育委員会
大江幸はか1971『土岐市中央自動車道開通跡地埋蔵文化財発掘調査報告書』土岐市教育委員会
田口昭二はか1979『大川東窯第3群緊急発掘調査報告書』瑞浪市教育委員会
橋崎彰一はか1981『田ノ尻古窯跡群発掘調査報告書』瑞浪市教育委員会
山川一・米山祐章はか1981『穴田第1・2号窯発掘調査概要』瀬戸市教育委員会
住田誠行1982『瑞浪の古窯』『研究紀要第1号』瑞浪陶磁資料館
柄崎彰一・伊藤嘉章はか1984『高根山古窯跡群発掘調査概報』土岐市教育委員会
藤澤良祐1986『瀬戸大窯発掘調査報告書』『研究紀要V』瀬戸市歴史民俗資料館
藤澤良祐1987『本業焼の研究（1）』『研究紀要VI』瀬戸市歴史民俗資料館
藤澤良祐1988『本業焼の研究（2）赤津村・上水野村を中心にして』『研究紀要VII』瀬戸市歴史民俗資料館
藤澤良祐1989『本業焼の研究（3）一下品野村・下半田川村を中心にして』『研究紀要VIII』瀬戸市歴史民俗資料館
柄崎彰一1990『近世瀬戸・美濃の変遷』『尾邑』瀬戸市教育委員会
加藤真司・林順一1992『尾邑表1・2号窯発掘調査報告書』土岐市教育委員会
藤澤良祐1993『瀬戸市史 磁磁史篇四』瀬戸市
山下峰司1993『窯元A・窯跡』瀬戸市埋蔵文化財センター
田口昭二1993『美濃窯の焼物』多治見市教育委員会
井上喜久男1997『桃山陶その後』『東洋陶磁第26号』東洋陶磁学会
藤澤良祐1998『瀬戸市史 磁磁史篇六』瀬戸市
林順一・長瀬未左子はか1998『足守寺西窯古窯発掘調査報告書—西洞2・3号窯に伴う作業場及び物原の調査—』財團法人土岐市埋蔵文化財センター
青木修2000『市内遺跡調査報告II 瓶子窯跡』瀬戸市埋蔵文化財センター

長瀬末左子・加藤真司ほか2000「八幡窯跡発掘調査報告書」財土岐市埋蔵文化財センター
加藤真司ほか2002「元屋敷陶器窯跡発掘調査報告書」土岐市教育委員会
藤澤良祐2002「瀬戸・美濃大窯編年の再検討」「研究紀要第10輯」財瀬戸市埋蔵文化財センター
柄崎彰一編2003「江戸時代の美濃窯」財瀬戸市埋蔵文化財センター
金子健一2003「江戸時代美濃窯の変遷」「企画展 江戸時代の美濃窯」財瀬戸市埋蔵文化財センター
中寫茂2005「土岐市中央自動車道関連遺跡出土遺物整理報告書」土岐市教育委員会
高橋健太郎ほか2006「窯ヶ根窯跡発掘調査報告書」土岐市教育委員会
張替清司ほか2009「高根古窯跡群発掘調査報告書—工房跡の範囲確認調査—」財土岐市埋蔵文化財センター
金子健一ほか2013「穴田古窯跡群」「市内遺跡調査報告VI」財瀬戸市文化振興財团埋蔵文化財センター
金子健一ほか2014「穴田窯跡I—道傍編—」財瀬戸市文化振興財团埋蔵文化財センター

表3 天目茶碗計測表

図	高集地	地区	高名	出土地点	法量 (cm)			徑高指 数 × 100	口縁残存 率 %	高台残存 率 %	備考	典拠
					器高	口径	高台径					
1-1	赤津	赤津	赤津B	床面下	7.0	11.1	4.7	63	70	100		藤澤1988
2			赤津B	採集	7.6	11.0	4.3	69	10			藤澤1988
3			赤津B	採集	7.3	10.3	4.2	71	25			藤澤1988
4			赤津B	床面下	7.1	11.7	4.6	61	55		歪み大	藤澤1988
5			赤津B	床面下	6.8	11.4	4.4	60	50		歪み大	藤澤1988
6		下品野	窓町C	採集	6.9	11.4	4.2	61	75	100		藤澤1989
7			薬師山	採集	7.5	11.4	4.6	66	100	100	焼成不足	藤澤1986
8			薬師山	採集	8.1	11.6	4.6	70	100	100		藤澤1986
9			山口	欠下	6.7	11.6	4.2	58	10			藤澤1986
10			山口	欠下	8.2	11.9	4.2	69	100	100	焼成不足	藤澤1986
11			山口	欠下	8.0	11.8	4.6	68	30			藤澤1986
12	瀬戸	上水野	穴田	採集	7.5	11.0	4.2	68	100	100	焼成不足、灰流し	藤澤1998
13			穴田	1号窯	7.0	10.4	3.8	67	10		灰流し	藤澤1998
14			穴田	2号窯	7.6	11.6	4.8	66	20			藤澤1998
15			穴田	2号窯	7.7	11.6	4.7	66	30			藤澤1998
16			穴田	1号窯	7.3	10.8	5.1	68	75			藤澤1998
17			穴田	1号窯	7.4	11.0	4.8	67	20			藤澤1998
18		瀬戸	絆縫山	採集	7.2	11.1	4.6	65	55		灰流し	藤澤1998
19			絆縫山	採集	7.4	11.2	4.8	66	50		やや焼成不足	藤澤1998
20			絆縫山	採集	7.6	11.2	4.9	69	95			藤澤1998
21			絆縫山	採集	7.0	10.7	4.7	65	15			藤澤1998
22			絆縫山	採集	7.0	11.5	5.0	61	15			藤澤1998
23			絆縫山	採集	7.1	11.5	4.2	62	75			藤澤1998
24			絆縫山	採集	6.8	11.0	4.5	62	35			藤澤1998
25	久屋	久屋	高根窯沢		5.9	11.1	4.7	53	30		焼成不足	藤澤2002
26			高根窯沢		6.0	11.7	4.7	51	45			藤澤2002
27			高根窯沢		6.2	11.9	5.3	52	20	75		藤澤2002
28			高根窯沢		6.1	11.6	5.2	53	30	50		藤澤2002
29			元經敷	I区埴・繩層	6.8	12.4	5.0	55	5	100		
30			元經敷	I区搜・乱層	6.6	12.2	4.5	54	40	100	焼成不足	
31			元經敷	I区埴・繩層	6.7	12.4	4.0	54	10	100		
32			元經敷	I区埴・繩層	6.6	12.4	4.5	53	45	100	歪み大	
33			窯ヶ根	1970調査	7.2	13.0	4.8	55	30	100	歪み大	
34			窯ヶ根	1970調査	6.8	11.6	4.0	59	45	100	歪み大	
35	美濃	定林寺	窯ヶ根	1970調査	6.4	11.6	4.4	55	5	100		
36			窯ヶ根	4号窯	7.2	12.3	4.8	59	30	100		
37			窯ヶ根	2号窯	7.1	11.2	4.2	63	30	100		
38			清安寺		8.2	12.6	5.0	65	25	100	焼成不足	
39			清安寺		8.2	12.6	4.8	65	5	85	焼成不足	
40			清安寺		7.7	12.7	5.5	61	50		焼成不足	
41			西洞	1号窯	5.6	10.8	4.6	52	30		高台周辺に錯雜	藤澤2002
42			西洞	物原	6.5	11.0	4.2	59	40	100	灰流し	
43			西洞	物原	6.3	11.8	5.0	53	30	100		
44			西洞	物原	6.4	11.0	4.5	58	40	100		
45			西洞	2・3号窯	6.7	11.6	5.4	58	20			
46			西洞	2・3号窯	6.7	10.7	4.4	63	15	100	やや焼成不足	
47			東洞	2号窯	8.0	11.7	4.9	68	100	100	焼成不足	
48			東洞	2号窯	7.4	11.2	4.4	66	70		焼成不足、施釉状況不明	
編年表	瀬戸	赤津	窯元A	2号整地層	7.8	10.8	4.4	72	10	95		山下1993
			窯元A	2号整地層	7.3	11.2	4.8	65	10	100		山下1993
			窯元A	A2土坑	7.2	10.9	5.0	66	15			山下1993
			瓶子	採集	7.5	11.2	4.8	67	10			藤澤1988

付編 2 連房式登窯導入期における窯体構造について

森 まどか

はじめに

瀬戸・美濃窯における連房式登窯の導入は、17世紀初頭ごろ加藤景延が九州に学びに行ったことよって、美濃窯久尻地区元屋敷窯を築いたことが契機とされている。現在、連房式登窯は狭間構造によって分類されることが多いが、連房式登窯導入期には生産器種が異なるように、窯体構造にも様々な形状が確認される。窯体構造の研究は、古くから調査が行われてきた美濃窯土岐川以北の地域において盛んに行われてきたが、それらが窯業地や地区ごとでどのような変遷や併行関係をとるのかは明確に示されていない。そこで本稿では、瀬戸・美濃窯にみられる連房式登窯導入期の窯体構造の再分類を行い、当該期の窯体構造について考察を行う。

1. 窯体構造の研究史と問題点

(1) 研究史

瀬戸・美濃窯における連房式登窯の発掘調査は、美濃窯元屋敷窯が嚆矢である。元屋敷窯は1930年代に高木康一氏や加藤土師萌氏、さらに小川栄一氏によって調査・測量を行われたものの、考古学的な調査には至っておらず^(註1)、連房式登窯導入期の窯体構造に関しては不明な点が多いままであった。

しかし1958年、橋崎彰一氏によって元屋敷窯跡の学術調査が行われ、窯体の精密な実測が行われた。これによって、連房式登窯の窯体構造に関する研究が大きく飛躍していくこととなる。

1969年から1971年にかけて、中央自動車道の建設に伴い窯ヶ根窯・清安寺窯・定林寺西洞窯・定林寺東洞窯の調査が行われ、無段の連房式登窯が新たに発見された。そして、美濃窯における連房式登窯を無段連房式登窯・有段連房式横狭間登窯^(註2)・有段連房式縦狭間登窯の3種類に分類し、磁気測定の結果から、大江傘氏は有段連房式横狭間登窯（元屋敷窯）より無段連房式登窯（定林寺西洞2号窯・東洞3号窯）の方が古いとの見解を示した^(註3)（大江1970・1971）。

さらに、古川庄作氏も大江氏と同様に定林寺窯の無段斜狭間の方が元屋敷窯の有段横狭間より古いと考えており、定林寺地区で最も古い登窯の狭間構造は無段斜狭間で削竹形の側壁および天井壁の構造（以下、上部構造という）をもつと想定している（古川1974・1976）。

これに対し、今井静夫氏は出土遺物や窯体構造、構築材などから大江・古川両氏の見解に疑問を呈し、有段横狭間の元屋敷窯と無段斜狭間の定林寺窯が併行、あるいは元屋敷窯より新しい窯ではないかとの推察を行っている（今井1976）。

調査された連房式登窯には天井まで残存しているものは見つかっておらず、上部構造についての研究は進められていなかったが、関口広次氏は狭間構造と上部構造の関わりを考慮しつつ、無段斜狭間で天井が直線的な朝鮮系（削竹形）、有段横狭間で天井が低い肥前系、有段縦狭間で天井が高い美濃系を基本形態とした（図1）。そして、元屋敷窯は横狭間構造の肥前系の階段状連房式登窯であり、定林寺西洞2号・東洞3号窯は朝鮮系の削竹形連房式登窯に類似していると述べている（関口1979）。

さらに桃井勝氏は、美濃窯の連房式登窯を有段横狭間・無段斜狭間・有段斜狭間・有段縦狭間の4種類に分類し、狭間および上部構造の模式図を提示した（図2）。この狭間構造および天井構造が瀬戸・美濃窯の連房式登窯の構造として広く認識されていくのである（桃井1979）。

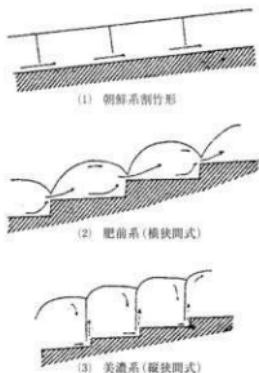


図1 狹間孔（通焰孔）構造の基本形態
(関口1979より転載)

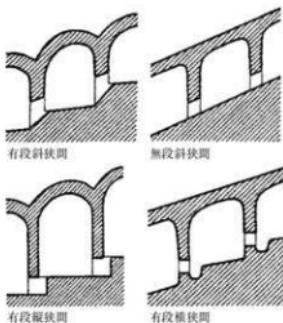


図2 連房式登窯の構造
(桃井1980より転載)

また熊海堂氏は、日本の連房式登窯を上部構造から大きく割竹形・横室形・芋虫形の3種に分類している（熊1995）。そして、割竹形は側壁が真っすぐで天井は中軸線に集合してアーチ状になり、横室形は側壁は真っすぐで焼成室ごとに独立した天井をもつ。芋虫形はやや楕円のカーブをもって鶏籠のような形で、焼成室ごとに独立した窯構造であると述べられている。

（2）連房式登窯導入期における問題点

現在、連房式登窯は狭間構造によって分類が行われているが、研究者によって狭間構造の認識が統一されていないことが課題として残っている。さらに、元屋敷窯が古いか定林寺窯が古いかといった見解は研究者によって異なっており、古川・大江氏は定林寺窯の方が古く、今井氏は定林寺窯と元屋敷窯は併行、または元屋敷窯の方がより古いとの認識にあるが、この問題については解決しておらず、現在では文書から元屋敷窯が最古との認識が強い傾向にある。また、遺物による近世美濃窯編年は特殊品の有無による窯式編年であるから、窯場や村ごとに生産様相の異なる近世では年代比定が出来ない窯がみられ、さらに瀬戸窯では美濃窯で連房式登窯が操業し始めた頃、依然として大窯によって窯業生産が行われていたことが判明している（藤澤1988）、窯体構造から美濃窯との併行関係は示されていない。

1980～1990年代にかけて美濃窯では隱居西窯・高根窯・隱居表窯・八幡窯・瀬戸窯では穴田窯・瓶子窯・赤津B窯・窯元A窯などが発掘調査された。そして、発掘事例の増加に伴い、その後新たな見解が出されている。藤澤良祐氏は瀬戸・美濃窯の連房式登窯を、有段横狭間・無段斜狭間・有段斜狭間・有段縦狭間、そして瀬戸窯のみでみられる分炎柱連房式登窯の5種類に分類し、さらに有段斜狭間を床面傾斜から2つに細分している。そして、有段横狭間・無段斜狭間の窯は近世瀬戸窯編年（藤澤1998）の登窯第1小期には限定され、有段斜狭間は床面傾斜をもつものは第2小期に、床面が水平なものは第3小期に出現し、有段縦狭間は遅くとも第5小期以降に主流となることが指摘されている。また、分炎柱連房式登窯は第5小期まで残存するという。さらに藤澤氏は定林寺西洞窯の層位の順序から、無段斜狭間から有段斜狭間へ変遷し、その後有段縦狭間に変化するものと考えている（藤澤2005）。

これに対し、久尻地区においては別の変遷を辿ると考えているのは高橋健太郎氏である。窯ヶ根窯では1970年の調査で1号窯1面まで検出し、その後2001年から2002年にかけて行われた再調査で1号窯1面の下に2~4面、また層位的に4号窯が、さらに1号窯と4号窯の西側に3号窯が確認された。そして4号窯は横狹間構造、1号窯1~5面および3号窯は縦狭間構造をとることが判明した。これは藤澤氏の見解にたって窯ヶ根窯の窯体構造をみると、4号窯と1号窯5面との間に断絶が認められることになる。このことに関して高橋氏は、窯ヶ根1号窯・4号窯と八幡窯が支柱を有する点で共通しており、完全な断絶は認めがたいとして、横狹間式の狭間構造に前代にみられた大窯の窯体の知識が加わることで、飛躍的に横狹間式から縦狭間式の狭間構造に変化したものと考えている(高橋2006)。しかしながら、高橋氏は窯体構造の分類を行って検討をしておらず、明確な変遷が確認されていない。瀬戸・美濃窯の連房式登窯導入期の窯体構造を型式分類し、確認していく必要がある。

そこで、本稿では窯体構造から瀬戸・美濃窯の連房式登窯導入期の窯を探り上げ、新たな分類基準をつくり、これらの併行関係および変遷について検討を行う。なお、瀬戸窯では前述したように、依然として大窯を使用していることから、これらの併行関係もあわせて考えていきたい。

2. 美濃窯の連房式登窯

(1) 久尻地区

久尻地区は土岐市泉町久尻に位置し、導入期の連房式登窯としては元屋敷窯・窯ヶ根窯・清安寺窯・隠居表窯・八幡窯が発掘調査されている。

①元屋敷窯

元屋敷窯は1958年に樋崎彰一氏によって窯体の調査が行われ、1967年に国指定史跡に登録された窯である。その後、史跡整備事業の一環として元屋敷窯の再検出と窯体周辺の発掘調査が行われている(加藤2002・同2003)。元屋敷窯は焚口・燃焼室・焼成室14室からなり、撃道部は滅失していた。しかし、地山が第14室目の後方で急激に傾斜が増すことから、第14室目が最後方の焼成室であるとの見解が出されている。焼成室には火床がみられ、火床境によって焼成部と区切られている。狹間柱はスサ入り粘土や窯の廃材で構築し、周りに粘土を貼って築いている。出し入れ口は左右いずれかにみられる。狹間構造は有段横狹間で、部屋と部屋の境に段を持ち、部屋の最前部に狹間が設けられている(加藤2003)。焼成室の幅は約210~245cm、奥行きは約120~165cm、床面傾斜は約17~21°である。近世美濃窯編年連房1期前半の標式窯である(樋崎1990)。

②窯ヶ根窯

窯ヶ根窯は1969年から行われた中央自動車道建設に伴って調査され(大江1971)、その後2001年から2002年に行われた再調査において、中央道の調査の際に検出された窯は1~5面の床面をもち、さらに下層に窯が存在することが確認された。上層の窯を1号窯、下層の窯を4号窯と名付けている^(注4)(高橋2006)。

1号窯は4号窯廃絶後、造成して構築された窯である。発掘調査により、4回の修復を経て1~5面あることが確認されている。1号窯5面は4号窯直上に構築され、残存長10.4mで、燃焼室と焼成室6室が確認されている。4面は5面埋土上に床面を構築しており、残存長10.3mである。5面の燃焼室の位置をほほ踏襲しているが、燃焼室から焼成室3室の西壁を20cm近く縮小しており、窯体の平面プランが扇状を呈している。1面は1号窯の最終床面で、残存長10.3mである。1号窯2面の焼成室の位置

を踏襲しており、窯体は強く扇状に開いている。1号窯2～5面は焼成室中央に天井支柱が1本、1面は1～2本確認され、匣鉢を積み重ねて構築されている。5面と4面の狭間柱は匣鉢に粘土を充填させたものや、立方体の粘土ブロックで構築されたものがみられる。1面の狭間柱は立方体の粘土ブロックで構築されたものである。また、狭間柱・天井支柱は匣鉢を積んだ後、床面から隔壁・窯壁へと粘土で被覆している。1号窯の出し入れ口はすべて右側に設けられ、狭間構造は全ての面において有段縦狭間構造をもつ(高橋2006)。狭間は前室最後部に狭間柱を構築し、次室最前部の床面と密着している。なお、次室に構成される狭間孔は床面と交互に構築されている。5面の焼成室の幅は約210～250cm、奥行きは約90～145cm、床面傾斜は約7～16°、4面の焼成室の幅は約165～270cm、奥行きは約80～120cm、床面傾斜は約5～18°、1面の焼成室の幅は約135～280cm、奥行きは約90～150cm、床面傾斜は約0～3°である。

4号窯は残存長12.1mで、焼成室4室を検出している。焼成室中央には天井支柱が1本確認され、狭間柱・天井支柱は匣鉢や転用した水指に粘土を充填したものを積み重ね、周りに粘土を貼り付けて構築されている。窯体の平面形はほぼ長方形をとり、焼成室は横長の台形を呈する。出し入れ口は左右のいずれかに設けられており、出し入れ口と反対側に差し木口が確認される。狭間構造は有段横狭間構造をもち、元屋敷窯と同様の構造である(高橋2006)。焼成室の幅は約300～320cm、奥行きは約150～170cm、床面傾斜約15～20.5°で、焼成室には火床がみられ火床境によって焼成部と区切られている。近世美濃窯編年連房I期後半の標式窯である(橘崎1990)。

③清安寺窯

清安寺窯は、窯ヶ根窯と同じく中央自動車道建設に伴う発掘によって調査された窯跡である(大江1970)。燃焼室・煙道部は既に滅失しており、焼成室は4室が残存していた。狭間柱は円柱形や四角形の粘土塊によって構築され、出し入れ口は右側に設けられている。狭間構造は有段横狭間構造と報告され、元屋敷窯を継承し同構造をもつと考えられている(今井1997)。しかし、狭間柱は部屋の最後部に次室の床面と密着することなく設置されており、縦狭間とは異なる構造をもち、横狭間の火床に類似した構造がみられる。焼成室の幅は約150～200cm、奥行きは約135cm、床面傾斜は約25～26°である。近世美濃窯編年連房II期前半の標式窯である(橘崎1990)。

④隠居表窯

隠居表窯は元屋敷窯と同じ史跡整備事業の一環として1993年に発掘調査が行われ、連房式登窯は隠居表2号窯が確認されている(加藤1992)。2号窯は残長10.68mで、焚口・燃焼室・煙道部は滅失し、焼成室6室が残存していたが遺存状況は極めて悪い。燃焼室の幅・奥行き等は不明であるが、上方へいくほど横幅が広がる。床面は1～2回ほど補修を行っている。狭間柱は円柱状の粘土塊のものや、匣鉢に粘土を充填して積み重ね周りに粘土を貼り付けているものがみられる。出し入れ口は残存部では右側に確認され、狭間構造は有段斜狭間構造をもつとされる(加藤1992)。焼成室の床面傾斜は約18°である。

⑤八幡窯

八幡窯は1999年に宅地造成に伴い発掘調査が行われ、残存長9.6mで、焼成室7室が検出されている(加藤2000)。前方の焼成室は地山を階段状に造成して築窯されているが、後方の3部屋は順次盛土されて継ぎ足していることが判っている。焼成室の真ん中に隅丸方形の粘土塊を用いた天井支柱が1本建ち、狭間柱は匣鉢に粘土を充填させて積み重ねたものや粘土塊を用いるもの、粘土を塗り固めて構築しているものなどがみられる。出し入れ口は全て右側に設けられ、狭間構造は有段縦狭間構造をもつとされる

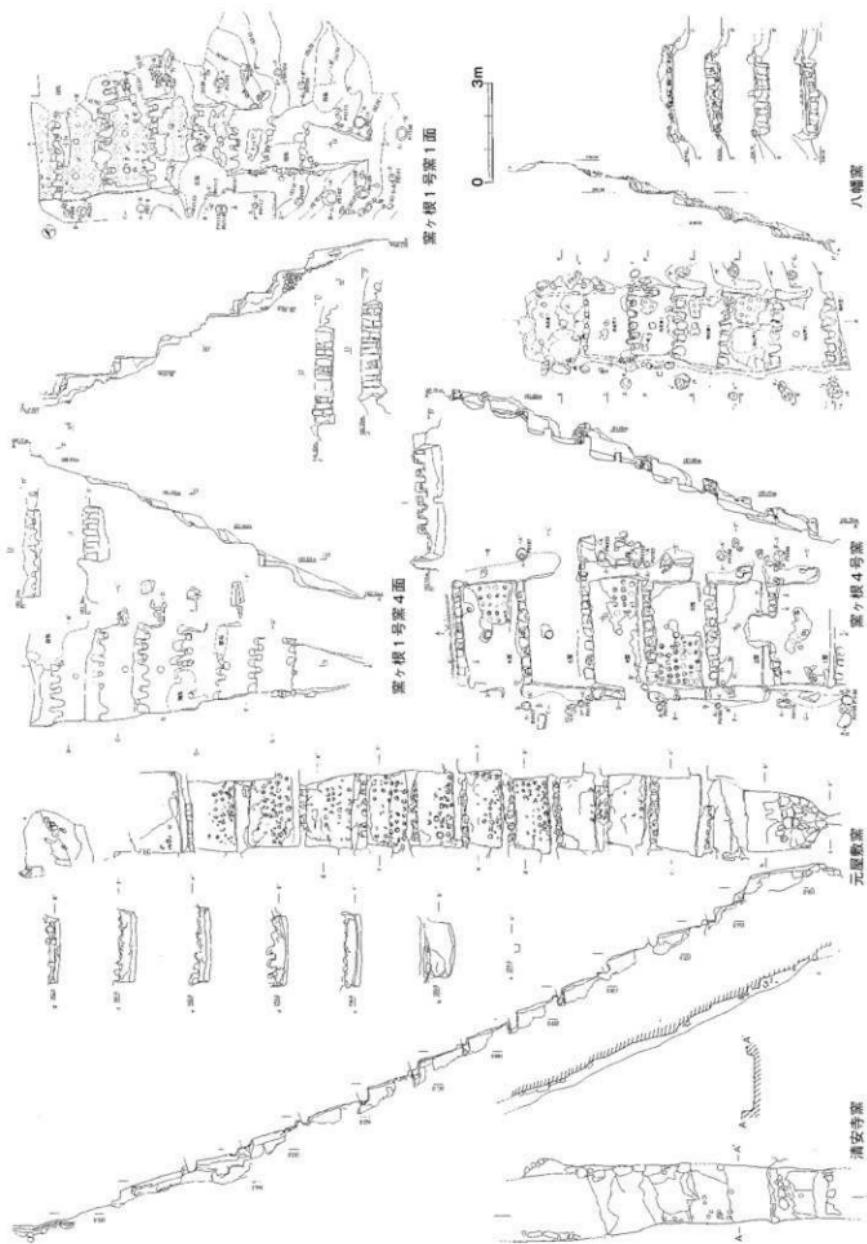


図3 近世美濃の連房式登窓実測図（1）（各報告書より転載）

(加藤2000)。窯ヶ根1号窯4・5面と同様の構造である。焼成室の幅は約170~230cm、奥行きは約115~140cm、床面傾斜は約6~14°である。近世美濃窯編年連房II期に比定されている(加藤2000)。

(2) 定林寺地区

定林寺地区は土岐市泉町定林寺に位置し、導入期の連房式登窯には定林寺西洞2号窯・西洞3号窯・東洞2号窯・東洞3号窯がみられる。窯ヶ根窯・清安寺窯と同じく、中央自動車道建設に伴って発掘調査が行われている(大江1970)。

①定林寺西洞2・3号窯

西洞2号窯は残存長16.2mで、焼成室9室と煙道部が残存しており、焚口・燃焼室付近は滅失している。窯壁は粘土を積み重ねて構築しており、右側には差し木口が確認されている。隔壁は天井まで達しておらず、下方の隔壁は上端に粘土を貼り付けて一定の高さで終わらせているが、上方の隔壁は上端や前後が凸凹で、隔壁の残存に大きな違いがみられる。出し入れ口は全て左側に設けられ、無段斜狭間構造をもつ(大江1970・今井1997)。焼成室に段はみられず燃焼室から煙道部まで床面が直線的である。焼成室の幅は約150~315cm、奥行きは約80~150cm、床面傾斜は約22.5°である。

西洞3号窯は西洞2号窯廃絶後、窯体を埋めて上層に構築された窯である。残存長は約19mで、焚口・燃焼室・焼成室12室が確認されている。窯壁には差し木口が確認される。狭間構造は有段斜狭間構造で、焼成室前方に火床をもつとされる(大江1970)。しかし、横狭間構造の窯に伴う火床とは異なり、部屋の最後部に設置された狭間柱と次室を形成する段差によって造られた間の部分であろう。清安寺窯と同様の構造をもつ。なお、出し入れ口は左側に設けられていたものと思われる。焼成室の幅は約175~205cm、奥行きは約90~135cm、床面傾斜は約8~14°である。

②東洞2号窯

東洞2号窯は全長約20mで、焚口・燃焼室・焼成室13室・煙道部が検出されている。狭間構造は有段斜狭間構造で焼成室前方に火床をもつとされる(大江1971)。しかし西洞3号窯と同様の構造をもち、やはり横狭間構造の火床ではないと思われる。焼成室の幅は約95~180cm、奥行きは約90~160cm、床面傾斜は約12~28°である。

③東洞3号窯

東洞3号窯は全長9.1mで、焚口・燃焼室・焼成室7室・煙道部まで残っているが、煙道部上方は削平されている。第1室より順次焼成室が拡大し、第5室で大型化した後に第6室で縮小して、第7・8室でまた拡大していることから、後方の3室が後に加設されたものと考えられている。出し入れ口は右側に設けられ、狭間構造は無段斜狭間構造をもつとされる(大江1971)。狭間の前後に段はみられず西洞2号窯と同様の構造である。焼成室の幅は約80~135cm、奥行きは約90~160cm、床面傾斜は約4~5°である。

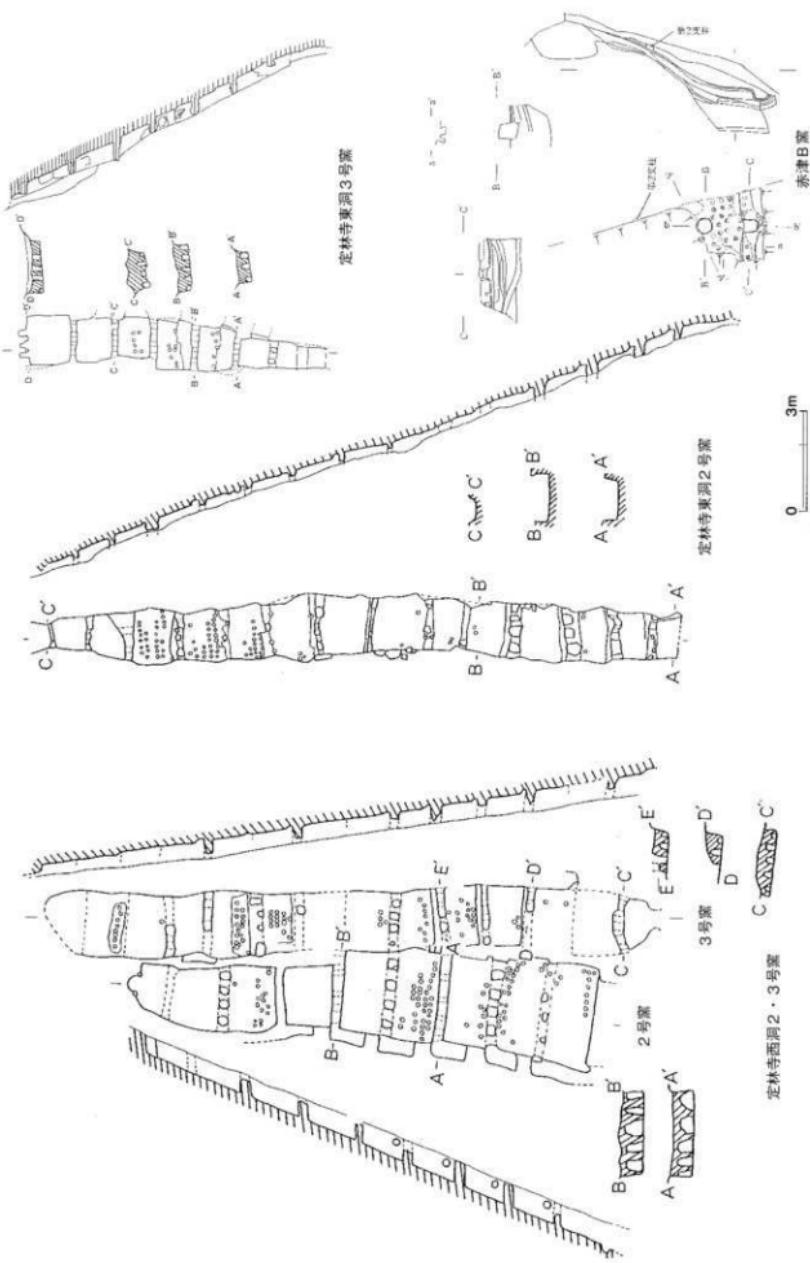
(3) 土岐川以南の東部

土岐川以南の東部地域における連房式登窯導入期の窯には、瑞浪市に所在する大川地区の大川東窯と、水上地区の田ノ尻窯が発掘調査されている。

①大川東窯

陶町大川に位置する大川東窯では、1基の大窯、2基の連房式登窯が所在し、1978年から1979年にかけて盗掘や自然災害による破壊に伴い緊急発掘が行われている(桃井1979)。大川東1号窯は焼成室3室が残存しているが、遺存状況は極めて悪い。天井部の残壁のなかには円形棒状の痕跡があり、残存

図4 近世美濃窯の連房式登窯・瀬戸窯の大窯実測図（各報告書より転載）



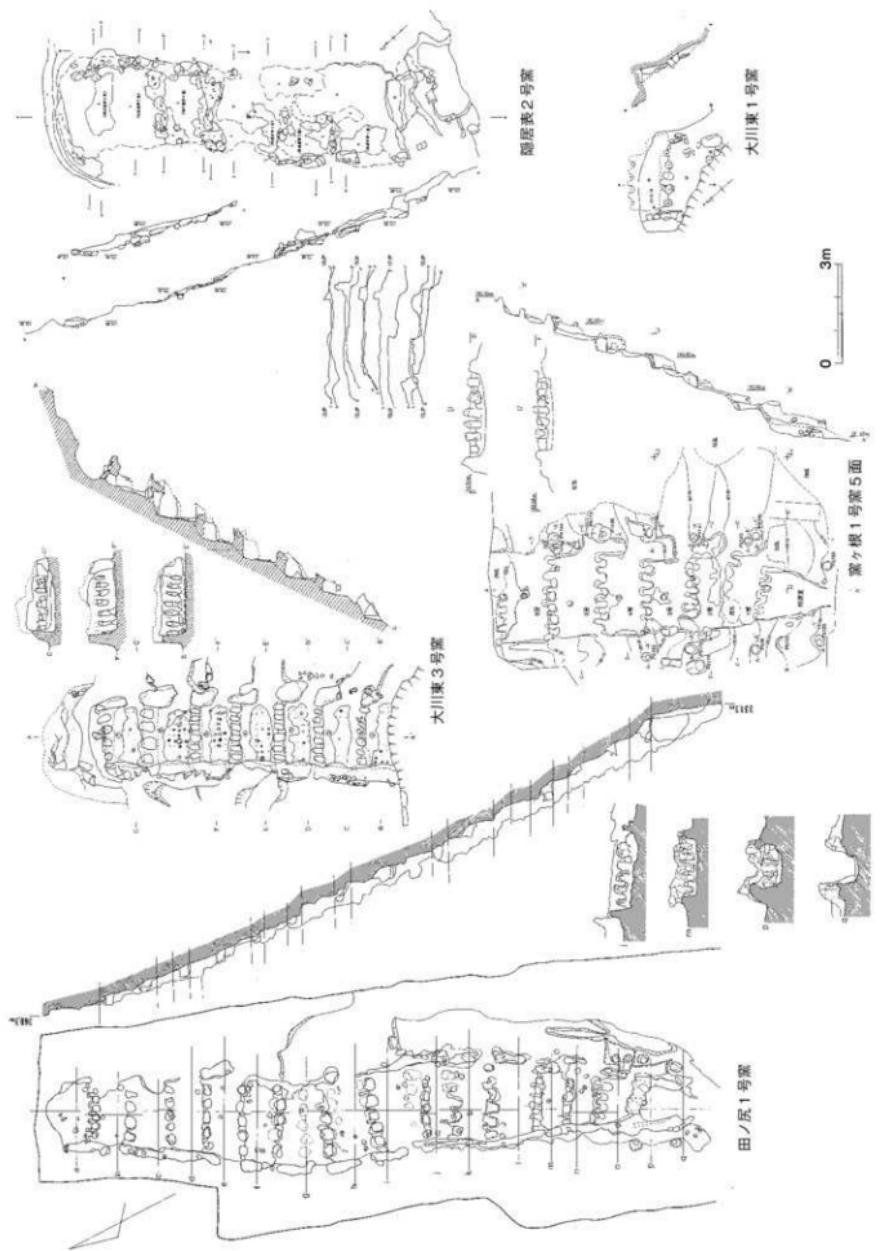


図5 近世美濃窯の連房式登窯実測図 (2) (各報告書より転載)

状況から隔壁を基礎として蒲鉾形にアーチをかけて、昭和の連房式登窯よりも側壁部からの立ち上がりが丸くなると推察されている。出し入れ口は右側にみられ、狹間構造は有段斜狹間構造をもつとされる（桃井1979）。しかし、窯ヶ根1号窯5面と同様の構造がみられる。焼成室の幅は約205cm、奥行きは約100cmである。

大川東3号窯は全長10.6mで、焼成室7室と煙道部が検出されている。煙出しへは花崗岩が用いられている。天井部に棒状のものをかけた痕跡や筵のような跡などが確認されていることから、天井は隔壁から隔壁にかけるアーチのかけ方で、昭和の登窯と同構造のものであると述べられている^(註5)。出し入れ口は全て右側に設けられ、狹間構造は有段斜狹間構造とされる（桃井1979）。しかし、窯ヶ根1号窯4・5面と同様の構造がみられる。狹間柱は匣鉢を積み重ねて周りに粘土を貼り付けて構築していると思われ、狹間孔部分を火床と記している。焼成室の幅は約180~210cm、奥行きは約95~115cm、床面傾斜は約8~19°である。近世美濃窯編年の連房II期に比定されている（橋崎1990）。

②田ノ尻窯

陶町水上に位置する田ノ尻窯は、連房式登窯6基で構成され、1979年に盗掘による破壊に伴い、文化財保護のもとに1号窯の発掘調査が行われている（桃井1981）。田ノ尻1号窯は全長19.68mで、焚口・燃焼室・焼成室14室・煙道部が残存している。第6室目以降、部屋の改修が行われており、部屋の大きさや狹間の位置などを変えていることが確認される。狹間柱は匣鉢や匣鉢片などを粘土で塗り固めて円柱を構築している。天井については、隔壁上部の壁の付き方や江戸時代の絵図から、隔壁から隔壁に蒲鉾状にかけていたものと推測している。狹間構造は有段斜狭間で火床があるとされる（桃井1981）。窯ヶ根1号窯4・5面と類似した狹間構造がみられるが、田ノ尻窯の方が床面傾斜がやや強い。また、火床は燃焼室側の隔壁に沿って溝状に造られていると記載されていることから、狹間孔のことを指している。焼成室の幅は約150~250cm、奥行きは約60~140cm、床面傾斜は約0~26°である。近世美濃窯編年連房II期後半の標式窯である（橋崎1990）。

3. 濑戸窯

瀬戸窯は美濃窯で連房式登窯が導入されたころ、依然として大窯を使用していたことが判っている。そのため、瀬戸窯では当該期に存在した大窯と連房式登窯を紹介する。

（1）赤津地区

近世赤津村の窯業生産は慶長15年（1610）に初代尾張藩主徳川義直が美濃国郷ノ木村から陶工を呼び戻したことから始まるとしている。連房式登窯導入期の発掘事例は少なく、赤津B窯・窯元A窯・瓶子窯・サカイ窯の調査が行われている。

①赤津B窯

赤津B窯は瀬戸市赤津町に位置し、個人用駐車場の造成中に発見され、1985年から1986年に窯体部分の立会調査が行われている（藤澤1986）。残存長は約5.3mで、火炎室と焼成室の周辺が残存する大窯である。焚口底部には礫が埋め込まれている。一般的な大窯の基本構造を有しており、分炎柱・小分炎柱・昇炎壁がみられるが、小分炎柱がなくなった後も稼働していたことがわかっている。焼成室には天井支柱が確認される（藤澤1986・同1993）。近世瀬戸窯編年登窯第1小期の基準資料である（藤澤1998）。

②窯元A窯

窯元A窯は瀬戸市窯元町に位置し、1990年に宅地造成のため発掘調査が行われ、大窯のA1窯、登窯のA2窯、土器焼成窯のA3窯が検出されている（山下1993）。A1窯は残存長5.4mで、A2窯の基礎となっており、また後世の削平から遺存状況が極めて悪い。燃焼室周辺と焼成室のみが残っており、大窯の平面形をもっているが、分炎柱や小分炎柱・昇炎壁が確認されていない。床面に焼台や匣鉢の痕跡が残存することから、燃焼室から焼成室へと直接移行していることが認められる。燃焼室の床面には花崗岩が埋め込まれている（山下1993）。近世瀬戸窯編年登窯第2・3小期に比定されている（藤澤1998）。

A2窯はA1窯を基礎として上層に構築しており、焼成室1室が残存しているのみである。焼成室には粘土を充填した匣鉢が積まれた天井支柱がみられる。狹間柱は粘土塊を円柱状にしたもので、有段斜狹間構造をもつとされる（山下1993）。しかし、窯ヶ根1号窯と同様の狹間構造がみられ、分炎柱の有無は不明である。焼成室の奥行きは約120cm、床面傾斜は約14°である。近世瀬戸窯編年登窯第4・5小期に比定されている（藤澤1998）。

③瓶子窯

瓶子窯は瀬戸市鳳山町に位置し、1998年から2000年にかけて遺跡の内容把握のために調査が行われ、導入期の連房式登窯が2基検出されている（青木2000）。1号窯は残存長15.4mで、前方が大窯、後方が連房式登窯の構造をもち、中央部で連結した平面形である。前方に燃焼室と焼成室を各1室を備え、後方に焼成室6室が確認されている。焚口は幅120~150cmで両側壁に蹠が使用されている。燃焼室と焼成室の境で最大幅を呈し、分炎柱が構築されている。大窯部分の焼成室は後方にいくにつれて窄まり、円柱状のクレを利用した天井支柱が3列にわたってみられる。狹間柱は丸底の匣鉢を積み重ねて、その周りに粘土を貼り付けている。床面の遺存状況は悪く、狹間柱は5本存在したと考えられ、連房部分の出し入れ口は左側に設けられている。狹間は有段斜狹間とされる（青木2000）。残存部から清安寺窯と同様の狹間構造をもつと思われる。大窯部分の床面傾斜は20°で、連房部分の焼成室の幅は約240~290cm、奥行きは約100~110cm、床面傾斜は約15°である。

瓶子2号窯は全長28.3mで、焼成室14~15室から構成されている。燃焼室に造り付けの分炎柱が確認される。焼成室には天井支柱が2本確認され、天井支柱・狹間柱は匣鉢を積み重ねて構築されている。出し入れ口は左側に設けられており、狹間構造は有段斜狹間構造をもつ（青木2000）。焼成室の幅は約250~290cm、奥行きは約95~100cm、床面傾斜は約4~5°である。瓶子1・2号窯は上限を第2小期に、下限を第5小期に比定されている（藤澤1998）。

④サカイ窯

サカイ窯は瀬戸市五位塚町に位置し、2006年に試掘調査が行われ大窯構造の窯が検出された（岡本2008）。トレーニング調査のため、全形は不明であるが、焚口と燃焼室周辺が確認されている。昇炎壁は認められず、分炎柱後方に小分炎柱が構築されている。焚口の床面には板状の石が貼られ、側壁には角柱状の石を積んでいる（岡本2008）。近世瀬戸窯編年登窯第3・4小期に比定されている（藤澤1998）。

（2）上水野地区

上水野地区では、連房式登窯導入期の窯として穴田窯が確認されるにすぎない。穴田窯は瀬戸市穴田町に位置し、1977年から1980年の市史編纂事業に伴い1号窯・2号窯が（山川1981）、2011年には林地保全のための崖地解消工事に伴って3号窯・5号窯が調査されている（金子2014）。

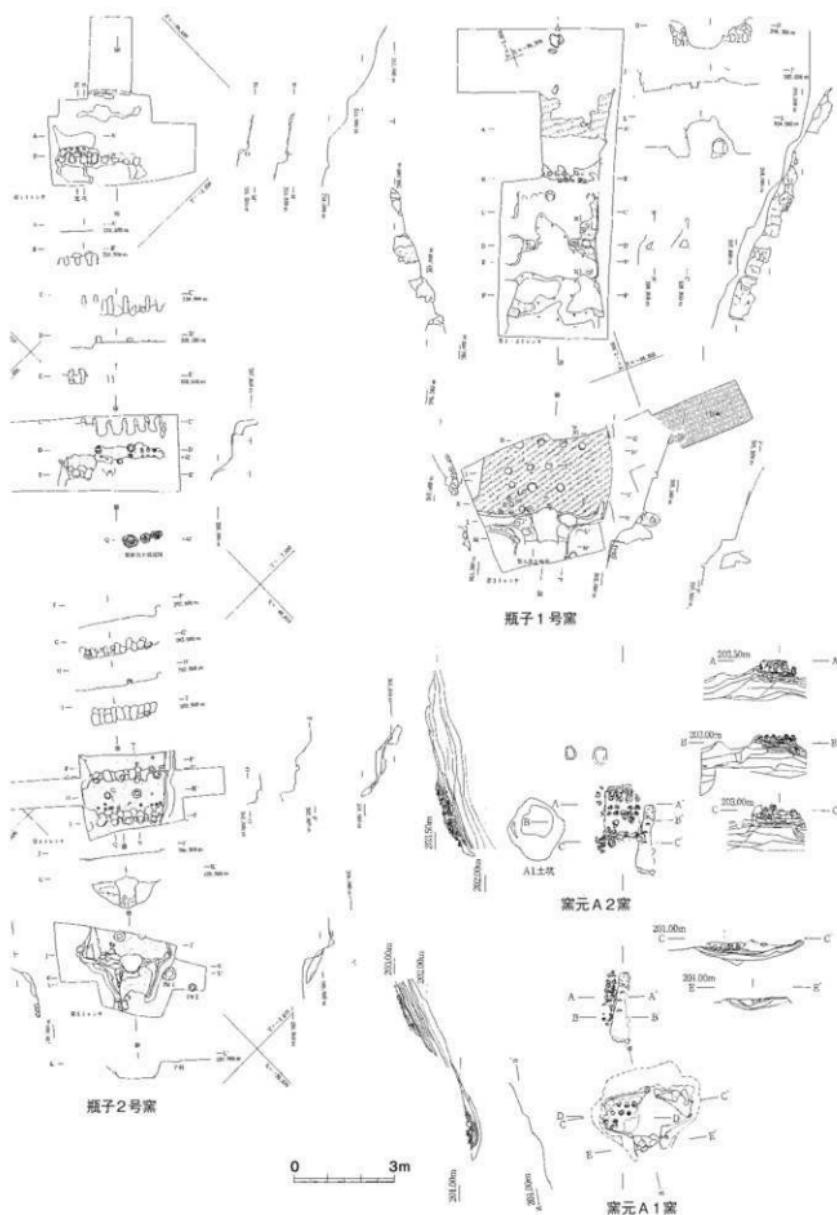


図6 近世瀬戸窯の大窯・連房式登窯実測図(1)(各報告書より転載)

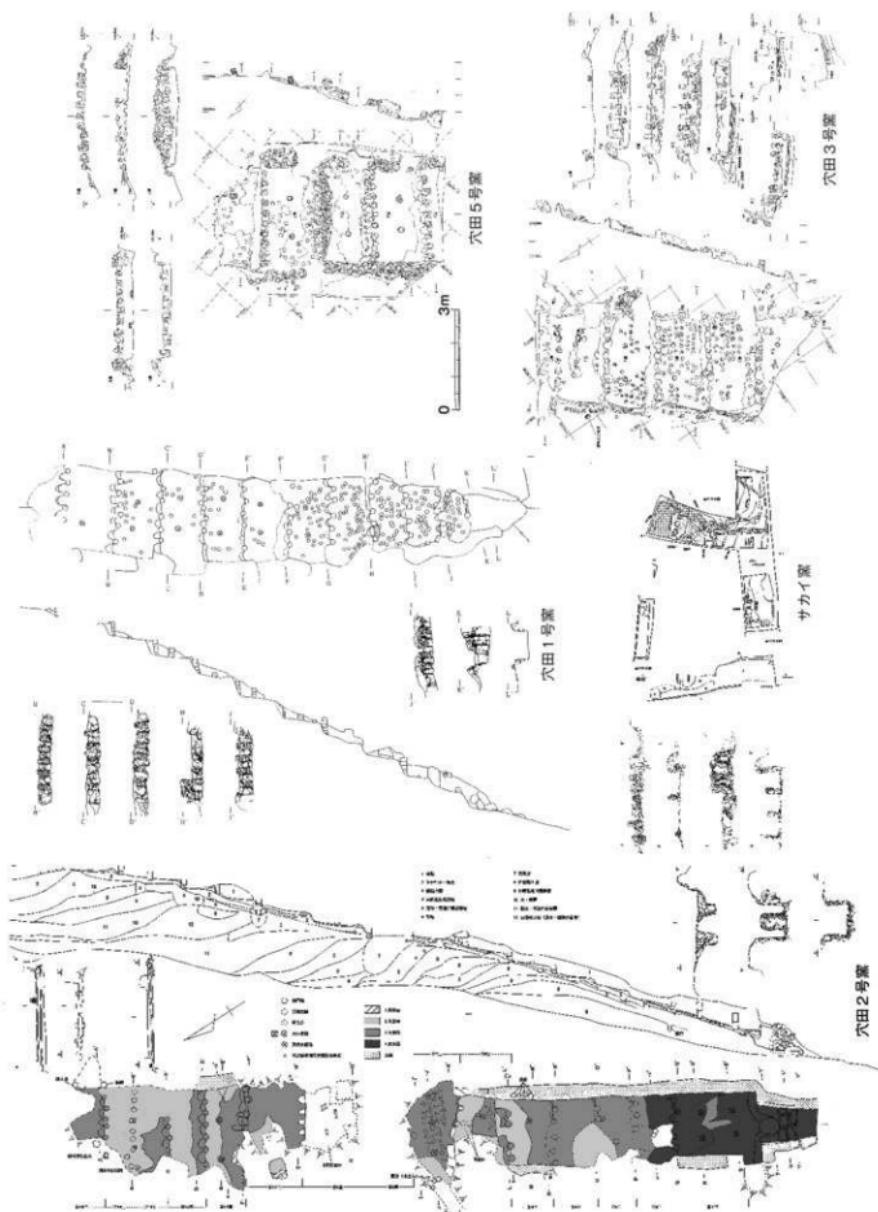


図7 近世瀬戸窯の大窯・連房式登窯実測図（2）（各報告書より転載）

穴田1号窯は残存長14.7mで、焼成室10室が確認され上段にいくほど床面積が広くなっている。第5室以降には天井支柱が焼成室に2本設置されている。狹間柱は匣鉢に粘土を充填させ積み重ねており、さらにその周りに粘土を貼り付けて構築している。出し入れ口は全て左側に設けられており、狹間構造は有段斜狭間をもつとされる（山川1981）。窯ヶ根1号窯4・5面と同様の構造をもつ。焼成室の幅は約160~270cm、奥行きは約60~155cm、床面傾斜は約4~19°である。近世瀬戸窯編年登窯第3小期の基準資料である（藤澤1998）。

穴田2号窯は燃焼室に分炎柱が構築されており、少なくとも3~4回の改造が行われている。1次窯は最下層面で、全長18m、焼成室12室からなる床面傾斜20°前後の無段斜狹間構造であったという。2・3次窯は、焼成室が壁・狹間柱を1次窯と共有するが、床面傾斜はやや緩くなり、さらに第1次窯から焼成室第12室より上段に盛土をし、床面が平坦な3室を増設している。4次窯は最終床面で、全長23.5m、焼成室15室からなり、焼成室の第1~6室の幅を1~3次窯より縮小している。天井支柱・狹間柱は匣鉢や片口に粘土を充填させ積み重ねて構築しているが、焼成室第1室目の支柱は粘土角柱を4カ所に積み上げて天井支柱を造っている。出し入れ口は残存している第1室目は左に、第2~6室目についても右側壁に出し入れ口がみられないことから、左についていたと考えられている。狹間構造は有段斜狭間構造とされる（山川1981）。窯ヶ根1号窯4・5面と同様の狹間構造がみられるが、分炎柱をもつなど異なる様相が確認される。焼成室の幅は約205~260cm、奥行きは約70~200cm、床面傾斜は5~18°である。床面下から出土している遺物が第2小期の基準資料となっている（藤澤1998）。

穴田3号窯は残存長8.84mで、焼成室7室が検出されている。焼成室に天井支柱が2本構築されており、天井支柱・狹間柱は匣鉢に粘土を充填させ積み重ねて構築している。出し入れ口は下方5室が右側、後方1室が左側に設けられており、狹間構造は有段斜狭間構造をもつとされる（金子2014）。しかし、窯ヶ根1号窯4・5面と同様の構造をもっている。側壁は焼成室中央で膨らみ狭間周辺で窄まる形状をとっており、これは窯ヶ根1号窯4・5面と同様の構造をもつ窯跡ではみられないものである。焼成室の幅は260~290cm、奥行きは130~190cm、床面傾斜は9~13°である。近世瀬戸窯編年登窯第3・4小期に比定されている（服部2013）。

穴田5号窯は残存長7.0mで、焼成室5室が検出されているが、後方の2室は後に増設していることが確認される。焼成室に天井支柱が2本構築されており、天井支柱・狹間柱は匣鉢に粘土を充填させ積み重ねて構築している。出し入れ口は全て右側に設けられており、狹間構造は有段斜狭間構造をもつとされる（金子2014）。しかし、窯ヶ根1号窯4・5面と同様の構造がみられる。焼成室の幅は280~320cm、奥行きは140~160cm、床面傾斜は10~14°である。近世瀬戸窯編年登窯第3小期に比定されている（服部2013）。

4. 窯体構造の分類

連房式登窯導入期の窯体構造には大窯と連房式登窯の2種類みられるが、ここでは連房式登窯を扱い、藤澤良祐氏の分類（藤澤2005）を参考にA~E類に分類した。

A類は部屋と部屋の境に明瞭な段をもち、焼成室の最前部に狭間が構築される有段横狭間構造である。A類は狭間の奥に火床がみられ、焼成室の平面形は下方から上方まではほぼ同様の大きさをもつ。A類は焼成室の床面傾斜によりA1類とA2類に分類される。A1類は平均19.5°で、元屋敷窯が該当する。A2類は平均16.8°で、窯ヶ根4号窯が該当する。

表1 連房式登窓計測表

	元屋敷室				窓ヶ棟4号室				窓ヶ棟1号室5面						
	幅	奥行き	狭間孔	傾斜	出し入れ口	幅	奥行き	狭間孔	傾斜	出し入れ口	幅	奥行き	狭間孔	傾斜	出し入れ口
燃焼室	185	245		10							140	160	5	7	
第1室	220	不明	不明	不明	左						210	90	6?	0	右
第2室	245	150	不明	17	右						215	100	7?	14	右
第3室	220	125	7	20	左	削 平				215	90	6?	18	右	
第4室	235	135	不明	20	右						240	130	7	7	右
第5室	235	120	6	21	左						250	120	7	10	右
第6室	240	130	6	21	右						不明	145	不明	16	右
第7室	230	135	7	20	左										
第8室	220	135	6?	21	右	300	170	不明	19						
第9室	230	165	7	17	左	310	170	不明	205						
第10室	210	155	不明	20	右	315	155	8	15						
第11室	215	150	不明	18	左	310	160	9	16						
第12室	245	不明	不明	19	不明	320	170	8	15						
第13室		不	明			315	170	6	15						
第14室		不	明			不明	不明	7?	不明						
第15室／煙道部															
備考/床面傾斜平均		平均19.5					平均16.8					平均10.8			
	窓ヶ棟1号室4面				窓ヶ棟1号室1面				窓ヶ棟2号室						
	幅	奥行き	狭間孔	傾斜	出し入れ口	幅	奥行き	狭間孔	傾斜	出し入れ口	幅	奥行き	狭間孔	傾斜	出し入れ口
燃焼室	140	140	不明	15		130	160	4	14						
第1室	165	100	5	7	右	不明	90	5	不明						
第2室	220	80	不明	6	右	135	90	6	不明						
第3室	230	95	不明	5	右	不明	90	8	不明						
第4室	260	120	7	27?	右	265	130	8	3						
第5室	240	120	7	9	右	280	120	7	0						
第6室	270	120	不明	18	右	不明	150	8?	2						
第7室															
第8室															
第9室															
第10室															
第11室															
第12室															
第13室															
第14室															
第15室／煙道部															
備考/床面傾斜平均		平均9					平均17					平均18			
	清安寺室				八幡室				定林寺西洞2号室						
	幅	奥行き	狭間孔	傾斜	出し入れ口	幅	奥行き	狭間孔	傾斜	出し入れ口	幅	奥行き	狭間孔	傾斜	出し入れ口
燃焼室															
第1室	150	不明	5?	不明	右										
第2室	160	135	5	25	右										
第3室	170	不明	不明	26	右										
第4室	180	不明	不明	不明	右										
第5室	180	不明	不明	不明	不明										
第6室	200	不明	不明	不明	不明										
第7室	200	不明	不明	不明	不明										
第8室															
第9室															
第10室															
第11室															
第12室															
第13室															
第14室															
第15室／煙道部															
備考/床面傾斜平均		平均25.5					平均8.5					平均22.5			
	定林寺西洞3号室				定林寺西洞2号室				定林寺西洞3号室						
	幅	奥行き	狭間孔	傾斜	出し入れ口	幅	奥行き	狭間孔	傾斜	出し入れ口	幅	奥行き	狭間孔	傾斜	出し入れ口
燃焼室	150	80	5	16		125	75	不明	11		65	55	不明	13.5	不明
第1室	不明	不明	不明	11	不明	140	90	4	23		80	60	3	23	不明
第2室	不明	不明	不明	8	不明	175	110	4	24		90	95	3	27	右
第3室	180	120	5?	14	不明	180	140	4	22		135	110	5	29	右
第4室	180	115	不明	12	不明	170	95	不明	19		150	105	4	26	右
第5室	175	110	不明	14	不明	160	160	不明	25		125	100	4	27	右
第6室	180	不明	不明	11	不明	175	155	不明	21		135	110	4	23	右
第7室	不明	不明	不明	9	不明	180	140	不明	12		左との 記載 あり				
第8室	180	115	不明	13	不明	210	110	5	24						
第9室	205	135	不明	8	左?	170	120	不明	16						
第10室	180	90	不明	11	不明	165	135	不明	23						
第11室	195	不明	不明	7	不明	170	110	不明	26						
第12室	195	不明	不明	12	不明	130	105	不明	21						
第13室	195	不明	不明	10	不明	100	不明		28						
第14室						95	80	煙道か?	21						
第15室／煙道部															
備考/床面傾斜平均		平均10.8					平均21.8					平均25.8			

大川東3号室							田ノ尻1号室					瓶子1号室					
	幅	奥行き	狭間孔	傾斜	出し入れ口		幅	奥行き	狭間孔	傾斜	出し入れ口		幅	奥行き	狭間孔	傾斜	出し入れ口
地蔵室							105	165	4	12							
第1室							150	60	5	20	右						
第2室							190	100	6	26	右						
第3室	削 平						185	70	6	12	右						
第4室							245	120	6	13	右						
第5室							240	90	6	14	右						
第6室							230	70	6	17	右						
第7室							250	135	6	21	右						
第8室	210	不明	不明	不明	右		235	130	6	9	右	不明	不明	不明	不明	不明	不明
第9室	210	110	7	8	右		230	130	6	18	右	295	110	7	不明	不明	不明
第10室	190	95	7	12	右		240	140	6	25	右	240	100	7	不明	左?	約15°
第11室	190	105	7	8	右		230	90	6	24	右	245	110	7	不明	左?	左?
第12室	185	95	7	8	右		220	85	6	23	右	不明	不明	不明	不明	左?	左?
第13室	180	115	5	10	右		220	90	5	23	右	不明	不明	不明	不明	不明	不明
第14室	200	95	5	19	右		170	75	7	19	右	削平あるいは未調査					平均15
第15室／便道部	160	10	5				185			15		平均17					平均15
備考／床面傾斜平均	平均10.8						平均9.2					平均9.2					平均10.7
瓶子2号室							穴田1号室					穴田2号室（4次室）					
	幅	奥行き	狭間孔	傾斜	出し入れ口		幅	奥行き	狭間孔	傾斜	出し入れ口		幅	奥行き	狭間孔	傾斜	出し入れ口
地蔵室	110	110	0				110	170	4	11		110	85	5			
第1室	250	不明	不明	0 ?	不明		160	60	5	19	左	260	200	6	18	左	
第2室		未調査					190	85	5 ?	7	左	220	110	不明	15	左?	
第3室	不明	不明	不明	不明	左		205	95	6	10	左	不明	110	不明	12	左?	
第4室	不明	95	不明	4	左		270	115	6	13	左	210	120	6	14	左?	
第5室	不明	不明	不明	不明	左		250	125	7 ?	9	左	205	130	6 ?	19 ?	左?	
第6室		未調査					250	130	7	8	左	不明	140	不明	13	左?	
第7室		未調査					260	120	7	5	左	不明	不明	不明	不明	不明	
第8室		未調査					265	125	6	4	左	削 平					平
第9室		未調査					260	120	7	8	左	不明	不明	不明	不明	不明	不明
第10室	290	100	不明	0	左		255	155	不明	不明	左	不明	170	不明	3	不明	
第11室		未調査										不明	115	7 ?	5	不明	
第12室		未調査										不明	105	不明	不明	不明	
第13室		未調査										不明	100	9 ?	7	不明	
第14室		未調査										不明	70	不明	7	不明	
第15室／便道部	不明	不明	7	5								不明	不明	不明	不明	不明	
備考／床面傾斜平均	† 塗道部ではない						平均23					† 塗道部消失					平均10.7
穴田3号室							穴田5号室					穴田5号室					
	幅	奥行き	狭間孔	傾斜	出し入れ口		幅	奥行き	狭間孔	傾斜	出し入れ口		幅	奥行き	狭間孔	傾斜	出し入れ口
地蔵室																	
第1室		削 平															
第2室		削 平															
第3室		削 平															
第4室		削 平															
第5室	不明	不明	不明	不明	不明												
第6室	260	190	8	不明	右												
第7室	280	145	8	11	右												
第8室	280	140	8	13	右												
第9室	290	140	8	11	右												
第10室	270	130	8	9.5	右												
第11室	不明	不明	不明	不明	左												
第12室		削 平															
第13室		削 平															
第14室		削 平															
第15室／便道部		削 平															
備考／床面傾斜平均	平均11.1						平均11.3					平均11.3					

※各房の最大幅（なお、横幅は狭間柱の上端から下端まで）で計測。遺存状況の悪いものに関しては残っている部分での計測。
実測図から推定のため、5 cm 単位。

B類は部屋と部屋の境に段をもたず、狭間柱および隔壁のみで区切られる無段斜狭間構造である。床面傾斜は平均20°以上で、西洞2号窯・東洞3号窯が該当する。

C類は部屋と部屋の境に段をもち、焼成室の最後部に狭間柱が構築されるもので、次室の床面と狭間柱は密着せず間に幅をもつ有段斜狭間構造である。C類は焼成室の床面傾斜によりC1類とC2類に分類される。C1類は平均20°以上で、清安寺窯・東洞2号窯が該当する。C2類は平均10.8°で、定林寺西洞3号窯が該当する。

D類は部屋と部屋の境に段をもち、焼成室の最後部に狭間が構築され、狭間柱上端が次室の床面と連続し、部屋の最後部から次室の最前部にかけて狭間孔がつながる有段縦狭間構造である。D類は焼成室の床面傾斜によりD1類～D3類に分類される。D1類は平均17°で、田ノ尻窯が該当する。D2類は平均10°前後で、窯ヶ根1号窯5面・窯ヶ根1号窯4面・八幡窯・大川東3号窯・穴田1号窯・穴田3号窯・穴田5号窯が該当する。D3類は平均1.7°で、窯ヶ根1号窯1面が該当する。

E類は分炎柱をもつ連房式登窯で、瀬戸窯のみで確認される窯体構造である。E類には窯体構造にバラエティーがみられる。穴田2号窯・瓶子1号窯・瓶子2号窯が該当する。穴田2号窯と瓶子2号窯は連房式登窯の平面形であるのに対し、瓶子1号窯は窯の前方が大窯の、後方が連房式登窯の平面形および構造をもつ。

最後に近世瀬戸窯にみられる大窯について述べておく。連房式登窯導入期にみられる大窯として、赤津B窯・窯元A1窯・サカイ窯があげられる。赤津B窯は分炎柱・小分炎柱・昇炎壁をもち前代までと同じ大窯の基本構造をもつが、窯元A1窯では分炎柱・小分炎柱・昇炎壁が確認されておらず、平面形のみが大窯構造である。サカイ窯では昇炎壁は確認されず分炎柱・小分炎柱をもつものの、分炎柱の後方に小分炎柱が構築されている。

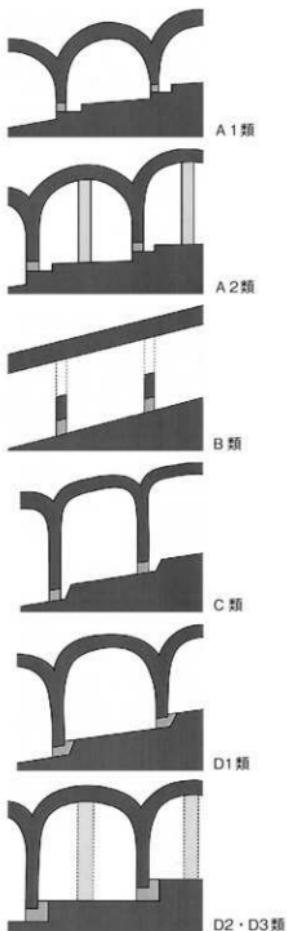


図8 窯体構造の分類図

5. 窯体構造の変遷

(1) 床面および狭間構造の変遷

狭間構造により連房式登窯をA～E類に、さらにA・C・D類を焼成室の床面傾斜によって細分を行った。これらの分類から、狭間構造の変遷を確認していく。

最も古いといわれている元屋敷窯（A1類）と、同じく有段横狭間構造をもつ窯ヶ根4号窯（A2類）を比較すると、元屋敷窯に比べ窯ヶ根4号窯の方が、若干傾斜が緩やかになっていることが判り、時期

が下がるにつれ、床面傾斜が強いものから緩やかになっていく傾向が確認される。元屋敷窯と窯ヶ根4号窯では焼成室の大きさが異なり、窯ヶ根窯では元屋敷窯の約1.5倍の面積を持っている。また、窯ヶ根4号窯では天井支柱が造られるなど、窯体に改良が加えられており、後出的な様相がみてとれる。

窯ヶ根窯の層位的順序を確認すると、窯ヶ根窯では4号窯の上層に1号窯が構築され、1号窯は4回にわたる床面の補修が行われており、最終床面を1面として1～5面が確認されている。よって、A類の方がD類より古いことが明らかである。

西洞2・3号窯の層位的順序は、西洞2号窯の上層に3号窯が構築されていることから、B類からC2類の変遷が確認される。定林寺窯では大窯からの同一工人が時間をおかず、続けて4基の連房式登窯を操業した可能性が極めて高く、B類からC類へと窯体構造が変化していくことが認められる。さらにC類では、C1類とC2類では10°近く傾斜角度が異なるが、焼成室の平面プランが僅かに横幅の方が広いがほぼ奥行きと同じ長さをもつ正方形をとる点や、窯体の平面プランが前方から後方まで同じ大きさで展開している点など類似性がみられる。そのため、C1類とC2類は同時期に構築された窯体構造と考えられる。

これまでの研究から、有段縦狭間構造が最も新しい様相の狭間構造といわれておらず、18世紀代にはこの構造の窯体にはほぼ統一される。D類では、窯ヶ根窯の層位的順序からD2類・D3類の順に変遷していくことが判っているが、床面傾斜からみると窯ヶ根1号窯5面から1面に変わることで、焼成室の床面傾斜が緩くなり、最後にはほぼ水平へと移行する傾向がみられる。よってD1類・D2類・D3類の順に変遷すると考えられる。

(2) 上部構造の変遷

現在、発掘調査の成果から、元屋敷窯・窯ヶ根4号窯は芋虫形（高橋2006）、定林寺西洞2号窯・東洞3号窯は割竹形（古川1974）の上部構造をもつといわれている。割竹形は燃焼室から煙道部まで一貫して造られ直線的な形状をもつ一方で、芋虫形は1部屋ずつドーム状に構築して上部構造が丸みを帯びる特徴がある。元屋敷窯の平面プランをみると、焼成室の側壁が一貫しておらず、焼成室が1部屋ずつ独立した芋虫形の上部構造を有していたと考えられる。芋虫形は支柱をもたなくとも天井が成立するため、元屋敷窯では天井支柱を有していない。しかし、窯ヶ根4号窯は窯体の実測図から側壁が一貫して造られているようにみえる。また窯ヶ根4号窯は天井支柱を有しており、天井支柱は瀬戸美濃大窯が培ってきた独自のものであるため、窯ヶ根4号窯は肥前系の芋虫形ではない可能性が指摘でき、すでに瀬戸・美濃窯独自の改良が加えられているものと考えられる。

関口広次氏が提示した狭間構造および上部構造の模式図（図1）は、熊海堂氏の分類によると朝鮮系は無段斜狭間で割竹形、肥前系は有段横狭間で芋虫形、美濃系は有段縦狭間で横室形をとっていることが指摘される。横室形は芋虫形と異なり側壁と天井を別々に構築するため天井支柱をもつ必要があるが^[注6]、有段縦狭間で横室形と推測される田ノ尻1号窯（D1類）・大川東3号窯（D2類）は天井支柱をもっていない。しかし、瀬戸窯や美濃窯久尻地区のD2類には天井支柱が確認され、地域差があることが認められる。B類は残存する壁の状況から上部構造が割竹形をもつとされ、またC類・D類においても壁が直線的な構造をとっている。

割竹形の連房式登窯は朝鮮系、芋虫形は肥前系であり、それまで瀬戸・美濃窯にはない技術である。美濃窯では両系統の窯が確認され、A類とB・C・D類のつながりは一切認められない。すなわち、B類はA類とは異なる系統をもち、B類・C類・D類は壁・天井構造から同系統のもので、上部構造が割

表2 連房式登窯導入期における窯体構造の変遷

	美濃窯			瀬戸窯		
	久尻地区	定林寺地区	土岐川以南東部	赤津地区(大窯)	赤津地区(速窯)	上水野地区
第1小期前半	元屋敷窯(A1) 窯ヶ根4号窯(A2)		東洞3号窯 西洞2号窯(B)		赤津B窯	
第1小期後半		清安寺窯(C1)	西洞3号窯(C2) 東洞2号窯(C1)			
第2小期			田ノ尾窯(D1)			穴田2号窯(E)
第3小期		八幡窯(D2) 窯ヶ根1号窯5面 (D2)		大川東3号窯 (D2)	窯元A1窯 瓶子1号窯(E)	穴田1号・3号・ 5号窯(D2)
第4小期以降		窯ヶ根1号窯1面 (D3)			サカイ窯 瓶子2号窯(E) 窯元A2窯	

竹形から横室形に、無段斜狭間・有段斜狭間・有段縦狭間へと床面と天井構造が同じく段をもつように型式変化していったと考えられる^(註7)。よって、B類からC類、C類からD類へと型式変化した可能性が極めて高く、B類→C1類・C2類→D1類→D2類→D3類へと変遷するといえる。

(3) 窯体構造の年代観

初期連房式登窯はA類の系統と、B類・C類・D類へと型式変化していく系統があることが確認された。また、瀬戸窯では美濃窯で確認されない分炎柱をもつE類および大窯が確認されるため、窯体構造だけで併行関係を求めるには限界がある。

現在、瀬戸窯では藤澤良祐氏が近世瀬戸窯編年を構築しており、型式によって瀬戸地域の村ごとに編年が行われている。一方、美濃窯では橋崎彰一氏以来の窯式編年によって年代観が組まれているが、窯式編年は特殊品の消長によって設定されているため、村ごとに生産器種の異なる近世では各窯の併行関係が判っておらず、また瀬戸窯との比較においても同様である。そのため、藤澤氏は瀬戸窯・美濃窯に共通してみられる天目茶碗を扱い、型式を設定して編年を行っている（藤澤2017）。

それによると、藤澤氏は久尻地区では元屋敷窯・窯ヶ根4号窯の天目茶碗を、前後関係を考えつつ登窯第1小期前半、清安寺窯を後半、そして定林寺地区では西洞2・(3)号窯を登窯第1小期前半、東洞2号窯を後半に位置付けている。よって、A類の系統はA1類・A2類、B・C・D類の系統ではB類が登窯第1小期前半に、C1類・C2類が登窯第1小期後半に比定される。さらに、瀬戸窯の赤津B窯の天目茶碗を第1小期に位置付けており、窯ヶ根4号窯や清安寺窯と併行すると考えられる。

また、近世瀬戸窯編年では、穴田1・3号窯は遺物から第3小期に比定されている。D1類はD2類より古く、C類より新しい様相がみられることから、D1類は第2小期に、D2類は第3小期に相当するものと考えられ、D3類は第4小期以降に位置付けられる。さらに、E類の穴田2号窯は第2小期に、瓶子1号窯は第4・5小期に、瓶子2号窯は第3小期に、大窯であるサカイ窯は第4小期に比定されている。近世瀬戸窯編年に準じて窯体構造の変遷を整理すると表2になり、藤澤氏の天目茶碗編年と窯体構造の変遷は概ね矛盾しないといえる。

おわりに

美濃窯の久尻地区では、まず登窯第1小期に元屋敷窯(A1類)が導入され、連房式登窯による窯業生産が始まる。その後すぐに、窯ヶ根4号窯(A2類)へと移り、別構造をもつ清安寺窯(C2類)が構築され、有段横狭間の窯体構造は引き継がれなくなり廃絶する。第2小期の窯は調査されておらず^(註8)、

やや時間をおいて第3小期に窓ヶ根1号窯4・5面・八幡窯（D2類）が構築される。なお、窓ヶ根1号窯1面（D3類）は第4小期以降も操業を行っていたと考えられる。定林寺地区では、登窯第1小期に西洞2号窯・東洞3号窯（B類）が構築され、その後、西洞3号窯（C1類）・東洞2号窯（C2類）へと変わっていく。土岐川以南東部では、登窯第2小期に田ノ尻1号窯（D1類）が、第3小期には大川東3号窯（D2類）が構築される。なお、土岐側以北南東部では第1小期の窯体構造は不明である。

瀬戸窯の赤津地区では、大窯と連房式登窯が併行して存在している。大窯はまず、登窯第1小期に赤津B窯が、第2・3小期には平面形のみに大窯構造がみられる窯元A1窯がみられる。第4小期にはサカイ窯が確認される。連房式登窯は遅くとも第3小期に、大窯と連房式登窯が組み合わされた瓶子1号窯が登場する。第4小期には分炎柱をもつ連房式登窯の瓶子2号窯がみられる。上水野地区では、赤津地区と異なり近世の大窯はみられない。登窯第1小期の窯は確認されず、第2小期になると分炎柱をもつ連房式登窯の穴田2号窯（E類）が構築される。その後、第3小期には穴田1・3・5号窯が構築され、これらは美濃窯にみられる有段縦狭間構造の連房式登窯と同様の窯体構造をもつ^{註9)}。すなわち、瀬戸窯では第1小期は依然として大窯が構築され、第2小期になると連房式登窯が登場するものの分炎性が残り、第3小期以降にも大窯と連房式登窯が併行して操業している。

本稿によって、連房式登窯導入期には美濃窯と瀬戸窯、また村ごとにも窯体構造に地域差がみられることが明らかとなった。上部構造から有段横狭間（肥前系）と、無段斜狭間（朝鮮系）、有段斜狭間、有段縦狭間は異なる系統であることを指摘したが、連房式登窯の導入当初は肥前系と朝鮮系の窯が別地区で成立したもの、後に久尻地区では両系統の窯が存在している。定林寺西洞3号・東洞2号窯の狭間柱と床面の段差との間にみられる凹みは、同構造をもつ久尻地区的清安寺窯にも確認され、これは火床ではないものの、有段横狭間にみられる火床を意識して造られた可能性がある。また、美濃窯では第2小期に土岐川以南の東部で、久尻地区や定林寺地区でみられたB・C・D類系列の窯体構造が確認され、瀬戸窯では第3小期には既に美濃窯と同様の窯体構造がみされることから、遅くともこのころには元屋敷窯の時期に秘密にされていた窯の構造は公になっていったと考えてよいであろう。

（註1）元屋敷窯は昭和初期に発見された「唐津窯取立之由来書」により、朝鮮から導入された肥前の登窯を模して茶窯されたことが指摘されており、元屋敷窯は肥前の飯洞庵下窯と同じく横狭間構造の窯であることが明らかとなった。そして、調査を行った結果、加藤土蔵萌氏は肥前の割竹形の上部構造を有するとされる飯洞庵窯や道場屋谷窯と元屋敷窯は同形式の窯体をもっているという見解を示している（加藤1963）。

（註2）当時、有段連房式横狭間に含まれていた定林寺東洞3号窯・西洞2号窯を、その後の『美濃の古陶』では無段斜狭間構造と名付けている（古川1976）。

（註3）定林寺西洞3号窯・東洞2号窯はこの時点で、有段連房式横狭間登窯に含まれているが、大川東窯・田ノ尻窯が調査されたことによって、有段斜狭間構造として認識されるようになる。

（註4）窓ヶ根4号窯も調査が行われている。3号窯は残存長33cmで、窯体の大半は消失し、燃焼室から焼成室2室のみが残存する。燃焼室・1室の床面全体に狭間柱が列をなして配置されており、狭間柱は円柱状のもので、直方体ものは窯体内に詰められたもののみに確認される。また出し入れ口は各部屋の右側に設けられ、狭間構造は有段縦狭間をもつとされる（高橋2006）。窯ヶ根1号窯4面とほぼ同じ構造となる。焼成室の幅は約130~145cm、奥行きは約65cm、床面傾斜は7~14°である。

（註5）田口昭二氏は隔壁と側壁の状況から大川東3号窯の天井構造を「芋虫形」としている（田口1979）。

（註6）窓ヶ根4号窯は天井支柱を焼成室の中央に1本有しており、上部構造が芋虫形ではないものの、D類の上部構造とは異なる可能性がある。

（註7）瀬戸・美濃窯では前代まで大窯を構築しており、倒炎式の窯構造を有していた。この知識をもっていた陶工たちは、当然ながらより燃焼効率のよい窯を求めて改良を加え、瀬戸美濃窯独自の有段縦狭間の連房式登窯に造り変えていったであろう。

（註8）なお、藤澤氏の編によると、隠居表2号窯でみられる天目茶碗は登窯第1小期後半に位置付けられる（藤澤2017）。隠居表2号窯は遺存状況が悪く、狭間構造が不明であるが、残存部からC1類あるいはD1類に分類される。前者であれば第1小期後半に、後者であれば第2小期に位置付けられるだろう。

（註9）なお、美濃窯では第4小期以降に比定される窓ヶ根1号窯1面で天井支柱が焼成室に2本構築されているが、瀬戸窯では第2・3小期に比定される穴田2号窯・1号窯で既に天井支柱を2本もつようになり、美濃窯よりも早い変化が窺われる。

《引用・参考文献》

- 加藤土師萌1953「唐津窯と織部窯」「陶説5 織部」日本陶磁協会
- 大江拿1970「土岐市中央道自動車道開通跡埋蔵文化財発掘調査報告書」土岐市教育委員会
- 大江拿1971「窯ヶ根古窯址 中央自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書」土岐市教育委員会
- 吉川庄作1974「日本のやきもの 12 美濃」淡交社
- 吉川庄作1976「江戸時代の陶器」「美濃の古陶」光琳社
- 今井静雄1976「美濃の古窯址の分布と出土品」「世界陶磁全集 5 桃山(二)」小学館
- 田口昭二1979「*XI 後論*」「大川東窯 第3群発掘調査報告書」瑞浪市教育委員会
- 桃井勝1979「IV 窯体構造」「大川東窯 第3群発掘調査報告書」瑞浪市教育委員会
- 岡口広次1979「美濃・妙寺大窯の復元とその構造について」「物質文化33」物質文化研究会
- 桃井勝1980「日本のやきもの集成 3.瀬戸 美濃 飛驒」平凡社
- 山下一年1981「第3章 造構」「穴田第1・2号窯発掘調査概要」瀬戸市教育委員会
- 桃井勝1981「第3章 1号窯の窯体構造」「田ノ尻古窯跡群発掘調査報告書」瑞浪市教育委員会
- 藤澤良祐1986「瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要」V 瀬戸市歴史民俗資料館
- 藤澤良祐1988「瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要」VI 瀬戸市歴史民俗資料館
- 柄崎彰一1990「第6章 総括」「尾邑」瀬戸市教育委員会
- 加藤真司1992「第3章 造構」「隠居表1・2号窯発掘調査報告書」土岐市教育委員会
- 藤澤良祐1993「瀬戸市史」陶磁史篇四 瀬戸市
- 山下峰司1993「第2章 造構」「窯元A 塚跡」御瀬戸市埋蔵文化財センター
- 熊海堂1995「東亜窯業技術発展と文政史研究」南京大学出版社
- 今井静雄1997「近世の窯業」「土岐津町誌」土岐津町誌編纂委員会
- 藤澤良祐1998「瀬戸市史」陶磁史篇六 瀬戸市
- 青木修2000「第3章 検出造構」「瓶子窯跡」御瀬戸市埋蔵文化財センター
- 加藤真司2000「第3章 造構」「八幡窯跡発掘調査報告書」土岐市教育委員会・御土岐市埋蔵文化財センター
- 加藤真司2002「元屋敷陶器窯跡発掘調査報告書」土岐市教育委員会・御土岐市埋蔵文化財センター
- 加藤真司2003「第3章第1節 元屋敷窯と周辺の調査」「元屋敷陶器窯跡発掘調査報告書II」土岐市教育委員会・御土岐市埋蔵文化財センター
- 藤澤良祐2005「近世の瀬戸・美濃窯一窯構造と窯道具の様相を中心にして」『窯構造・窯道具からみた窯業―関西窯場の技術的系譜をさぐる―』関西陶史研究会
- 高橋健太郎2006「窯ヶ根窯跡発掘調査報告書―平成13年度・14年度の調査成果―」御土岐市埋蔵文化財センター
- 岡本直久2008「第6節 サカイ・奥白模窯跡」「瀬戸窯―瀬戸市内重要遺跡試掘調査報告―」財団法人 瀬戸市文化振興財团
- 服部都2013「穴田古窯跡群」「市内遺跡発掘調査報告書VI 品野中部道路・穴田古窯跡群・石田遺跡」公益財団法人 瀬戸市文化振興財团
- 金子健一2014「穴田窯跡I―遣構編―」公益財団法人 瀬戸市文化振興財团
- 藤澤良祐2017「付編1 連房式登窯導入期における天目茶碗について」「大宣窯跡群・七田窯跡第1次発掘調査概要報告書」愛知学院大学文学部歴史学科



トレンチ調査前全景（北から）



A区完掘後（南東から）



A区完掘後（西から）

図版1 トレンチ全景・A区関係（1）



A区西壁（南東から）



A区1号窯左側壁（東から）



A区1号窯右側壁（西から）

図版2 A区関係（2）



A区天井支柱（南から）



A区床面（南西から）



B区完振後（北から）

図版3 A区関係（3）・B区関係（1）



B区西壁（南東から）



B区床面（南から）



B区天井支柱（南から）

図版4 B区関係（2）



C-1区完掘後（南から）



C-1区西壁（北東から）



C-1区天井支柱（南から）

図版5 C-1区関係



C-2区完掘後（南から）



C-2区完掘後（北から）



C-2区西壁（東から）

図版6 C-2区関係（1）



C-2区北西隅完掘後（東から）



C-2区2号窯右侧壁（西から）



トレンチ完掘後（南から）

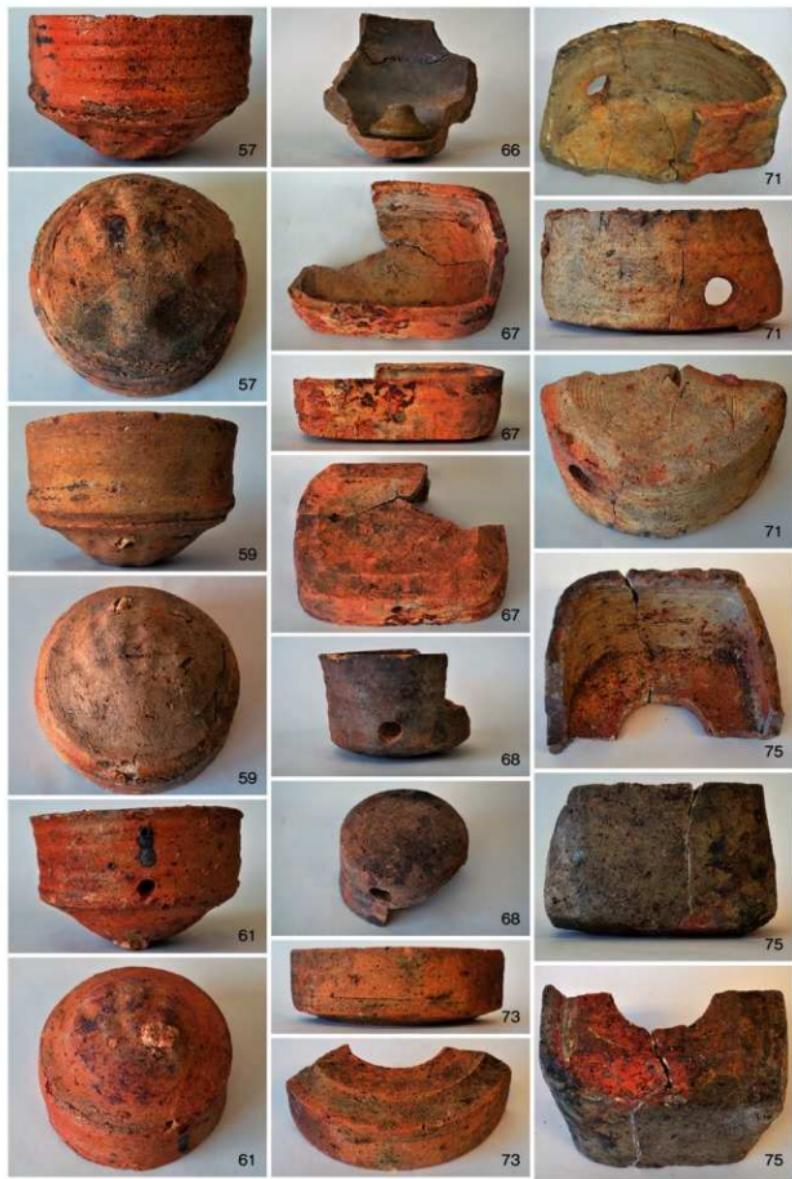
図版7 C-2区関係（2）・完掘後全景



図版8 第1次調査出土遺物（1）



図版9 第1次調査出土遺物（2）



図版10 第1次調査出土遺物（3）



図版11 第1次調査出土遺物（4）



図版12 第1次調査出土遺物（5）



図版13 第1次調査出土遺物（6）

報 告 書 抄 錄

ふりがな	おおがやかまあとぐん やしちだかまあと							
書 名	大萱窯跡群 弥七田窯跡第1次調査発掘調査概要報告書							
副書名								
卷 次								
シリーズ名	愛知学院大学考古学発掘調査報告							
シリーズ番号	24							
編著者名	藤澤良祐・森まさか・森村知幸・伊藤真央・上田悠太・木藤穰・小林万容 佐藤美鈴・鈴木愛実・高野夏姫・堀内有・三ツ本樹純・井上雄介・勝野友陽 加藤竜生・田口芽依・中田智也・長繩憲治・前田真奈・松岡里奈・脇田遼							
編集機関	愛知学院大学文学部歴史学科							
所在地	〒470-0195 愛知県日進市岩崎町阿良池12				TEL 0561-73-1111			
発行年月日	平成29年3月31日							
所取遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
弥七田古窯跡	岐阜県可児市 久々利253-1	21214	04886	35度 23分 55秒	137度 08分 24秒	20150817 ~20150827	約16m ²	学術研究
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
弥七田古窯跡	生産遺跡	近世	窯体2基 (1号窯 ・2号窯)	天目茶碗・丸碗・端反碗 中皿・向付・擂鉢・片口 灯明皿・匣鉢・焼台・ハリ			1号窯は 狭間が無い 連房式登窯	

愛知学院大学考古学発掘調査報告24
大萱窯跡群 弥七田窯跡第1次調査発掘調査概要報告書

発行日 2017・3・31

発行者 愛知学院大学文学部歴史学科

〒470-0195 愛知県日進市岩崎町阿良池12

Tel (0561) 73-1111 Fax (0561) 73-8179

編集 考古学コース 藤澤良祐・森まどか・森村知幸・伊藤真央

印刷 株式会社 あるむ
